歴史に名を残した
朝鮮の女性たち

歴史に名を残した朝鮮の女性たち

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ100（2011）年

はじめに

朝鮮民族は人類の黎明期から現在の地で歴史を作り、文化を発展させてきたが、女性はいつの時代にも、女というだけの理由で、社会的にも、家庭的にも大きな束縛を受けてきた。そうしたなかでも彼女たちは、愛国・愛族行為やすぐれた才能、高尚な徳行によって、歴史の流れのなかにさまざまの形で明確な足跡を残している。

反侵略闘争に身を投じ、或いはすぐれた文芸作品を残した女性、夫を助け、子女を立派に教育することで社会の発展と反侵略愛国闘争に貢献した女性、父母に孝養を尽くし、わが子を大成させて名をなし、夫婦の情と節義、志操と徳行、美貌と愛、深い思慮と道徳で知られた昔日の朝鮮女性についての話は数多い。

古朝鮮から高麗（コリョ）時代までの数千年の歴史の流れのなかで、建国に功労のあった女性など朝鮮女性の剛直な気象と節操、美徳をたたえた史話は少なくない。

東方最初の古代国家朝鮮、朝鮮史上最も強大であった最初の封建国家にして千年強国の誉れ高い高句麗（コグリョ）、朝鮮最初の統一国家として世界に名声を馳せた高麗などの建国は、それぞれの始祖王を生み育て、大業の成就へと向かわせた、檀君（タングン）の母親熊女（コムニョ）と夫人神女（シンニョ）、高句麗東明（トンミョン）王の母親柳花（リュファ）と夫人礼（レ）氏、高麗太祖王建（ワンゴン）の母親夢（モン）夫人と王后柳（リュ）氏などを抜きにしては考えられない。

生まれ育った故郷と祖国への熱愛をもってわが子たちを反侵略闘争に立ち上がらせた高句麗の鹿足夫人、「馬鹿の温達（オンダル）」を将軍に押し立てた平岡（ピョンガン）公主、男装で侵略軍と戦い撃破した高麗の女性武将雪竹花（ソルチュクファ）、わが子を武人に育成した金淑興（キムスクフン）の母親、火薬兵器の製造・改良に功のあった崔茂宣（チェムソン）の夫人たちに対しても、歴史は誇り高く記録している。

また、古代に『箜篌（くご）引』を作詞作曲して古朝鮮女性の高い音楽創作水準を内外に誇示した女流音楽家麗玉（リョオク）、11 世紀の著名な音楽舞踊家楚英（チョヨン）、真卿（チンギョン）らもおれば、いかなる権勢や財宝にも目をくれず、節義・志操を固く守った都彌（トミ）の妻と桃花女（トファニョ）など、朝鮮女性の美しくも高尚な内面世界のあれこれについての話は、今日までそのままに語り伝えられている。

李（リ）朝時代は、家庭的・社会的に差別され人身的束縛を受けていた女性たちが果敢に社会の舞台に登場した時代として特徴づけられている。

当時代の歴史は、反侵略闘争に花のような青春を捧げた桂月香（ケウォルヒャン）、論介（ロンゲ）、李寛麟（リグァンリン）、柳寛順（リュグァンスン）、それに戦場へ向かう夫を助け励ました李舜臣（リスンシン）、郭再佑（クァクチェウ）らの妻、民族の啓蒙・発展にとって有益な事業をいろいろと行った白善行（ペクソンヘン）など、朝鮮女性の愛国心を後代に伝えている。

両班貴族の家門から奴婢の身分に至る各階層の女性は、社会的問題や自己の生活感情を反映した特色ある文芸作品を著わすことで、李朝時代の文壇を豊かに飾った。16 世紀の不合理な社会相を批判し、働く女性に同情を寄せた詩を数多く詠んで内外に名声を馳せた許蘭雪軒（ホランソルホン）、19 世紀に「女流詩社」を立ち上げて独特な詩才を誇示した金錦園（キムグムウォン）と芙蓉（ブヨン）、人民の近代的志向を反映した 50 編の国文詩歌を世に出した崔松雪堂（チェソンソルタン）らは、その代表的な女性である。

李朝時代には、女流詩人のみでなく、女性の小説家や学者も登場した。また、申師任堂（シンサイムダン）、黄真伊（ファンジンイ）、李梅窓（リメチャン）のように詩はもとより、書画、音楽などにも長けて名を広く知られた多才多能な女性たちが活躍して、時代を輝かせた。

わが子の大成をはかって苦心し、真心を尽くした名筆韓石峯（ハンソクボン）の母親や小説家金万重（キムマンジュン）の母親など、良心と信義、勤勉と徳行をもって、子女教育に努めて名を残した女性も多い。

本書『歴史に名を残した朝鮮の女性たち』は、古代から近代に至る数千年の朝鮮史に名をとどめた多くの女性のうち代表的な人物を選び、その生涯と業績を断片的に紹介している。

本書には、『三国史記』『高麗史』『李朝実録』などの史書やその他の古書に基づき、さらには野史や説話なども参考にして、年代順に以上の内容が叙述されている。

目　　次

1．民族の始祖檀君の母親—熊女……………………………… 1
2．檀君の妻—神女……………………………………… 4
3．古朝鮮の音楽家—麗玉……………………………… 6
4．東明王の母親柳花…………………………………… 8
5．東明王の后礼氏……………………………………… 12
6．高句麗、百済の建国と召西奴………………………… 15
7．楽浪公主……………………………………………… 20
8．平岡公主……………………………………………… 24
9．高句麗の鹿足夫人…………………………………… 28
10．高麗太祖王建の母親夢夫人…………………………… 31
11．高麗の建国と神恵王后……………………………… 34
12．愛国名将金淑興の母親李氏…………………………… 38
13．女傑雪竹花…………………………………………… 42
14．舞踊家楚英と真卿…………………………………… 45
15．鄭夢周の母親李氏…………………………………… 47
16．内助の功で知られた李氏…………………………… 53
17．詩人金林碧堂………………………………………… 60
18．死をもってわが子を世に押し立てた楊士彦の母親………… 62
19．多芸多才で世に知られた申師任堂…………………… 67
20．「松都３絶」の一人黄真伊…………………………… 72
21．韓石峯の母親………………………………………… 82

22. 李恒福の母親崔氏…………………………………… 87

23. 詩人蓬原府夫人鄭氏………………………………… 92

24. 洪瑞鳳の母親柳氏…………………………………… 94

25. 詩聖許蘭雪軒……………………………………… 99

26. 紅衣将軍夫人李氏…………………………………… 104

27. 奴婢から身を起こした武官劉克良と玉壺………………… 107

28. 李梅窓………………………………………………… 113

29. 桂月香………………………………………………… 116

30. 作家金万重の母親尹氏………………………………… 119

31. 「高ドリョン」の妻朴氏………………………………… 125

32. 詩人徐令寿閣……………………………………… 130

33. 女流学者李憑虚閣…………………………………… 134

34. 詩人金三宜堂……………………………………… 136

35. 姜静一堂…………………………………………… 138

36. 詩人金錦園………………………………………… 140

37. 独特な詩才によって令名を馳せた芙蓉…………………… 147

38. 詩人崔松雪堂……………………………………… 151

39. 朝鮮独立軍の女傑李寛麟……………………………… 155

40. 3.1 運動の殉国の娘柳寛順 …………………………… 159

41. 作家姜敬愛………………………………………… 162

42. 白善行……………………………………………… 165

1．民族の始祖檀君の母親―熊女

檀君（タングン）は、前 30 世紀初め、東方で最古の国家朝鮮を建てた民族の始祖である。歴史の発展に尽くしたもろもろの人物と同様、朝鮮民族の始祖檀君にも、彼を生み育てた慈しみ深い母親がいた。

史書『三国遺事』『帝王韻紀』『世宗実録』などには、檀君の出生と母親熊女（コムニョ）についてのかなり神秘化された叙述がある。

『三国遺事』（巻 1、紀異 2　古朝鮮条）の「檀君神話」には、こう記されている。

「同じ洞に住んでいた 1 匹の熊と 1 匹の虎が天帝の子桓雄（ファンウン）に、自分たちを人間に変えてほしいと哀願した。桓雄が霊験あらたかなヨモギ一束とニンニク 20 個を彼らに与えてこう言った。『これを食べて 100 日間日の光を見なければ、容易に人間の姿になるであろう』　それらを食べて 100 日間日光を見ないで辛抱した熊は人間の女となったが、虎は辛抱強く待たなかったために人間になれなかった。熊女は婚姻の相手がいなかったので、神檀樹の下で子供を身籠らせてほしいと祈った。このとき、しばらく人間の姿をした桓雄が彼女と交わり、子をはらませた。熊女は生まれた子の名を檀君王倹（ワンゴム）とした」

以上の話は長い伝承の中で脚色されて神話の形態をとるようになったが、近年発掘された檀君陵の考古学的考察と結びつけてみると、その内容は歴史的事実として次のように解釈することができる。

今を去る 5000 余年前、大同江（テドン）の流域、大小の山や肥沃な平地の広がる山紫水明の、物産豊かな平壌（ピョンヤン）地方に住んでいた種族は、明るい太陽の照る故郷の地を愛し、明るいという意味の語「パクタル」を種族名としていた。

檀君の父親はこのパクタル族の種族長であり、母親は近隣の熊を族名とする種族の長の娘であった。檀君の母親の生きた時代は、朝鮮原始社会の崩壊末期である前 31 世紀末～前 30 世紀初めに当たる。

熊種族長の娘熊女は父親の保護のもと、その美しい容姿で若者たちを引きつけながら幸福に育った。パクタル族の種族長桓雄もこの美貌の娘に引かれ、彼女をめとることで種族連合を実現させようとした。こうして桓雄と結婚した熊女は、檀君を生み育てて、その名を歴史に残すことになった。

桓雄夫妻は息子の出生を祝って盛大な祝賀宴を催し、わが子の名をパクタル族連合体酋長の子という意味で「パクタルの子」と呼んだ。熊女は、パクタル族連合体酋長の後継者たるべきわが子を、豪勇な武人に育てるため心血を注いだ。

檀君が十の年のある日、熊女は息子を前にして、父親の後を継いで種族連合体を統率するためには、武術の練磨に心がけることが第一だと言い聞かせた。母親の訓戒を肝に銘じた檀君は、早速赤い山という意味のプルメの谷にこもって学問と武術の練磨に励んだ。プルメは後日、「檀君の修業場」と名づけられた。以前は山鳥のさえずる声しか聞かれなかったプルメの谷間で、日中は檀君の矢を射る音、剣を振る音がこだまし、夜は文読む声が朗々と響き渡った。

親の膝下を離れてからいつしか 1 年が経った。ある日檀君は、いっときも早く己れの武術の腕前を父母に見せたくてわが家に帰った。熊女は 1 年ぶりに帰って来たわが子を抱きしめたかったが、かろうじて思いとどまり、そのまま山へ送り帰した。息子の孝心はうれしかったが、それ以上に、種族連合体を統率するに足るすぐれた酋長に成長してほしいという願望が強かったのである。

それから数か月経ったある日、熊女は優良種の馬（後日「麒麟馬」と呼ばれた）1

頭を引いてわが子の修業場を訪れた。息子の腕をわが目で確かめたかったのである。しばらく前まで前人未踏の密林であったその谷間が、馬に踏み荒らされた草地や、剣で枝を切り払われた裸の木が林立しているのを見ると、檀君の熱心な練習ぶりが目に見えるようであったが、熊女はわが子をこうたしなめた。

「お前が本当に武術に励んでいたのなら、草がこんなに育つはずがない。それに武術の練磨は腕を磨くことだけでなく、強い意志を養うことにあるということを忘れずに、わたしが帰った後もしっかりと修業に励むのだよ。ほら、この馬はお前のために引いて来たのよ」

「お母さんの教えをしっかり守ります」

その後、檀君は握った手綱に力を入れ、長剣を縦横に振るって武術の修業にいっそう励んだ。

歳月は流れて檀君は文武兼備の堂々たる若者に成長し、父親の後を継いでパクタル族連合体の酋長となった。

檀君の母親は、神誌（シンジ）、蚩尤（チウ）、高矢（コシ）、懈月（ヘウォル）、朱因（チュイン）らの側近に助けられて、原始的な政治機構を特権階級の利益を擁護し、種族間の連合を支える権力機関に作り変えることで、強力な法と軍隊を持つ国家を設けるための檀君の活動を積極的に助けた。

こうして檀君は、前 30 世紀初め、東方最古の国家朝鮮をうち建てた。

「パクタルの子」という名はその後、古朝鮮（後世の朝鮮と区別するためこう呼んでいる）を建てたパクタル族の王という意味で檀君（明るいという「パクタル」には発音上檀（マコミ）という意味がある）と呼ばれるようになった。

檀君による古朝鮮の建国、これは朝鮮民族が、東方で初めて原始社会にピリオドを打ち、他に先んじて国家時代、文明時代に入ったことを意味し、朝鮮民族形成の画期

的契機をもたらした出来事となった。

このように熊女は、民族の始祖檀君を生み、立派に育てたことで、朝鮮民族の歴史に輝かしい記録を残した最初の女性となったのである。

2．檀君の妻—神女

古朝鮮の建国者、朝鮮民族の始祖檀君（タングン）の妻神女（シンニョ）は、平壌（ピョンヤン）西方の大同（テドン）江に沿った非西（ピソ）岬（カプ）地方の種族長河伯（ハベク）（河伯とは、元来、河を支配する水神の意である）の娘であった。

神女は上品で容姿にもすぐれ、近隣の他種族にも広く知れ渡った娘であった。神女の噂は、平壌地方のパクタル族の酋長檀君の耳にも入り、やがては彼女のことが忘れられなくなった。

当時、毎年春ともなれば、大同江岸の原野では種族・氏族間の狩猟競技が盛大に催されていた。

麒麟馬にまたがって競技に出場した檀君は、ここではじめて神女に出会った。飛び立つ雁のようなすらりとした姿態に、十五夜の月のように明るい顔立ち、恥ずかしげに自分を見つめる濡れた瞳、何かをささやくかのような小さな口元。見るほどに心を引かれる娘であった。競技で優勝した檀君を祝って喜ぶ神女。二人の視線がぶつかってからは、月影の下で愛をささやくまでになった。

恋心が深まるにつれて、神女には一つの心配事が頭をもたげた。当時パクタル族連合体の勢力はいよいよ拡大して、近隣の氏族や種族を次つぎに統合していた。非西岬種族ももちろんその対象であった。神女は檀君の意図を知り、恋人の決心を強く支持

しながらも、父親が自分たちの結婚を許さないのではなかろうかと恐れた。

　檀君は、愛する神女の父親の配下にある非西岬種族を何とか平和裏に統合できないものかと考え、礼節が正しく弁舌巧みな部下朱因（チュイン）を非西岬の族長河伯のもとへ送った。朱因は河伯に檀君の挨拶を伝え、多くの青銅製琵琶型短剣や金銀の装身具を贈ったうえで、両種族間の連合の必要性を説き、檀君と神女の婚姻問題にも触れた。高価な贈り物を差し出し、ねんごろに説き進む朱因の慎ましやかな態度に河伯は感嘆し、この一帯で最も権威がある種族連合体の酋長パクタルが娘の配偶者になると思うと悪い気がしなかった。パクタル族と手を結べば、非西岬族は安泰であり、娘にもよいと考えたからである。河伯は娘の婚姻に同意し、その秋、豊年を迎えた両種族は、檀君と神女の結婚式を盛大に挙げた。

　檀君の妻となった神女は、周辺種族との連合を拡大する檀君の活動を物心両面から助けて建国の大業に大きく寄与したばかりか、息子の夫婁（プル）、夫蘇（プソ）、夫虞（プウ）、夫余（プヨ）の 4 人を生んで立派に育て、檀君の代をしっかりと継ぐようにした。長子の夫婁は、国家の全般的管理と事務を統括する虎加の官職について活動し、檀君の死後古朝鮮の第 2 代王となった。次男夫蘇は鷹加（刑罰担当長官）、3 男夫虞は鷺加（保健担当長官）、4 男夫余は狗加（地方担当長官）の官職をもって檀君の活動を補佐した。

　1993 年、平壌市江東（カンドン）郡にあった檀君陵では、檀君夫妻の遺骨が発掘調査された。遺骨は石灰岩地帯の湿気と地下水の影響を受けて、かなりに化石化した 68 個の骨からなっていたが、主に男女の腕、脚の骨と骨盤であった。男の骨は檀君のものであり、女のそれは妻神女のものであった。骨を鑑定した結果、檀君は背丈の高い立派な体格の人物であり、まれに見る長寿者であったことが判明した。一方、檀君の妻はかなり若い年であったとわかった。このことから檀君は実在した人物であり、檀君の人生の伴

侶神女の存在も確認されたのである。

朝鮮民主主義人民共和国の民族文化遺産保存政策によって、1994年に作り直された檀君陵（高さ22m、底面の1辺の長さ50m）には、檀君とその妻神女の遺骨が原状通りに保存されている。

このように神女は、朝鮮民族の始祖檀君の妻として檀君陵と共に後世に長く伝えられることになった。

3. 古朝鮮の音楽家—麗玉

麗玉（リョオク）は古朝鮮の身分の低い女流音楽家で、国内はもとより隣国にも名が知られた人物である。

3000年近い歴史を誇る古朝鮮は、前朝鮮（檀君朝鮮（タングン））、後朝鮮、満（マン）朝鮮の3王朝と続いたが、麗玉は後朝鮮末期から満朝鮮初期（前3世紀～前2世紀）に生きた人物として知られている。

彼女は首都平壌（ピョンヤン）の大同江（テドン）の渡し場の船頭霍里子高（クァクリジャゴ）の妻で、夫の働きでようやく暮らしを立てていた。麗玉は人一倍音楽的才能に恵まれ、夕方仕事を終え疲れて帰った夫のために、いつも箜篌（くご）（ハープ系の楽器）に合わせて歌をうたった。麗玉は歌が上手で新しい歌を作詞作曲もし、既成の歌もさらに磨きをかけて立派に作り直す才幹も持ち合わせていた。今日まで麗玉の作として伝えられている歌謡『箜篌引』は、彼女の芸術的才能を十分にうかがわせている。

『箜篌引』の創作経緯と内容については、『古今注』『樂書』『海東繹史』『五山説林』

『熱河日記』など、国内の多くの本にかなり詳しく記述されている。

『箜篌引』の創作経緯と内容はおよそ次の通りである。

ある日の早朝のこと。霍里子高が渡し舟を漕ぎ進めていたとき、ある老人が半狂乱の態で流れの激しい川に踏み込み、向こう岸へ渡り始めた。後を追って来たその妻が夫の名を呼んで引き留めようとしたが、老人は聞き入れず、ついに溺れて死んだ。老婆は箜篌を奏でながら『公よ川を渡るなかれ』という自作の歌をうたった。歌声は悲しみに満ちていた。老婆は慟哭しながら夫の後を追って川に身を投じた。

この悲惨な光景を目撃した霍里子高は、帰宅して妻にそのことを話した。麗玉は老人夫婦の悲劇的な運命を悲しみ、老婆の歌詞に合わせて箜篌を弾いた。彼女の歌を聞いて涙を流さない人はいなかったという。これが後世に長く伝わっている『箜篌引』で、その歌詞は次の通りである。

わがきみの渡るまじきに
わたりたもうて
溺れしを
ああ　いかになさばや

激しい流れに身を投じて死んだ老人とその妻の姿は、奴隷制社会の不合理な現実に対する恨みと反抗心の表われと言えよう。老人夫妻の悲惨な運命を切々と歌った霍里子高と妻麗玉の様相から、他人の不幸と悲しみを自らの不幸、悲しみとして同情した古朝鮮人の美しい内面世界がうかがえる。麗玉はその後この歌を箜篌に合わせて、朝な夕な歌って老婆を追憶し、村の女たちに教えもしたという。歌謡『箜篌引』は、隣

国にも伝わり、後世にも広く歌われるようになった。

記録によると、箜篌は 13 の弦からなる弦楽器であったが、いつも聞く人の琴線に触れたという。

このように後世にまで伝わった麗玉の創作と演奏についての物語は、古朝鮮女性の音楽創作活動と、そのレベルをうかがわせる貴重な史料的価値を持っている。

4．東明王の母親柳花

柳花（リュファ）は、朝鮮（チョソン）史上最も強大な国であった最初の封建国家―高句麗（コグリョ）（前 277～668）の建国者高朱蒙（コジュモン）（東明王（トンミョン））の母親である。

彼女は前 4 世紀末、河伯（ハベク）（水神）の長女として生まれた。『旧三国史』は柳花の娘時代を次のように記している。

河伯には 3 人の娘がいた。長女柳花、次女原花（ウォンファ）、3 女葦花（イファ）は、いずれも美貌の持ち主であった。当時、龍車に乗って熊心山（ウンシム）に降りた天神の子解慕漱（ヘモス）は、扶余の故地に国を建て、午前中は政事を処理し、夕刻には天上の宮殿に昇って行くので、人々は彼を「天の国の王」と呼んだ。

ある日、3 人の美しい娘が熊心池のほとりにやって来て遊んでいるのを見た解慕漱は、あのうちの一人を后にすることができれば、多くの孫子に恵まれるだろうと側近にもらした。すると側近の一人が、本当にそのおつもりなら池のほとりに宮殿を建て、娘たちが中に入るのを見はからって、内々に会えばどうでしょうか、と進言した。

解慕漱はそれはいい考えだとして、手にしていた鞭で池の近くに縦横いくつかの線

を引いた。すると、たちまちのうちに立派な宮殿が出来上がった。宮殿を見て中に入った3人の娘は、酒を酌み交わしながら嬉々と遊びたわむれた。

彼女らがほどよく酔ったのを見計らって、解慕漱は部屋の中へ入った。娘たちは驚いて逃げ出したが、長女の柳花は解慕漱につかまってしまった。

二人の娘から訳を聞いて憤慨した河伯はただちに解慕漱に会い、無礼をなじった。解慕漱は自分の非を認めて柳花を送り帰そうとした。ところが、解慕漱に夢中になってしまった柳花は家へ帰りたくないと言い張り、父親に結婚の承諾を求めるようねだった。そこで解慕漱は柳花と連れ立って河伯を訪れた。河伯は解慕漱が天神の子であることを知ると、喜んで二人の結婚に同意した。

結婚式の日、解慕漱が娘を捨てて天上に去ってしまうかも知れないと危ぶんだ河伯は、大洒を飲ませて婿を酔いつぶすと、革袋の中に娘と一緒に入れ、五龍車に載せた。しばらくたって酔いから醒めた解慕漱は、自分が革袋に閉じ込められていると知り、柳花の髪からかんざしを抜き、袋に穴を開けて外へ抜け出た。彼は河伯の仕打ちに激昂し、柳花を打っちゃったまま、独り天上に昇ってしまった。そのことを知った河伯は、家名を汚し、父親を苦しめる子だとして、娘を優渤水(ウバル)の流域の地に流してしまった。

ある日、扶余(プヨ)の金蛙(クムワ)王が優渤水の川辺で猟をしていたとき、妙な女を目にした。その姿や振る舞いからして、当地の住人とはとても思えなかったので、身の上を尋ねてみると、彼女は目に涙を浮かべて、自分はこの地に流されて来た女だと、その一部始終を語った。

柳花は金蛙王のはからいで、扶余の首都の離宮に優遇されて住むようになり、前298年陰暦4月初めに解慕漱の子を生んだ。この子がほかならぬ高句麗の建国者高朱蒙で

ある。

柳花が高朱蒙を生み育てた話は、『三国史記』（巻 13、高句麗本紀　東明聖王条）に詳しく記されている。

柳花は扶余の王宮でまじめに働きながら、一人息子の朱蒙を立派に育てるために苦労した。彼女は朱蒙が父親に似て才気が煥発であることを喜び、幼い頃から読み書きを教え、成長するにつれて多くの本とりわけ兵書に親しむようはかった。また、扶余や周辺諸小国の状況などもいろいろと話して聞かせてわが子の大志をはぐくむ一方、武術の練磨に励み、剛直な品格を備えるようつねに気を配った。朱蒙は、早くも七つの年に馬術、弓術、槍術、剣術などに長じ、他者の追随を許さないほどになった。

扶余では毎年狩猟競技が盛大に行われたが、朱蒙はここでいつも優勝した。柳花は朱蒙のたくましい成長を喜び、将来に大きな期待をかけた。

そんなある日、朱蒙は不運に見舞われた。金蛙王には 7 人の息子がいたがいずれも凡庸で、それだけに朱蒙の武術と才能をねたみ、父王にざん言して彼を亡き者にしようと計った。しかし金蛙王はいろいろと考えた末、朱蒙に王宮の馬丁を申し付けたのである。

朱蒙は母親と相談し、将来に備えて優良種の馬には飼い葉を少なく与えて痩せるようにし、劣等種の馬は腹一杯食べて肥えるようにさせた。結局金蛙王と王子たちは肉づきのよい馬に乗り、朱蒙は痩せてはいるが駿馬をおのがものとすることができた。

母親の深い配慮と期待のもとに、武術に励み体力を鍛えていった朱蒙はいつしか 20 歳になった。

当時（前 3 世紀初め）は、古朝鮮［チョソン］（後朝鮮）、句麗［クリョ］、辰［チン］国のような大奴隷所有者国家の支配体制が漸次衰え、その隙を狙った一部の勢力が各地に割拠した頃であった。

そのような状況に、朱蒙と母親は誰よりも心を痛めた。朱蒙は扶余を去り、父母の郷里である鴨緑江（アムロク）の中流地方へ行って大事を計ろうと考えながらも、母親を扶余王の離宮に残していくのが心がかりで、独り悶々とした。

　ある日、朱蒙はとうとう自分の心情を母親に打ち明けた。

　「わたしは天子の血を引く身ですのに他人の馬丁を勤めているのですから、果たして生きている甲斐がありましょうか。それで、南方の地に移り、新しい国を興そうと思いますが、母上のことが心配で決心をつけかねています」

　息子の意向を聞いた柳花は、さすがに志の高い解慕漱の子だと喜び、早速朱蒙を助けて扶余脱出の準備を整えることにした。柳花はわが子に言った。

　「お前が遠くへ旅立つためには、最良の駿馬がなければならないだろうけど、それはわたしが用意します。お前は志を共にする盟友をしっかり選ぶことに心がけるのですよ」

　彼女は朱蒙と一緒に養馬場へ行き、そこでこれと思われる何頭かの馬に力一杯鞭を加え、驚いて 2 丈もの柵を飛び越えた、特にすぐれた駿馬を選んで朱蒙に見せ、立派に飼育するようにと言った。

　朱蒙には幼い頃から弓術や馬術の練習時に交わった友人が多かったので、彼らと語らって武術にいっそう励み、読書にも力を入れて知識を広めていった。そうしたなかで、友人たちはどんな任務も十分に果たせるほどの勇士に育ち、朱蒙をおし戴いて生死を共にすることを誓うほどになった。

　他方、朱蒙をねたみ亡き者にしようとする扶余王子たちの奸計は続き、ついに金蛙王も朱蒙を殺そうと決心した。陰謀に気づいた柳花は、朱蒙に言った。

　「いっときも早く身を避けなければなりません。帯素（テソ）（金蛙王の長子）がお前を殺

そうとしているから、ここでまごまごしていてはいけません。お前はこの先どこへ行っても男らしく生きるのだよ」

話し終えた母親の表情はきっとしていた。

朱蒙は母親と別れるのは死ぬほどつらかったが、手を振って見送ってくれるその姿に気を取り直し、友の烏伊（オイ）、摩離（マリ）、陜父（ヒョッポ）と連れ立って旅立った。離別の悲しみで柳花は頬を涙で濡らしたが、わが子の将来に希望を抱き、遠ざかる朱蒙に向かっていつまでも手を振った。これは朱蒙と母親柳花の永遠の別れとなった。

南方の地句麗（クリョ）に至った朱蒙はここで勢力を拡大し、前 277 年、奴隷制国家句麗に代わる朝鮮最初の封建国家高句麗を立ち上げた。

後日、朱蒙が高句麗国を建て広く名を知られるようになったことを伝え聞いた柳花は、わが子の健康と高句麗がさらに強大になることを祈りながら生涯を終えた。

このように柳花は、ありとあらゆる危険や苦痛に打ち勝ち、高朱蒙を無敵の将軍、高句麗の建国者に育成することで大きな功労のあった女性であった。

5．東明王の后礼氏

礼（レ）氏は高句麗（コグリョ）の建国者東明（トンミョン）王（高朱蒙（コジュモン））の最初の妻であった。扶余（プヨ）王の離宮に仕えていた彼女は、ここで朱蒙と知り合ったのである。

彼女は善良で慎み深く、思慮に富み、それに、まめまめしく器用に働く評判の女官であった。ほんのりと紅潮を帯びた頬と伏し目がちのやさしい瞳、きれいに通った鼻筋と、笑みを含んだ口元は、18 歳の若者朱蒙の心を捉えた。礼氏も以前から朱蒙のた

くましい体躯と高い人格、すぐれた武術に引かれ、人知れず思慕していた。二人はいつしか愛する仲となった。母親も彼らの仲を喜び、結婚を許した。

しかし幸せは長く続かなかった。扶余の７人の王子が朱蒙の謀殺を計っていたのである。朱蒙は、身に迫った危難を避け、ひいては年来の大望を成就するため、母親と妻を後に残して扶余の地を去ろうと決心した。

夫と涙の離別をした礼氏は、そのしばらく後、長子孺留（ユリュ）を生んだ。礼氏は朱蒙の跡とりを授かったことに満足し、父親にひけをとらぬ人間に育てようと決心した。歳月の流れと共に孺留は立派な若者に成長していった。

礼氏は、朱蒙が建てた高句麗国が日に日に強大になっていることを伝え聞いて大いに喜び、父親に劣らず骨格たくましい孺留をすぐれた武人に育て上げようと、前にも増して努力を傾けた。

孺留は幼年時代から父親に似て弓術に長けた。ある日、道ばたで遊んでいた孺留は、雀が家の屋根に止まっているのを見て、矢を放った。ところが矢はたまたま通りかかった女の頭に載っていた水瓶に当たり穴を開けてしまった。女は、「この父無し子め。なんてたちが悪いんだろう」と悪態をついた。あまりのことに顔が真っ赤になった孺留は、矢じりに粘土を付け、水瓶の穴を狙ってひゅっと放った。矢は狙い違わず穴に刺さり、粘土がそこを埋めてしまった。孺留は、その足で家へ走って帰り、母親にしがみついて、なぜ自分にはお父さんがいないのかと叫び、肩を震わせて泣いた。

礼氏は息子をなだめて、静かに言った。

「お前のお父さんは天神の子解慕漱（ヘモス）が生んだ子なんだよ。母方のおじいさんは河伯（ハベク）だしね。そんなお父さんをこの国の王子たちが殺そうとしたので、お父さんはここから抜け出し、南の方の地で高句麗という国を建てたの。だからお前は高句麗国へ行っ

て、お父さんに会うのだよ」

続けて礼氏は、7 角の石の上に松の木が立っているが、その下にある物を埋めておいた、それを持って尋ねて来れば自分の子に間違いないと認める、と言い残してお父さんはここを発ったと言った。

孺留は、父親が残していった物を見つけようと 1 か月余り山の隅々を探して回ったが、7 角の石を見つけることができなかった。けれども孺留は父親に会いたい一念で、くりかえしくりかえし山を探し歩いた。

そんなある日、山から疲れ果てて帰った彼は、倒れるように縁側に腰をおろした。その時、縁側の端の柱の下で何か音がしたような気がした。何の音だろうかと思って目を凝らしているうちに、柱の礎石が 7 角形であることに気づいた。しかもその上に立っている柱は松材である。あっと思って柱の下を探ってみると、そこに折れた剣が隠されてあった。孺留と母親は抱き合って喜び、折を見てきっと父親を尋ねて行こうと約束した。母親の意に沿って孺留は、その日のために武術の修業にいっそう励んだ。

その頃朱蒙の母親柳花の病状は悪化した。礼氏はまことを尽くして姑を看護し、その死後は、夫に代わって葬儀を立派に行った。この 3 年忌を終え、さらに 2 年が経った前 259 年 4 月、礼氏母子は朱蒙を尋ねて高句麗へ向け旅立った。

父親に会った孺留は、折れた剣を差し出し、自分は息子の孺留だと言った。東明王は早速深くしまって置いた折れた剣を取り出し、それと合わせて見てたいそう喜び、「お前が本当にわしの子であるからには、何か特別な武芸の心得があるはずだ」と言った。すると、孺留はさっと飛び上がって切り窓に取りつき、体で日光を遮った。

東明王はいたく満足し、わが子を立派に育てたばかりか、母親にも孝養を尽くし、さぞ苦労が多かったろうと言って、礼氏に重ねて謝意を表した。その上で、自分には

幾人かの妻があり、子供たちもいるから、この際太子を立て、正式に王后も定めて後顧の憂いを断ち、かつまた後世への戒めともすべきだとして、孺留を太子に、礼氏を王后に封じた。

礼氏は王の后になってからも常に家庭の和睦を図り、前 259 年 9 月、東明王が 40 の年で急病にかかり死亡すると、龍山(リョンサン)（高句麗最初の首都卒本(チョルポン)城―今日の中国遼寧省桓仁県）に埋葬して、葬儀を大きくとり行い、墓は丁寧に加工した大石をもって営み、高句麗の建国者の陵として、後世にも遜色がないようにした。

礼氏は、高句麗第 2 代の王孺留の政事をしっかりと支えた。

このように高句麗最初の王后礼氏は、高句麗の建国と王位の継承を支えた功労者であった。

6．高句麗、百済の建国と召西奴

召西奴(ソソノ)は高句麗(コグリョ)の始祖王東明(トンミョン)王の第 2 夫人で、高句麗及び百済(ペクチェ)の建国に尽くした女性である。

彼女は句麗(クリョ)国（鴨緑(アムロク)江中流地方）の五部の一つである卦婁(クァル)部（桂婁(ケル)部）の最上層貴族延陁勃(ヨンタバル)の娘で、前 3 世紀初め北扶余(プヨ)王解扶婁(ヘブル)の庶孫（庶子の息子）優台(ウテ)に嫁いだが、夫の早世で故郷卦婁部に帰り、父の別宅で独り寂しく暮らした。とはいえ、彼女はまだまだ若く、しかもその美貌のゆえに近隣の評判となっていた。

その頃（前 279）、扶余を脱出した高朱蒙(コジュモン)（東明王）は、10 余名の仲間と共に、卦婁部北辺の卒本(チョルポン)川（沸流(ピリュ)水）流域の荒れ地に居住地を定め、持参の 5 穀を種子として田畑を起こしていた。

ある日、卒本川のほとりで猟をしていた朱蒙らはかなり疲れた身で、日暮れ時、ある瓦葺きの一軒家の門を叩き、一夜宿を取りたいと願った。一行の装束に目を凝らした家の主とおぼしい女性は、彼ら、とりわけ朱蒙がただならぬ人物だと察して快く承諾した。この女性がほかならぬ召西奴であった。

彼女は朱蒙といろいろと話しているうちに、彼が将来を約束された若者だと見て取り、自分も資金の面で力になりたいと申し出た。召西奴の財政的援助で朱蒙は、付近の山に城柵を巡らして武器や装具を蓄え、兵を募った。こうして朱蒙は 1 年足らずのうちに卦婁部で大きな政治勢力にのし上がったのである。

当時、北方から靺鞨族がしばしば当地に襲来し、人民を苦しめていた。朱蒙は兵を率いて靺鞨軍営を奇襲し、彼らに二度と侵略をしないと誓わせた。この出来事を通して朱蒙の名声は一段と高まり、朱蒙への召西奴の恋情も深まった。

召西奴の父親延陁勃は、朱蒙が並々ならぬ人物であると知り、婿に迎えようとした。ところが娘はかぶりを振った。

「いけません。朱蒙さんはただの人物ではなく、雄大な志を持つすぐれたお方です。わたしのような平凡な女、しかも一介のやもめがあのようなお方とつり合うはずがありません」

これは召西奴の真情であった。朱蒙に恋心を抱きながらも、自分の境遇を考えざるを得なかったのである。父親は腹を立てて娘をなじった。

「お前はいつからこの父親の言葉も聞かなくなったのじゃ。わしは朱蒙をわが卦婁部の代表者に推挙するつもりだ。朱蒙がわが卦婁部を統率することになれば、わしは死んでも本望だ」

延陁勃はこう言うと、問答は無用だと言わんばかりにそのまま寝室に入ってしまっ

た。召西奴は正座した膝を崩そうともせず、はらはらと涙を流した。父親の叱責が嬉しくもあり、悲しくもあった。

1 年が過ぎた。その間、召西奴は父親の意に沿って朱蒙に嫁ぎ、自分の全財産を夫の事業につぎ込んだ。彼女は扶余から優良種の馬を大量に買い入れて軍馬とし、馬具や武器、布地や糧米も整えた。こうして 1 年足らずの間に朱蒙の勢力は強大になった。

朱蒙は、自分の今日あるは、身の危険を省みず後押ししてくれた母親のお陰であると考え、その姿をしばしば思い浮かべていた。

このような時、3 人の娘を持つだけで王子のいなかった句麗王は、堂々とした風采とすぐれた知略を兼備した若い朱蒙に目を付け、彼を婿に迎えようとした。朱蒙は困惑した。召西奴を捨てる意向がまるでなかったのである。

ある日の夜、浮かぬ顔でげっそりして庭園を行きつ戻りつしている朱蒙を見て、召西奴はその前に立ちふさがった。

「今後の句麗国の運命は、誰の肩にかかっていましょうか。たかが一人の女のために大業を徒爾に終わらせてよいものでしょうか。ためらわずに国王の婿になってください。そうすれば句麗の全土を配下に置くことになりましょう。句麗はもはや衰えた国です。傾いた国運を立て直し、きっと富強な大国を建ててください」

低いながらも厳しくこう言った召西奴は、月光の下でこうべを垂れ、静かに立ち尽くした。その姿は、一輪の百合のように美しく、清らかだった。朱蒙は彼女の言葉に感動し、ほれぼれとその姿に見とれた。

それからしばらくたって、朱蒙は句麗王の第 2 女と結婚し、前 277 年、句麗王が世を去ると、句麗国全五部の統治者となり、国名を高句麗と改めた。

召西奴は領土拡大に奮闘する朱蒙の連戦連勝の報に喜び、その間二人の息子沸流（ピリュ）と

温祚（オンジョ）を生み、建国の礎になってくれるよう頼んだ東明王の言葉をいつまでも忘れず、高句麗の建国と発展に人知れぬ力を注いだ。

前 259 年 4 月、扶余から朱蒙の最初の夫人礼（レ）氏とその息子孺留（ユリュ）が尋ねて来、王が孺留を太子に封じたときも、召西奴は、王位継承の問題について難しく考えなかった。彼女は東明王の言葉を絶対的なものとして受け入れ、無言で従った誠実な妻であった。

朱蒙はそんな美徳の持ち主である召西奴を有難く思い、孺留と沸流、温祚との関係を良くしようと努めた。彼は、自分の死後、万一、彼らの間に不和が生じ相争うようなことになれば、高句麗の基盤が崩れるであろうと憂慮して、召西奴にこう言った。

「そなたが生んだ沸流と温祚は共にしっかり者だ。しかし、わしが死ねば内輪もめが起こらないとも限らんから、そのときは二人の子を連れて南方の地へ行き、わしの志を実現するいま一つの国を建ててもらいたい。これがわしの念願だ」

召西奴は「わたしは息子たちを助けて、南方の地にあなたが望んでいらっしゃるいま一つの国をきっと建てるようにいたします」と真心をこめて答えた。

そのしばらく後の前 259 年 9 月、東明王は急病に倒れ、40 年の生涯を終えた。召西奴は葬儀を終えると、直ちに沸流と温祚を伴って南方の地へ向かった。このとき、10 名の重臣のほか少なからぬ人たちが彼らに従った。この南方進出は、東明王の聖旨を実現するうえでの重大な出来事であった。

召西奴一行は漢（ハン）江下流の漢山に至り、一番高い負児（プア）岳の頂に立ってまわりの地形を見渡した。兄の沸流は、西方の海辺に国を立てようと言った。重臣たちは漢江の南方を指差しながら、「この辺りは大きな川が流れて、北方は高い山岳に守られており、南方には肥沃な平原が広がり、西方は大海が横たわっています。このような要害の地を他に求めることは容易でありません。ですから、ここに都を定めるのがよかろうと存

じます」と進言した。召西奴は彼らの意見をもっともなものと考え、二人の息子にそうするよう勧めた。

思慮が浅く粗暴で平素から母親の言葉によく従わなかった沸流は、この時もみんなの意向を無視し、大勢の人を引き連れて海辺の彌鄒忽（ミチュホル）（今日の仁川（インチョン）地方）へ行ってしまった。

一方、幼少の頃から母親の言葉を尊重し、こせこせしたところのない温祚は、漢江下流の慰礼（イレ）城に都を定め、この小国を百済（ペクチェ）と名付けた。百済としたのは、温祚が慰礼城に来るとき百姓たちが喜んで従って来たからである。

この百済封建小国は、領土が四方 10 余里にすぎず、まだ辰（チン）国（馬韓（マハン））の属国であった。

召西奴は第 2 子の温祚が、東明王の意に沿って百済小国を建てたことを祝福し、当地に東明王の祠堂を建てることで、百済小国が高句麗の継承国であることを明確にした。

沸流は彌鄒忽地方で暮らしたが、その土地は湿気が多く、水は塩からくて生活に適さなかったので、やむなく母親と弟のいる慰礼城にやって来た。そこでは、温祚が亡き父王の意向通りに母親の助力で国を建て、なごやかな生活を送っていた。沸流は自分の不明を恥じ、情けなくもあって重病を患い、ほどなく死去した。

召西奴は、東明王の意に沿って百済小国の強化に努める温祚に力添えしながら、慰礼城で幸せな余生を送った。

前 3 世紀中葉に建てられた百済小国はその後、領土を拡大し、国力を充実させて、前 1 世紀末には、独立した封建国家百済国へと発展した。

このように召西奴は、高句麗、百済両国の建国に貢献した女性であった。

7．楽浪公主

朝鮮の民族史には楽浪（ラクラン）公主と呼ばれる女性が何人かいた。1 世紀初・中葉に生きた楽浪国の楽浪公主は、高句麗（コグリョ）の南方進出と領土拡張活動を助けて生命を捧げた女性である。楽浪国は、前 108 年の古朝鮮（満（マン）朝鮮）滅亡後、その遺民が平壌（ピョンヤン）地方に建てた小国であった。

1 世紀初・中葉、楽浪小国の王崔理（チェリ）には才色兼備の娘がいた。崔理は自分の娘につり合うだけの若者が楽浪国内にいないことを嘆いていた。ある日、崔理は沃沮（オクチョ）地方を回遊中、偶然高句麗大武神（テムシン）王（在位 18～44）の子好童（ホドン）王子に会った。

好童王子は傑出した人物であった。その非凡な武芸と闊達な人品に魅了された崔理は、王子を楽浪国に招待した。楽浪国に大きな関心を抱いていた王子は、断わりきれぬという風をよそおって招待に応じた。当時、楽浪国は西方は朝鮮西海と接し、東北方は咸鏡（ハムギョン）道の狼林（ランリム）山一帯に伸びていた。高句麗は古朝鮮の故地の統合をめざして南方進出を進めていた矢先であっただけに、古朝鮮の古都平壌を支配している楽浪国の存在を当面の障害とみなしていたのである。

楽浪王室は、連日、盛大な礼式と豪勢な祝宴をもって高句麗の王子を歓待した。器楽の演奏が続くなか、好童を案内して平壌の景勝を遊覧した崔理は、数日後、好童に向かって、この機会に高句麗国と楽浪国の友好と繁栄をはかり、両王室が姻戚関係を結んではいかがだろうかと持ちかけた。好童が返答に困っている様子を見た崔理は、機会を逃がしてはと、すぐさま娘の楽浪公主を呼んだ。

崔理に挨拶する公主を一目見て、好童王子はわれを忘れた。理知的な黒い瞳、ほんのりと赤みを帯びた頬、なめらかな白い肌、すんなりと均整の取れた身体。楽浪公主

は全くのすばらしい美人であった。崔理は好童王子の表情の変化を観察しながら、娘を紹介した。

「わしの一人娘だ」

楽浪公主は好童王子をうわ目でちらっと見て会釈した。崔理王の娘がたぐいまれな美女だという噂は聞いていたが、そのあまりの美しさに息をのみ、好童の胸は高鳴った。

挨拶を交わした二人は、父王に遠慮する風もなく、やさしいまなざしを向け合い、ほほえみながら秀麗な山水や狩猟などについて夢中に話を進めた。楽浪公主は興味深そうにうなずきながら、好童王子の話に耳を傾けた。

二人は急速に親しみを増していった。草原に共に馬を駆りもすれば、大同(テドン)江畔の小高い、野花にいろどられた丘を散策もした。しかし二人は、単に愛をささやいてばかりいたのではなかった。

好童は、楽浪国が世の大勢に背いて外部勢力と手を結び、同族間の争いを事として人民に苦痛を与えているとして、今後は高句麗と同様、同族間の協和をはかり、団結を果たさなければならない、と熱心に説いた。

幼少の頃から学問に励み、武芸の修練も積んで世に広く知られるようになっていた楽浪公主は、古今の有名な女性たちにあこがれながら自分も彼女たちのように生きたいとひそかに念じ、古朝鮮の滅亡後各地に割拠した諸小国の対立抗争に心を痛めてもいた。そんな矢先に好童王子に出会って、国土統一の大志を打ち明けられたのであるから、王子に尊敬の念を抱き、恋慕するまでになったのである。

数日後、楽浪宮では、諸王侯貴族の祝福を受けて二人の婚礼が盛大に挙げられた。好童王子は当時の風俗に従い、いったん高句麗王宮へ帰り、１年後の吉日に公主を迎

えに来ることにした。公主は夫を懐かしみ、高句麗の国土統合の日が一日も早からんことを願った。

高句麗の首都国内（ククネ）城に帰った好童王子は、父王大武神王に、その間の出来事を話し、楽浪国に政治経済的に大きな影響を与えて早く味方に引き入れるべきだと進言した。

一方、楽浪国王崔理は、好童王子にまなむすめを任せてほっとしたものの、心中高句麗の勢力の増大に警戒心を高めて、戦備の強化に力を入れ、他族の漢と結んで高句麗を牽制し、ひいては高句麗を壊滅させようともくろんだ。彼は敵軍の襲来時には事前に自ずから音を立てる自鳴鼓角を配備して防備を一段と固めた。高句麗を中心とする国土の統一のみが全民族に真の幸福をもたらすと信じて疑わなかった楽浪公主は、思い余って父王をいさめた。

「お父様はどうして外部勢力を引き入れて同族の国を滅ぼそうとなさるのです。高句麗の強さを認めず、この取るに足らない楽浪国の勢力を過大視して世に君臨しようとしたところで、無駄なあがきにすぎません」

公主は父王に哀願もし説得も試みたが、無駄だった。楽浪公主は父王に背いても、夫の好童王子ひいては高句麗の国土統一偉業にわが身を捧げようと決心した。そうした矢先に、好童王子から楽浪国の武器庫に装備された自鳴鼓角を破壊してほしいというひそかな伝言を受けた。

楽浪公主は、ある日の深夜、白衣をまとって宮殿の庭に現われた。かぼそい手には悲壮な決意を象徴するかのように、青白く研ぎ澄まされた短剣が握られていた。

その同じ日の夜、崔理王は心の騒ぎで寝つかれずにいた。それまでこの父親に一度として逆らったことのないただ一人のまなむすめが、自分の行為に不満を抱き、意見したことが胸につかえていたのである。

そんな時、一人の臣下が慌ただしい足音を立てて駆け込んで来た。

「姫君が…姫君が自鳴鼓角を破壊されてしまいました。国の破滅を招く一大事です」

「なにっ、自鳴鼓角を……」

崔理王は驚いて現場へ駆けつけた。そこには失神した公主が倒れていた。崔理の罵声に正気を取り戻した公主は、父王の前にひざまずいた。

「お父様、お父様は時代の趨勢を見誤っておられます。民心は高句麗に傾いております。高句麗による国土の統合はもはや疑いの余地がありません。ですから、わが国も……」

公主の切々たる訴えに、崔理はくらくらと目まいがした。自分の前には高句麗の「まわし者」の姿があった。国王は剣をさっと引き抜くや、満身の力をこめて「まわし者」を袈裟がけに切り伏せた。

「まわし者」ならぬわが娘を切ったと知り、国王は気を失い、その場に倒れてしまった。丁度そこへ10余名の兵を引き連れた好童王子が武器庫に現われた。好童は血にまみれて倒れている愛する妻の体に全身を投げかけた。やがて国王は正気に戻ったが、公主はついに帰らぬ人となった。

崔理王にはもはや何も残されていなかった。愛してやまなかった公主は死に、王位を譲り渡すべき者もいない。楽浪国の存在は自分の死と共に無に帰するほかないのである。崔理は今になって自分の愚かさを悟った。紀元32年、楽浪国王崔理は高句麗に帰順した。

このように楽浪公主は高句麗王の嫁、高句麗王子の妻でありながらも、一度として高句麗の地を踏むことなく、高句麗の国土統合偉業に大きな貢献をなしたのである。

8．平岡公主

6 世紀中葉、高句麗（コグリョ）の平原王（ピョンウォン）（在位 559～590。平岡王（ピョンガン）ともいう）に才色を兼ね備えた、平岡公主と呼ばれる娘がいた。

平岡公主はまだ小さかったとき、非常な泣き虫で、ちょっとしたことでも大声で泣くので、「泣き虫の公主」というあだ名がついていた。公主を目に入れても痛くないほど可愛がっていた平岡王は、娘が泣くたびに、「こら、そんなに泣いてばかりいたら馬鹿の温達（オンダル）の嫁にくれてしまうぞ。女の子が泣いてばかりいるのだから、馬鹿者の嫁にしかなれんわい。貴族の誰がお前なんかを嫁にもらうものか」と言って呵々大笑したものである。これはいつしか父王の口癖になってしまった。

当時、温達は、平壌（ピョンヤン）城外の小村で盲目の母親を養いながら貧しく暮らしていた。温達は毎日山でニレの樹皮を剥がしたり、クズの根を掘ったりして、それで飢えをしのぎ、ときには城内の家々の門を叩いて食べ物を乞うようなこともあったので、城内では彼を知らぬ者がなかった。耳を覆う髪はいつもぼうぼうとし、顔はほこりにまみれているそんな彼を、平壌の人たちは「馬鹿の温達」と言ってあざ笑った。しかし、温達は馬鹿ではなかった。彼は頑丈で力が強く、肝が座り、知恵もあった。

公主は、いつしか 16 の年を迎えて、「泣き虫」というあだ名もとっくに聞かれなくなったばかりか、今や娘ざかりの美しい女に成長していた。

王は公主の婿を物色した末、上部高（コ）氏の子に白羽の矢を立てた。彼は若い武人で、勇猛果敢な性格の持ち主であり、弓術、馬術共にすぐれていた。王が彼を選んだのは当然なことと言えた。しかし公主の気持ちは他にあった。公主は早くから温達を自分の唯一の夫であるとひそかに決めていた。それに高氏の息子を快く思ってもいなかっ

た。彼は武勇に富んでいるとはいえ、権勢を鼻にかけ、人を見下す傲慢な男だったのである。

公主の心のうちを知るよしのない平岡王は、ある日、文武百官を集めて、高氏の子を女婿に定めたと発表した。公主はきっとなり、決然として反発した。

「恐れ入りますが父王様、その仰せには従いかねます」

思いもよらぬ娘の態度に、父王の顔色が見る見る変わった。

「父王様は遠い以前から、わたしを温達に嫁がせると何度もおっしゃいました。市井の平民ですら二枚舌を使うことをよしとしないそうですのに、どうして一国の王たるお方が前言をお翻しになられるのです」

王は激怒して立ち上がり、「この娘を直ちに宮中から追い出せ！」と叫んだ。だが、左右の臣下は、ただ顔を見合わせるばかりであった。

公主はその日、ためらいなく宮中を抜け出し、夕暮れ時になって城外の村はずれにある温達の家を探し当てた。庭にケヤキが１本立っているその家の戸口には、盲目の老婆が独り座っていた。公主は深ぶかと頭を下げ、温達を尋ねて来た、是非お会いしたい、と言った。老婆は驚いてかぶりを振った。

「うちの温達は貧しくみすぼらしい人間です。そんな者がどうしてあなたのような高貴なお方にお目見えできましょうか。私は盲で、あなたのお姿を見ることはできませんが、あなたのお体から漂う香りと、この温かくて柔らかい手から推して、あなたはうちのようなあばら屋を訪れるはずのお方ではございません。きっと何かのお間違いでございましょう。温達は今、あの裏山へニレの木の皮を取りに行っていて、ここにはおりません。お米を買うこともできない貧乏者で、私たち母子はニレの木の皮でどうやらこうやら食いつないでいるのです。ですから、どうかもう何もおっしゃらず

にお引き取りください」

　公主は温達が登ったという裏山へ向かった。しばらく行くと、向こうから樹皮の束を背負ってやって来る若者に出会った。温達だった。公主はたいそう喜んで自分の身分を明かし、いぶかしげに首をひねる彼にここへ来た訳を詳しく話した。

　なんとばかげたことをいう女だ。こんな深い山へ女が独りで登って来られるはずはない。いわんや平岡王の姫がである。こいつはきっと美人に化けた狐狸のたぐいに違いない。こう断じた温達は、もう公主には目もくれずさっさと山を下りて行った。公主は途方に暮れた。ほかに行くところがなかった。彼女は夕闇迫る道をとって返し、温達の家の戸口にもたれて眠れぬ夜を明かした。朝、彼女は温達親子にまた会って、いま一度懇願するように自分の心情を語った。けれども温達親子は信じなかった。公主も引き下がらなかった。

　「ことわざにも、１斗のもみも搗いて分け合って食べ、１尺の布も継ぎ合わせて一緒に着て暮らせ、とあります。お互い気心さえ通えば、お金のあるなしや身分の違いは何の妨げにもなりません。そうではございませんでしょうか」

　切々と訴える公主の言葉に、温達母子はいたく心を動かされた。

　その日温達の妻に迎えられた平岡公主は、持参の金銀の装身具を売り払って、家と田畑、牛、家具調度を買い、さらには剣と槍、弓矢、軍馬なども整えて、農作業のかたわら武芸の練磨に心がけるよう勧めた。それらはいつか、国に尽くすうえでなくてはならぬ元手であった。

　温達は毎日のように馬にまたがって山野を駆け、弓矢を使って獣を捕るなど腕に磨きをかけ、日ならずして傑出した武人となった。

　高句麗では、毎年３月３日、楽浪（ラクラン）の丘陵地帯で狩猟競技が催されていた。

温達はこの競技に、武人として出場することになった。公主はその支度に早くから心を使った。なによりも優良な軍馬を買い求めて調練をした。ついに、待ちに待った狩猟競技の日が来た。

王の左右には豪華に着飾った衛兵をはじめ 5 部の文武百官がはべり、狩猟場のまわりには見物人が雲集していた。

ついに、競技はスタートし、数百名の武人が一斉に馬を走らせた。しばらく時間が経過し、丘陵の方でひづめの音がしたかと思うと、土ぼこりを立てて 1 頭の騎馬が走って来た。

馬上の若い武人の後ろには、仔牛ほどもの虎が乗せられていた。「誰だあれは」「見慣れぬ若者だ」「いやあ、なんて大きな虎を仕留めたもんだ」　群衆の感嘆の声に迎えられて真っ先に現れた若武者は、ほかならぬ温達であった。

やがて競技の成績が奏上された。「今日の優勝者は平壌城外に住む温達でございます」

嵐のような歓声がどっと沸き上がった。温達は王の前に呼び出された。じっとその若者を見つめていた王は、不審そうに口を開いた。

「その方の名を温達と言ったが、まさかあの馬鹿の温達ではあるまい」

「いや、わたしはその温達でございます」

温達はためらいなく答えた。王はいま一度温達に目を凝らした。群集に混じって遠くからそんな様子を眺めていた公主は、にっこりとした。

そのしばらく後、外敵の侵略を撃退する戦いに、温達は高句麗軍の先鋒長として出陣し、数十名の敵将の首級をあげるなど、大きな軍功を立てた。

平岡王は温達の勲功と勇猛な戦いぶりに感嘆して温達と公主を宮中に迎え入れ、温

達を大兄という高官として遇した。温達はその後の多くの戦いでも常に先頭に立ち、国土の統合に尽くした。

彼は７世紀初め、鶏立嶺（ケリプ）と竹（チュク）嶺北方の高句麗の地を取り戻す戦いに出陣し、不運にも阿旦城（アダン）（今日の忠清（チュンチョン）北道丹陽（タンヤン）郡永春（ヨンチュン）面）の戦いで、新羅（シンラ）軍の矢に当たり壮烈な最期を遂げた。勇猛な将帥を亡くした高句麗人民は、誰もがみな痛哭した。

このように馬鹿の温達は、平岡公主の内助に支えられて国の将帥となり、侵略者を撃退し、国土統合を果たす戦いで大功を立てたのである。

平岡公主の物語は、夫に自分のすべてを捧げた女性の鑑として、後世に末長く伝えられている。

9. 高句麗の鹿足夫人

612年、史上かつてない300万の外国侵略軍が高句麗（コグリョ）に襲来した。高句麗軍民は、乙（ウル）支文徳（チムンドク）将軍の指揮のもと勇敢な戦いをくりひろげて敵軍を壊滅させた。この戦いには少なからぬ女性が参加したが、そこには乙支文徳将軍の麾下で戦い、敵国に仕えていた二人の息子を反侵略闘争に引き入れて戦勝に大きく寄与した鹿足夫人もいる。

彼女は不思議なことに、生まれたときから鹿のような足を持っていたので、鹿足夫人と呼ばれていた。鹿足夫人は貞淑で気性の強い女性であった。若くして杖とも柱とも頼む夫に先立たれた彼女は、二人の息子の教育にすべてを打ち込んだ。

二人の子の足もまた鹿の足の形をしており、近所の子供たちからよくからかわれたので、母親はできるだけ息子たちを外に出さず庭で遊ぶようにした。それでも、教育

熱心な彼女は息子たちを扃（けい）堂（高句麗時代の私学。学問と武術を教えた）に送り、学問と武術の習得に力を入れるよう計らうことを忘れなかった。

そんなある日、二人の息子が自分たちをからかうある長者の子に飛びかかってめった打ちにしたところ、打ち所が悪くてその子は死んでしまった。驚いた鹿足夫人は、復讐を恐れ二人の子を連れてその日のうちに夜逃げをした。夫人は海辺で一艘の小舟を見つけて、子供たちを舟に乗せた。ところがたまたま暴風に襲われて、わが子たちと別れ別れになってしまった。

途方に暮れた夫人はやむなく国都平壌（ピョンヤン）で暮らすことにし、大城（テソン）山の麓に落ち着いた。ここで彼女は鹿の飼育で暮らしを立て、貧乏な人には鹿の肉や鹿茸（ろくじょう）をただ同然の値で分け与え、それを一つの楽とした。

612 年の反侵略戦争が勃発すると、高句麗の軍民は一丸となって立ち上がり、4 か月もの間遼河界線で敵軍の進攻を阻止した。

このとき、　鹿足夫人は平壌城（今日の中国遼寧省の鳳皇城）に乙支文徳将軍を訪ね、入隊を志願した。将軍は彼女の愛国心にいたく感動し、要請を受け入れた。

遼河界線で一歩も前進できないでいることに業を煮やした敵国の皇帝は、更に 9 個軍団 30 万名の別動隊を平壌城攻略に送り込み、なんとしても高句麗軍を屈伏させようとした。こんな情勢を前にして、乙支文徳将軍は敵情を探るべく、和平会談にかこつけて鴨緑（アムロク）水（太子河）を渡り、敵陣に乗り込んだ。鹿足夫人は、将軍の身の上が案じられて、そっと跡を追った。

将軍は会談中、敵将の間に意見の食い違いがあることと、敵軍が糧米不足に悩んでいることを見抜き、誘引戦術と清野守城戦術（城外の食糧や飲み水、人家を一切取り除き、城にこもって敵軍と戦う戦術）を組み合わせることで侵略者を撃滅しようと決心

した。

敵将たちは豪胆な乙支文徳将軍の威風に気圧され、それに理路整然とした論理にまともな反論もできず右往左往し、会談の際乙支文徳を生け捕れとの皇帝の厳命を実行することも忘れていた。敵将は将軍を送り返した後でほぞを噛み、多くの軍兵をもって後を追わせた。その時、鴨緑水の川岸に舟を着けて待っていた鹿足夫人は、敵の追撃から将軍を救出することに成功した。

当時、敵陣には鹿足将軍と呼ばれる勇猛な二人の武将がいた。彼らは多くの戦いで軍の中枢的役割を果たし、全軍の信頼を得ていた。二人の噂は鹿足夫人の耳にも入った。わが子たちに間違いなかった。彼らの健在を知って喜んだものの、それは束の間で、己れの祖国も知らずに敵軍に属し、意気軒昂としている子たちが恨めしかった。

ある夜、強く決心した鹿足夫人は、身の危険も顧みず、独り敵陣に向かった。二人の兄弟は、闇夜に現れ、灯火の下に足を出して見せる老女の話に驚いた。彼女の足はまぎれもなく鹿足であった。二人は彼女が死んだとばかり思っていた自分たちの母親であることを知り、その前にひれ伏して泣いた。母子 3 人は夜の更けるのも忘れて、別れた後の出来事を語り合った。二人が漂着したのは隣国の海岸であった。そこで一人の老船頭に助けられ、二人はその養子として育った。骨格のたくましい二人は共に敏捷果敢で、武術の修練に励んだ甲斐があって、入隊後日ならずして武官に昇進し、今日に至ったという。二人の話を聞いた鹿足夫人は彼らの背中をなでながら言った。

「お前たちを助け育ててくださった船頭さんはお前たちの恩人であり、父親でもあります。育ての恩を忘れるべきでないのは人間の道理です。けれどもお前たちは高句麗人として生まれたのだから、当然高句麗国の子であることを肝に銘じるべきです。そんなお前たちが今誰と戦っているのです。自分を生んでくれた故国とはらからを敵

に回して戦っているのですよ。人間はどこにいても決して故国を忘れてはいけません」

鹿足夫人はこう言い残して帰った。残った二人は深く考え込んだ。

（お母さんの言葉は正しい。自分たちを生んでくれた故国を裏切ってはならない）

数日後、敵陣は大混乱に陥った。鹿足将軍たちが敵将の首を切り、高句麗軍に投降したのである。もはや勝敗は決まったようなものであった。高句麗軍は乙支文徳の指揮のもと薩水（サルス）（今日の中国遼寧省の大洋河上流蘇子河）の戦いで大勝し、侵略軍は完膚なきまでに撃滅されたのであった。この戦いには鹿足将軍たちも高句麗軍に加わって戦った。鹿足夫人は凱旋した二人の息子を胸に抱いて喜んだ。

このように、鹿足夫人の熱い愛国的行為により、息子たちは祖国の子としてめざめて侵略者撃滅の戦いに加わり、勇名をとどろかせることができたのである。

鹿足夫人の愛国的な生涯は、その後伝説化し、李時恒（リシハン）（1672－1736）の文集『和隠集』をはじめ幾冊かの古書に記載されるほどになった。

10. 高麗太祖王建の母親夢夫人

前 30 世紀初めに東方最初の国家檀君（タングン）朝鮮が建国されたが、前 15 世紀半ばからはいくつもの国が分立して相争った末、10 世紀初め、高麗（コリョ）によって国土は再び統一され、その名を万邦に誇示することになった。高麗を建国し、国土統合の大業を果たしたのは、よく知られているように王建（ワンゴン）である。

ここでは朝鮮史上最初の統一国家高麗の太祖王建の母親について見ることにしよう。

王建を生み育てたのは、夢(モン)夫人と呼ばれた開城(ケソン)出身の美しい女性であった。

開城は後期新羅(シンラ)時代から名の知られた海上貿易の拠点都市で、その繁栄ぶりは首都に劣らぬほどであった。9 世紀の中頃、開城地方には海上貿易で巨利を占めた大富豪が少なくなかったが、そのなかには龍建(リョンゴン)という者もいた。龍建の血筋は、4 代前の祖先虎(ホ)景(ギョン)にしても、また父親の作帝建(チャクチェゴン)にしても姓を持たぬ平民にすぎなかったが、巨万の富をもって開城地方を経済的に支配し、両班貴族に劣らぬ勢威を振るっていた。

ある日の夜早く床についた龍建は、不思議な夢を見た。天女のような美しい女が現われてぬかずき、「ただいまからわたしがあなたにお仕えいたします」と言ってにっこりしたかと思うと、そのまま消えてしまったのである。龍建はこの奇妙な夢が頭にこびりついて、その夜はなかなか眠れなかった。

数日後、ある用務で居住地の松岳(ソンアク)郡から延安(ヨンアン)城に向けて急ぎ足で歩いていた龍建は、道端で一人の娘とすれ違った。ところが、その娘の姿が不思議なことに数日前の夢に見た女とそっくりであった。驚いた龍建は、あれは天から授かった女に違いないと思い、彼女を呼び止めた。娘は容貌が美しいばかりでなく、言葉を交わしてみると世の道理にも明るかった。龍建はたちまち愛のとりこになった。彼女も龍建のはきはきとした男らしく情熱的な態度に心を引かれ、求婚に応じた。

龍建の夢が縁となって結ばれたとして、彼女は人々から夢夫人と呼ばれるようになり、松岳郡随一の大邸宅で幸せな日々を送った。

ところが、結婚後 10 年もの間、二人は子宝に恵まれなかった。うつうつとしていた夢夫人はたまりかねて、子のできないのは今の家相のせいに違いないから、邸宅を南向きに建て直しては、と夫に言った。

屋敷を新築して数日が経ったある日、後期新羅時代の著名な風水師道詵(トソン)が家の前を

通りかかりながら「キビを植えるべき所に、なぜアサを植えたのかな」と独りごちた。たまたま庭の手入れをしていた夢夫人が、その言葉を耳にはさんだ。妻の話を聞いた龍建は、すぐさま道詵の後を追った。

龍建の邸宅で懇ろにもてなされた道詵は席を立ちながら、「ここ（開城）は地脈が北方の白頭（ペクトゥ）に連なるまたとなくすばらしい土地です。当地に 36 区画の屋敷を立派に立てるならば、来年はきっとこの地の主人となる英知ある男子が生まれるでしょうが、名を王建と呼ぶとよいでしょう」と言った。

龍建夫妻は道詵の助言を得て、36 区画を持つ豪奢な大邸宅を建て、夢夫人が身ごもるのを今か今かと待った。案に違わずそのしばらく後、道詵の予言は適中して夢夫人は懐胎し、877 年 1 月 14 日、待望の男児を生んだ。

二人の喜びはたとえようもなく大きかった。道詵が言った通り、生まれた子は世の常の子とはどこか違っているように思えた。産児は王建と名づけられた。しかし、「王」という姓は朝廷の忌諱に触れる恐れがあるとして、ふだんは「若天（ヤクチョン）」と呼んだ。

両親は家門の喜びであり、希望でもある王建の成長に大きな期待をかけて、深い慈愛を注ぎながらも、わが子を厳格に育てていった。こうしてたくましく成長していた王建は、わが家の巨大な資産を新しい国家の建設に役立て、民族統一の偉業を果たそうとの夢を人知れずはぐくんだ。

9 世紀末の朝鮮各地では、封建支配層の暴政に抗する農民暴動がひんぴんとして起こっていた。王建は、後期新羅（シンラ）の北部地方で勢力を張っていた暴動軍の指揮者、弓裔（クンエ）のもとに馳せ参じて初志を遂げようとはかった。

他方、弓裔は開城地方に勢力を拡張すべく、当地方の勢力家龍建を抱き込んで臨津（リムジン）江中流地域の金城（クムソン）太守に封じ、さらにその子王建を部下に迎えた。

夫に従って金城地方に移った夢夫人は、夫と息子を別々に引き離し、しかも夫をその強力な地盤である開城地方からなじみの薄い金城地方に移住させた弓裔の処置に疑念を抱き、夫の注意を促した。龍建は夫人に勧められるままに弓裔に、開城地方の松岳に城を築き、王建をその城主にすれば、国の統一に役立つであろうと説いた。弓裔は龍建の提議を容れて、弱冠 19 歳の王建を勃御塹(パルオチャム)城の城主に任命し、築城に当たらせた。この措置によって龍建は、開城地方の自己の勢力を維持し、さらに強化することができるようになった。ところが、897 年、龍建は思いがけなく急逝した。これは、夢夫人にとって大きな悲しみであった。彼女は夫のなきがらを礼成(レソン)江河口にある延安(ヨンアン)城の石窟に安置し、墓を立派に営んだ。後日、この墓は昌(チャン)陵と呼ばれた。

夢夫人はわが子王建が 918 年に高麗を建て、936 年に国土の統合を果たしたその日を見ることなく、ひたすら大業の成就を念じつつ世を去った。王位に就いた王建は、母親の夢夫人を威粛(イスク)王后に封じた。

このように夢夫人は、朝鮮史上最初の統一国家高麗の太祖王建を生み育てたことで、朝鮮民族史の 1 ページを飾った。

11．高麗の建国と神恵王后

柳(リュ)氏は、高麗(コリョ)の建国と国土統一の大業を成就して歴史に名を残した高麗太祖王建(ワンゴン)の妻で、『高麗史』（巻 88、列伝 1）后妃伝の冒頭に記録された人物である。

柳氏は定州(チョンジュ)（今日の黄海(ファンヘ)北道開豊(ケプン)郡豊徳(プンドク)里）の生まれで、父親は二重大臣（正二品）という官位を持つ柳天弓(リュチョングン)であった。柳氏の生まれた土地は、古朝鮮(チョソン)と高句麗(コグリョ)時代

にはずっと定州と呼ばれていたが、高麗時代には昇天(スンチョン)府、李朝時代には豊徳郡と呼ばれた。当地は金城(クムソン)川の清い水が悠々と流れ、他方、白麻(ペクマ)山の峰が延々と続く、壮快、秀麗な景勝の地であり、また、海上運輸の便がよく、商業活動にきわめて有利な地でもあった。柳氏の父親柳天弓は、新羅(シンラ)末期の平民の出であったが、海上交通の便を大いに利用して商売に精を出し、当地指折りの富豪にのし上がった人物である。この長者の家に生まれた柳氏は、才色共にすぐれ、近隣の称賛の的であった。

王建は当時泰封(テボン)国の王弓裔(クンエ)の部下で、909 年水軍大将に任命され、903 年以来の領地羅州(ラジュ)（全羅(チョンラ)南道）守備の任に当たるため、任地に赴く途中、定州地方にしばらく留まり、ここで軍船の修理を指導した。

ある日、王建は臣下の諸将を従えて海辺に向かう途中、小川のほとりの柳土手でしばらく休息した。風のそよともしない非常に蒸し暑い日だったので、喉の渇きを覚え、あたりに目を配ると、近くに柳に囲まれた泉があり、そこで一人の娘が水を汲んでいた。王建は立ち上がってそこへ行き、一杯の水を請うた。柳の葉を浮かべたひさごの澄んだ水を差し出す娘に向かって、王建は「そなたは誰の娘か」と尋ねた。「この辺りに住む柳天弓の娘でございます」という答えに、王建は、「父上に、今夜開城地方の長者王建が尋ねる、と伝えてもらいたい」と言って、立ち去った。

娘にその話を聞いた柳天弓は、将来を嘱望されている若い将軍王建の訪問を受けるとはこの上ない慶事だ、として喜んだ。

夕方、王建は約束通り柳天弓宅を訪れて 1 泊し、翌日、この家を辞する際、柳氏親子に、きっとまた訪ねると言い残した。水軍を率いて羅州地方に到着した王建は、当地で勢力を拡大していった。

その後首都鉄原(チョルウォン)に帰った王建はそれまでの功によって、913 年、波鎮粲(パジンチャン)、侍中に

任じられ、多忙な日々を送った。

翌 914 年のある日、王建は危機にさらされた羅州の救出に向かう途中、定州地方を通りかかった。その時ふと先年世話になった柳天弓親子のことを思い出した。ところが、柳氏の家にはめざす娘の姿がなかった。父親の話によると、王建を待ち焦がれていた娘は、王建への貞節を汚したくなくて頭を剃り、尼僧になったとのことである。

いたく心を動かされた王建は、娘のいない寂しい柳天弓家の一間で夜を過ごしながら無情な自分を責め、きっと柳氏の娘を妻に娶ろうと決心した。翌日、王建は部下を寺に送り、娘を連れ戻した。

918 年 6 月に至り、弓裔の暴政は極度に達した。

6 月 14 日の夜、王建は、腹心の洪儒（ホンユ）、裴玄慶（ペヒョンギョン）、申崇謙（シンスンギョム）、卜智謙（ポクチギョム）らの突然の訪問を受けた。

洪儒は王建の妻柳氏がそこにいては用件を切り出せないと考え、「いや、急いで来ましたので喉が渇いてなりません。野菜畑でよく熟れたキュウリをもいで来ていただけませんか」と彼女に言葉を掛けた。

柳氏は、彼らがこんな夜更けにやって来たのには何か重大な訳があると察し、いったん部屋の外へ出た後そっと引き返して、絹の帳の陰に身を隠した。

柳氏夫人を部屋から送り出した彼らは、今こそ弓裔を亡き者にして王建を元首とする新王朝を立てるときだと説いた。王建は、弓裔がいかに暴悪であろうとも、王に背くのは臣下のなすべきことではないとしてかぶりを振った。しかし彼らは、弓裔を打倒するのは民心であり、天心でもある、この絶好の機会を逸するべきではない、直ちに行動を起こすべきだ、と強く主張した。それでも王建はためらった。

そんな様子がもどかしく、柳氏は帳から飛び出して夫をいさめた。

「女の分際でこんな大事に口をはさむ無礼をお許しください。でも、大義をもって暴君を制裁することは、昔から天の許すところとなっています。この方々のおっしゃる言葉を聞くと、わたしも怒りをこらえることができません。まして、男子のあなたがあれこれ躊躇なさるなどもってのほかだと思います。機会は一度逃せばそれまでです。国と民を裏切るおつもりがありませんでしたら、この機会を逃してはいけないと存じます」

今夜のこの謀議が露われればもはや無事では済まされないであろうし、民心が弓裔を離れ新しい王を待望していることも事実である。こう思い直した王建は、彼らの意向に従おうと決心した。柳氏は壁の鎧を下ろして、夫の身につけた。

王建らは東の空が白む頃、庭に玉座を設け、君臣の儀式をとりおこなった。つづく王宮の襲撃には 1 万余の全将兵が合流した。すべての部下に背かれた弓裔はようやく王宮を抜け出したものの、逃走中、斧壌（プヤン）（今日の江原道（カンウォン）平康（ピョンガン））地方の住民の手にかかって死んだ。

無血のクーデターで権力を握った王建は、6 月 15 日、布政殿で戴冠式を挙行して王位に就き、国号を高麗と称した。高麗とは強大な統一志向国家高句麗（コグリョ）を継承するとして名づけられた国名である。こうして柳氏は、高麗王朝の最初の王妃となり、王建の国土統一事業を助けた。

王建は建国後およそ 20 年間、北方への進出と渤海（パルヘ）遺民の受け入れをはかる一方、南方の後百済（ペクチェ）と後期新羅を征服統合する戦いをくりひろげて、936 年、朝鮮史上初の国土統一を果たした。

柳氏は、943 年 5 月、王建の死後いくばくも経ずして世を去り、「神恵（シンヘ）王后」とおくり名され、遺体は王建の墓「玄（ヒョン）陵」に合葬された。玄陵は開城市の西北方約 5km にあ

る開豊郡海仙（ヘソン）里に営まれた。陵の碑閣にある高麗太祖玄陵基蹟碑には以上の事実が記されている。

朝鮮政府の民族文化遺産保存政策によって玄陵は、1994 年、大きく改築されて「王建王陵」と名づけられた。

12. 愛国名将金淑興の母親李氏

李（リ）氏は高麗（コリョ）時代、侵略者の撃退に大きな勲功を立てた愛国名将金淑興（キムスクフン）の母親である。

10 世紀末、高麗のある武官に嫁ぎ幸せな生活を送ったが、それは長く続かず、若くして夫に先立たれた李氏は、夫の遺腹の子金淑興を、父親の跡継ぎとしてすぐれた武人に育てようとひそかに決心した。金淑興の成長期は、国土の統一を成就した高麗が、ひんぴんとしてくりかえされる契丹侵略軍を迎え撃って戦いを進めた時代であった。そうした国の情勢は、侵略者との戦いに決然と出で立つたくましい武人の輩出を求めていたのである。

金淑興が幼い頃、火遊び中足に火傷を負い、あまりの痛さにわんわん泣き叫んだことがあった。李氏は、こんな火傷に負けて泣くような子は立派な武人にはなれない、ときびしく叱りつけたという。このように李氏の子弟教育は厳格を極めた。金淑興は成長するにつれて、馬術と武術がめきめきと上達し、豪胆さも身につけていった。

ある日、淑興は母親からガマを捕まえてくるようにと言われた。

（なんのためにガマなんかを……）と考えながらも、彼は見るからに醜いいぼだらけのガマを１匹捕まえて来た。すると李氏は、そのガマをここで生のまま食べるよう

にと言うのである。淑興はびっくりして、母親の顔をのぞきこんだ。

「わが国はまだ食べ物が多いとは言えないのよ。今もし敵軍が攻め込んで来たら、戦場では飢えに苦しむことも覚悟しなければなりません。だから、なんでも食べられるものならえり好みせずに食べて大事な生命を保ち、なんとしても敵にうち勝たないといけないのだよ。だからこんなものも平気で食べられるよう平素心がけないとね」

こう言われた淑興は深く思うところがあって、ガマを両手につかんで引き裂き、目をつぶって足から頭まで残さず噛んで呑み下した。生きたガマをすっかり食べると、へどが出そうな不快感を覚えたが、母親を満足させたと思うと、たいそう嬉しくもあった。その後彼は、いろいろの動植物を生食する習性をつけ、不時に軍糧を切らすことがあっても、それに耐えられるよう自らを鍛えていった。

李氏はふだんから、淑興を知勇共に備わった武人に育てようと心がける一方、学問にも励み、特に古来の有名な兵書をできるだけ多く読み、歴代の名将の愛国的活動や勲功を手本として生きるよう教えた。彼女はまた、武人の心得について教えることも忘れなかった。配下の将兵が休まぬうちに先に休んではいけない、彼らが食事を取る前に先に箸を取ってはならない、彼らが綿入れの軍服を着る前に綿入れを着用すべきでない、などと。

993年の外国侵略軍の第1次侵攻を撃退した後、国の情勢は緊張した。

高麗は高句麗（コグリョ）—渤海（パルヘ）の故地を回復し、敵軍の第2次侵略にも対処するため、西北方の要塞を固め、武力の強化に努めた。

金淑興は、994年、高麗西北方の要地亀州（クジュ）（今日の平安（ピョンアン）北道亀城（クソン））城を築城し防衛する任に当たった。

当時、高麗では夫や息子を戦地に送る前夜、女性たちが香を焚いて甲冑に沁み込ま

せることを一つの風習としていた。こうすれば、戦地でも香の匂いに妻や母親の愛情を覚えて戦いに決然と臨むようになり、戦死しても、その香りが妻や母親の息づかいとなって死者の霊魂を慰めるとされていた。

李氏もわが子を亀州へ送り出すに当たり、香を一晩中焚いた。そこには、わが子が父親に劣らず、高麗の男児として侵略者と立派に戦ってほしいと願う期待がこもっていたのである。

侵略者を撃退せずには生きて帰らないと母親に誓って家を出た金淑興は、亀州で、当地住民の協力を得て山城の築城に取り組んだ。彼は壁石や土の運搬作業の先頭に立ち、配下の将兵と常に苦楽を共にした。

こうして1年を過ごしたある日、用件があって開京（開城）付近に出掛けた金淑興は、暇を見つけて郷里の家へ立ち寄った。翌日はたまたま母親の誕生日だったので、お祝いの言葉をかけたくもあったのである。ところが息子を見た母親の態度は意外であった。久しぶりに帰ったわが子を中に入れもせず、その足で早く戻るようにときびしく言うのである。淑興は、明日は母上の誕生日だからたとえ1日だけでも側で過ごしたいと訴えたが、李氏は、わが子の気持ちを嬉しく思いながらも、わたくしごとのために国事をおろそかにすべきでないとして、こうさとした。

「お前には一人の親が大事なの。それとも亀州城の大勢の人が大事なの。亀州城が侵略者の手に落ちたら、わたしのいるこの故郷の地も危うくなることはお前もわからない訳がないでしょう。それなのに、どうしてたとえ一時たりとも気を抜いて、お母さんの誕生祝いだのなんだのと言ってやって来たのよ。お前がこの母さんの意に背いて帰って来たのだから、わたしがお前を教えてきたことがなんにもならなかったと思うと、本当に情けないよ。大の男がどうしてそんなにこせついているのかしら」

こう言って嘆息する母親の前で、しばらく無言で立っていた淑興は、深々と頭を下げて、そのまま亀州へ向かった。

李氏はこのように、自分一個人の安楽よりも国の安泰を先に考え、息子もそのように生きることを誇りとするこの国の母親たちの一人であった。

金淑興は、40 余万の侵略軍が高麗に再び襲来した時、亀州の別将として勇敢に戦った。敵軍は、興化鎮(フンファジン)など各地で大きな打撃を受けながらも開京に攻め寄せて占領を果たしたが、高麗軍民の勇敢な反撃によっていくばくもなく開京を捨てた。こうして 1011 年 1 月、退却する契丹軍を撃滅する最後の大殲滅戦がくりひろげられた。1 月 12 日、亀州別将金淑興は防御軍を率いて退却する敵に戦いを挑み、1 万名を殲滅したあと、楊規(ヤンギュ)将軍の軍勢と合流して、亀州城を迂回し梨樹(リス)、艾田(エジョン)方面へ抜けようとする敵を迎え撃って連続打撃を加え大敗させた。この戦いで二人の指揮官金淑興と楊規は、致命傷を負い、壮烈な最期を遂げた。

このように金淑興は、母親李氏の愛国心に支えられて侵略軍と勇敢に戦い、わが身を祖国に捧げたのである。

政府は第 2 次契丹侵略軍を撃退するうえに大きく貢献して最期を遂げた金淑興に将軍の称号を授け、母親李氏には糧米 50 石を褒賞として与えた。顯宗(ヒョンジョン)王は李氏夫人に勅書を賜り、称賛を惜しまなかった。

このように李氏は、わが子に愛国心を深く植えつけ、反侵略戦争に勇名をはせるよう教え導いたことで、金淑興の名と共に高麗史に令名をとどめたのである。

13. 女傑雪竹花

雪竹花（ソルチュクファ）は、高麗（コリョ）時代、男装して反侵略戦争に参加し、大きな軍功を立てて戦場の花と散った、高麗の愛国的女性武人である。

雪竹花は、1002 年、亀州（クジュ）（今日の平安（ピョンアン）北道亀城（クソン））で平民李寛（リグァン）の一人娘として生まれた。当時は、高麗による国土の統一後、民族の団結した力でひんぴんとした侵略軍の襲来を撃退し、国の自主権を守っていた時代であった。

李寛とその妻洪（ホン）氏は、結婚 4 年目に雪竹花を生んだ。明るいまなざしにやや高めの鼻筋、それに、すらりとしてぴちぴちした体つきの雪竹花は、気性もまた竹のようにしっかりした美しい一輪の花であった。雪竹花は母親にきびしくしつけられながら成長した。

雪竹花が 12 の年の 1014 年 10 月、父親は通州（トンジュ）城の戦いで戦死した。侵略軍との戦いで壮烈な最期を遂げたという父親の訃音に接して、雪竹花は大きな衝撃を受けた。しかし、彼女はいつまでも悲嘆に暮れてはいなかった。父親の敵を討とう、救国の戦いに出で立とう、と深く心に決めたのである。母親も涙を拭い、娘の決心を支持した。

雪竹花は翌日から外叔父に助けられて、亀州城北方の険しい窟菴（クルアム）山の頂に草小屋を建て、ここで、夜は兵書を読み、昼は馬術と武術を練磨した。外叔父は、1010 年と 1014 年の反侵略戦争で勇敢に戦った人であった。男装の雪竹花は、亀州数里の原野や山河に馬を乗りまわして馬術を練磨し、山林の樹木を相手に剣術、槍術、弓術を習得していった。時にはキビ飯にも事欠き、空腹に倒れるようなこともあったが、意志を屈することなく毎日の日課はきっとやり遂げた。このようにして 4 年の歳月が流れ、雪竹花は心身共にたくましく成長し、ひとかどの武人となった。

当時、西京(ソギョン)（今日の平壌(ピョンヤン)）の楽浪(ラクラン)平原では、毎年、高句麗(コグリョ)の伝統をついで狩猟競技が行われていた。

1018 年 3 月 3 日、雪竹花はメナという男子名で競技に出場した。ここで彼女はキジやウサギ、ノロなど多くの鳥獣を狩り、断然 1 位を占めた。西京留守(りゅうしゅ)（長官）姜邯賛(カンガムチャン)将軍は、愛馬（白馬）のソルメと華麗な甲冑を賞として授けた。そのとき、誰も雪竹花が女であることに気づかなかった。

西京からわが家に帰った彼女は、久しぶりに会った母親に、その間の修業と狩猟競技について話した。母親はたいそう喜び、こつこつ働いて蓄えた金で求めた甲冑と、夫の遺品である長剣を出してこう言った。

「これらはお前がきちんとしまっておくのよ。わが高麗国を生命より重んじたお父さんの志を忘れずに、わが国を侵略する敵兵とは容赦なく戦うのよ」

「わかりました。高麗の娘として恥ずかしくないよう勇敢に戦い、お父さんの志を継いでいきます」

雪竹花は、間近に迫った侵略者の襲来に備えて再び窟菴山に入り、武術をいっそう磨いた。

その年の 12 月 10 日早朝、10 万の侵略軍が高麗に襲来した。姜邯賛麾下の高麗軍は、開京(ケギョン)（開城(ケソン)）へと押し寄せる敵軍を出撃戦と防御戦の組み合わせで守勢に陥れた。雪竹花は亀州城で、高麗軍の勝報を聞くたびに心を躍らせ、時機の到来を待った。

開京攻撃に失敗し多大な損害を蒙った敵軍は、ついに敗退しはじめた。こうして、逃亡する敵軍に対する大殲滅戦が亀州でくりひろげられることになった。雪竹花は、この戦いを総指揮するため亀州にやって来た姜邯賛将軍に会い、戦いの先鋒に立たせてくれるよう要請した。彼女を忘れていなかった姜邯賛は、その気丈な申し出に感動

し、麾下の右騎軍の先鋒長に任命した。左騎軍の先鋒長には渤海（パルヘ）出身のセウルが任命された。

雪竹花は、九林川（クリムチョン）と皇華川（ファンファチョン）が合流する、広野の見下ろせる低い山に青龍旗をなびかせて陣を張った。2 月 1 日早暁、ついに退却する侵略軍が亀州平野に現われた。姜邯賛将軍の総攻撃命令が下るや、数百数千の太鼓の音が響くなか、高麗軍の弓矢が一斉に放たれ、あまたの敵兵を倒した。

先頭に立って矢を放っていた雪竹花は、逃げる敵兵に追い討ちをかけ、父親の形見の長剣で敵将の首をはねた。袋の中の鼠となった敵兵は、もはや逃れられないとして必死に抗戦した。しかし愛国の一念に燃える高麗軍の怒涛の攻撃に敵は怖じ気づき、またも逃亡しはじめた。

雪竹花は愛馬ソルメを駆って敵兵を追撃した。一人の敵将らしい男が鼻筋の白い黒毛にまたがって逃げていた。それは、まぎれもない父親の愛馬であった。すると、あの敵将は父親を殺した耶律に違いなかった。雪竹花は敵将に向かって突進し、心臓を狙って矢を放った。敵将は「あっ」と叫んで落馬した。雪竹花はいちはやく駆け寄り、父親の長剣で首をはねた。

（あー、父上の恨みを晴らすことができた！）

雪竹花は黒毛のたてがみをなでながら「父上！　父上の敵を討ちました」とつぶやいた。

その時、3 人の敵兵がひそかに近づき、一斉に槍を突きかけた。不意を打たれた雪竹花は長剣を振って防いだが、1 本の槍が彼女の胸を突き刺した。彼女は朱に染まって倒れた。姜邯賛以下多くの将兵が駆けつけた時は、彼女は既に事切れていた。

人々はこの時になって、かぶとを脱いで静かに目を閉じている雪竹花がうら若い娘

であると知った。

雪竹花はこのように愛する祖国のために戦い、17 年の短い生涯を終えたのである。

侵略者との戦いに青春を捧げた雪竹花に対する歌が今も伝わっている。

その心が美しくて雪竹花と呼んだのか
節操を固く守って雪竹花と言ったのか
猛吹雪が襲っても光消えることのない
健気な美しい心を雪竹花と呼んだのだ

雪竹花の物語は、高句麗の尚武の精神をうけ継いだ高麗人が、愛国心に燃えて反侵略戦争に老若男女の別なく立ち上がり、愛する郷土を守ったということを実証している。

14．舞踊家楚英と真卿

11 世紀後期に活動した楚英（チョヨン）と真卿（チンギョン）は共に教坊（宮中芸術担当部署）に属する音楽舞踊家であった。

936 年、国土の統合を成就した高麗（コリョ）は、民族の団結した力をもって度重なる侵略者を撃退し、経済と文化を大いに興隆させて「コレア」という名で広く世界に知られるようになった。高麗では文学や芸術の発展も著しく、特に音楽と舞踊の結びついた舞楽は華麗をきわめ、隣邦に見られぬユニークな色彩を帯びた。当時、舞楽は宮中宴や

燃燈会、八関会などの国家的行事で盛大に催された。

楚英と真卿は公演のたびに大きな賞賛を博した。

楚英は作曲もすれば、舞踊の主役ともなり、常にすぐれた技巧を見せた。彼女は民族伝来の歌舞を宮中音楽に取り入れて『踏沙行歌舞』を創作し、1073 年 2 月、燃燈会で披露したが、この舞楽に 12 名の踊り手と共に出演した。

『九張機別伎』も楚英ら数人の努力で取り入れた、特別な技巧を要する舞楽で、1073 年 11 月、八関会での舞台に乗せられて人気を呼んだ。

このとき、『九張機別伎』と共に『抛球楽』も披露されたが、これには 10 余名の踊り手が参加した。『抛球楽』は舞台の中心に抛球門を設け、踊り手が二組に別れて、歌をうたい踊りをおどりながら門内に毬を投げ入れる場面を見せる作品で、中世紀舞台芸術の重要な演目とされ、外国の使臣に観覧させるほど芸術的にすぐれた興味ある舞楽であった。ここでも楚英らが特別な人気を呼んだ。

真卿は楚英と共に、『王母隊歌舞』で特技を発揮した。『王母隊歌舞』は 1077 年 2 月の燃燈会で上演された。きわだった舞台装置のなかで、一つの隊列に 55 名の踊り手が小道具を持って出演する、規模の大きいこの特殊な舞楽では、「君王万才」「天下太平」という 4 文字を同時に作りながら踊るので、『四字舞』とも言われた。この人気ある舞踊で、楚英と真卿は主役を演じ、舞踊の全体的調和を巧みに取ったものである。

高麗の舞楽は、外国使臣の絶賛を博したほどレベルの高いものであった。もっともそのようなすぐれた芸術作品も、封建支配層に奉仕する以外の何物でもなかったことはあえて言及するまでもないであろう。また、当時の舞踊家は卑しい身分の者とみなされ、人並みの待遇を受けることがなかった。

当時、舞踊家の境遇が卑賤であったにもかかわらず、史書に楚英と真卿のような舞

踊家が紹介され、名を残したのは、彼女たちが高麗時代の文学芸術の発展に少なからず寄与したことを物語っている。

15．鄭夢周の母親李氏

李（リ）氏は、息子の鄭夢周（チョンモンジュ）を高麗（コリョ）時代末 14 世紀中葉の有名な儒者、剛直かつ有能な政治家に育て上げげた女性である。

両班（貴族）の家門に生まれた李氏は、幼い頃から父母の慈愛のもと礼儀正しく学識のある娘に育ち、1336 年頃、永川（ヨンチョン）郡（慶尚北道（キョンサン））の著名な儒者鄭雲官（チョンウングァン）に嫁いだ。

鄭氏の一家はみな清廉剛直なことで知られていた。祖先鄭襲明（チョンスプミョン）は、高麗第 18 代王毅宗（イジョン）の時代の高官で、放蕩な王をいさめたことが災いして死を賜った人物である。

李氏と鄭氏両家の人たちは共に儒教を信じ、当時代に至り大きな勢力をなしていた仏教の及ぼす弊害に心を痛めていたことから親交を結んでいた関係もあって、姻戚関係を結んだのは自然のなりゆきだったと言える。

李氏は鄭雲官に嫁いだ後、気節があり、学風の確立している婚家の人たちを尊び、その家風に沿って子女を育てることに努めた。

長男の出生後、李氏は夢に見た事と自分の願いをこめて、名を付けたといういくつかのエピソードが伝わっている。

鄭夢周の最初の名は夢蘭（モンラン）であった。分娩を前にしたある日の夜、李氏は自分とそっくりの可愛い子が蘭の植木鉢を手にしている夢を見て、夫に夢の話をし、夢判断をしたところ、蘭は深山幽谷にあっても常によい香りを放ち、どんな土地にも根をしっか

り張って育つ花である、だから、子を生めば蘭のように強い人物に育てあげるようにという意味だと解釈された。そこで、生まれた男の子の名を夢蘭としたのである。夢蘭は生まれたときから普通の子とは違っていた。例えば、肩に七つのほくろが北斗七星のように並んで付いていたという。

また、息子が九つになった年のある日、李氏は日中に居眠りをして、1 匹の黒龍が裏庭の梨の木に這い上がっていく夢を見た。驚いて眠りから覚めた李氏は、不思議な夢だと思って裏庭に行ってみると、夢蘭が梨の木に上がって遊んでいた。彼女は夫に夢の話をし、夢蘭は女の子のような自分の名前を嫌っている、だから、名前を変えてはどうだろうかと言った。こうして子供の名前は夢龍（モンリョン）と改められた。

その更に 9 年後、夢龍が 18 歳になった時、名前を夢周と改めた。当時両親は、衰退の一路をたどる高麗王朝を建て直すだけの力に不足して農村に引きこもっていたが、息子だけは国の再興に一役買うほどの剛直な人物になってほしいと願い、わが子の教育に力を注いだ。李氏は、夫と共に、夢周の幼い頃から読み書きを教え、朝鮮の歴史を話して聞かせ、愛国心を培った。

李氏は息子の学業成績が高まっていくと、ただ満足するだけでなく、更に高い目標を定めてそれに取り組ませるよう努めた。書堂の先生は、鄭夢周の成績に満足してよくほめたものだが、李氏はわが子を決して甘やかすことがなかった。

詩才にすぐれていた少年夢周は、ある日、近所の無学な女から頼まれて、遠地の夫にあてる手紙を書いてあげたことがあった。

雲は群がってはまた散り

月は満ちては欠けますが

この妻の心変わりませぬ

これは、後世『想思曲』という名で広く知られた詩である。

李氏は後日、手紙の件を知り、その短い詩にこもる深い意味に感嘆した。けれども息子の前ではそしらぬふりをして、学問にますます励むよう訓戒した。

彼女は息子が一つを行えばさらに二つを要求し、二つを行えばまた三つ、四つを要求して、世の事物に対する知識を深めていくよう教育した。こうした努力は実を結び、夢周は人並はずれた才知の持ち主となった。

李氏は、息子が礼儀正しく剛直で義を重んずる人間になるよう教えさとすことも忘れず、家庭では父母によく仕え、外では隣人に礼節を尽くし、良友としっかり交わり、彼らの悩みをわが悩みとし、国の忠臣となるよう度あるごとに教えさとした。

李氏のそうした苦労の一端を語るエピソードがある。夫人は夢周の衣服を仕立てる際はいつも、赤色の裏地を当てたという。そこにはわが子が、いつどんな場合も常に正義を愛し守るようにと願う深い意味がこもっていた。

李氏のこのような原則的な教育は、鄭夢周に正義と真理を愛し、そのためには生命もためらいなく捧げる覚悟を抱かせるようにすることに役立った。

彼が高麗王朝の忠臣となり、またすぐれた識見と弁舌を持つ外交家になれたのは、母親李氏の細心で原則的な教育に負うところが大であった。

1356 年、父親鄭雲官の死は鄭夢周にとって大きな打撃となった。ひたすら学問に励んだ鄭夢周は、本を閉じて 3 年の間喪に服し、悲しみに暮れた。

彼は父親に死なれると母親に向かって、「お父さんがいない世の中で勉強をして何になり、官職について何になりましょうか」と言って慟哭した。すると李氏は、父母

が死んだ後、その子は、父母の志に沿って生きるべきである、だから、学問にいっそう励んで国に尽くすすぐれた人間にならなければならない、そのためにも科挙を早く受験し必ず及第することだ、と言いさとした。

鄭夢周は母親の教えを胆に銘じて、1358 年、首都開京（ケギョン）(開城（ケソン）) で監試（国の最高教育機関である成均館で行う試験）に合格し、1360 年には科挙を受験して首席合格した。

こうして官途についた鄭夢周を前にして、李氏は次のような教訓的な話をした。

「お前のお父さんは、人間にとって大切なことは信義だとおっしゃいました。人間は信義をもって生きてゆくものです。王と臣、父母と子、夫と妻、師と弟子、それに友と友の間には、それぞれ守るべき信義があるものです。信義の欠けた人間をどうして本当の人間だと言えましょう。父母に対し子としての信義を守ることがほかならぬ孝行ですが、お前は今は官途についた身ですから、親孝行だけでは人間の信義を尽くしたとは言えません。臣下として国王に忠誠を尽くすのは官僚が守るべき本分ではありませんか」

「お母さん、ごもっともです」

李氏は言葉を続けた。

「今多くの官吏が忠誠を口癖のようにしていますが、忠誠はただ口で唱えるだけのものではありません。ひたすら国王に忠誠を尽くすべきで、国を思う心に変わりがあってはなりません。そうでないと、この母さんはあの世へ行っても、お父さんに合わせる顔がありません」

鄭夢周は母親の前に両手を突き、「お母さんのお言葉を生活の掟といたします」と誓った。

鄭夢周は、1361 年、芸文館検閲に任命された後、礼曹正郎、成均館博士、大司成、

政堂文学などを経て、門下侍中という最高の官職にまで昇った。

鄭夢周が政界入りした頃は、国の支配体制が大きく揺らぎ、もはや収拾がつかないほどになった高麗末期のことであった。人民は飢えに苦しみ、常に死におびやかされ、両班官吏や富める者たちは栄華の限りを尽くし、権勢ある者は私利私欲を事とした。権力に媚び、物欲に目が眩み、信義も衷情も知らぬ者たちは日を追って猖獗し、官僚たちの派閥争いは目をおおいたくなるほどであった。高麗王朝は今や滅亡を寸前にしていたのである。

李氏は、息子の事を常に案じ、こんな乱れた世の中でこそ王朝への忠節を固く守るべきだと強調した。

ある日、李氏は、どの派閥にも属することなく、ひたすら高麗王朝に忠誠を尽くすようにという志操の詩を詠み、生活の指針とするようわが子を訓戒した。

カラスの争う所へシラサギよ行くでない
猛るカラスどもがそなたの白色を妬んで
万里の蒼波で清めた身を汚すやも知れぬ

鄭夢周は母親の詩を座右の銘として、信義と志操を守り、不正とは最後までたたかった。

鄭夢周が和州(ファジュ)（今日の咸鏡(ハムギョン)南道金野(クムヤ)郡）で女真族を撃破するなど侵略者との戦いを進めていたとき、母親李氏は世を去った。

鄭夢周は葬儀に際して、自分をしっかりと教え導いてくれた母親を涙ながらに追憶し、彼女の教え通りなんとしても高麗王朝を立て直そうと誓った。3回忌を終えると彼

は、最高官の地位を利用して、大官吏や大土地所有者の専横を阻止し、高麗王朝を維持強化すべく寝食を忘れて奔走した。しかし、崩れゆく高麗王朝を立て直すことは既に不可能であった。王権の簒奪をもくろむ李成桂（リソンゲ）一派の跳梁を抑えることができなかったのである。

1388 年、李成桂は、高句麗（コグリョ）の故地回復をはかる高麗軍の遼東遠征を、王権簒奪の野心をもって裏切り、鴨緑江（アムロク）の威化島（イファ）から兵を返して高麗の全権力を手中にしたのであった。

当時、門下侍中の最高官職にあり、性理学者の大家として知られた鄭夢周は、あくまでも李成桂の王権簒奪に反対した。こうして李成桂一派は、彼の殺害を謀議することになった。鄭夢周は死を恐れず、彼らとたたかった。

ある日、彼は李成桂の子李芳遠（リバンウォン）が催した宴会に参加した。ここで李芳遠は鄭夢周の心中を探るため、次のような詩を詠んだ。

こうしてどうなりああしてどうなるか
万寿山（マンス）のクズの蔓が絡めばどうなるか
われらもともどもに絡み合いて百年を
共にするならばいかがなものだろうか

これは、万寿山のクズの蔓のように自分たちとなれあい、新王朝の成立に一枚加わるようにと持ち掛けたものであった。

この時こそと考えた鄭夢周は、母親の志操の詩を思い浮かべながら、次のような詩を詠んで答えた。

この身死にてまた死に百度死するとも

骨が土となり魂が宙にさまよおうとも

君を思うわが衷情に変わりがあろうか

後日『丹心歌』と呼ばれるようになったこの詩を残し、母親の日頃の訓戒に背くことなく、あくまで信義を重んじ節操を貫いた鄭夢周は、1392 年 4 月、開城の善竹（ソンジュク）橋で李成桂一派の手にかかり、憤死した。

李氏が詠んだ志操の詩と鄭夢周の『丹心歌』は、李朝の成立後長い歳月の流れのなかで、臣下は唯一の王朝、つまり李王朝にのみ忠誠を尽くすべきだとする、封建支配層の「信条」の詩、「亀鑑」の詩として愛吟されるようになった。

世に令名を残した文人や剛直の士の背後には、常に彼らを慈しみ育てた母親がいたように、14 世紀末の著名な儒者であり忠臣であった鄭夢周の背後には、彼を生み育てた李氏がいたのである。

16. 内助の功で知られた李氏

世には、内助の功で夫を押し立てた女性が少なくない。

俗人には思いもつかぬ知見や決心、判断を持って、夫を力づけては学問に精励させ、あるいは国家的重任を全うさせるなど、師に勝るとも劣らぬ働きをした女性の名が、歴史に多く記録されている。慕斎金安国（モジェキムアングク）（1478～1543）の妻李氏もそうした女性の一

人である。

慶尚（キョンサン）道安東（アンドン）の郷里で座首（郷長）を務めている李惟新（リユシン）という人がいた。彼は財産があり学識も豊かであったが、妻に早く先立たれ、一人娘と二人でわびしく暮らしていた。

ある日、安東府使（府の長官）金清（キムチョン）が李惟新を訪ね、甥の嫁にしたいとして娘を所望した。

金清は数年前当地に赴任する際、ソウルから親戚に当たる若者を伴って来たのであるが、彼がほかならぬ金安国である。

李惟新は、どうにも納得がいかなかった。聞くところによると金安国は、ソウルの名門両班（貴族）の子である。そんな身分の高い若者が、どうして田舎住まいの自分の娘を結婚相手に選んだのであろうか。

（庶子だろうか。それともかたわではなかろうか）

李惟新は、ただ一人のまなむすめを正体の定かでない者にどうして安心して任せられようかと思い、かぶりを振った。

そこで、金清はありのままに打ち明けた。安国が勉強を嫌い、なまけてばかりいるので、父親から見放され勘当されてしまったというのである。金清は安国を哀れんで、任地に連れて来たうえ、暇を見ては読み書きの手ほどきをした。ところが、安国は一向に勉強に気乗りしないのである。だから、父親に見放されたことは十分にうなずけることだった。ところで、まもなく自分の任期が満了するが、そのとき安国を見捨てて帰るわけにもいかず、あれこれ思案した末、李惟新座首が財産家で、その娘もたいへん聡明なしっかり者だと知り、安国を婿入りさせることができないだろうかと思って訪ねて来た、と言うのである。

話を聞き終えた李惟新は、学問をそんなにも嫌う安国を婿に迎えるのはあまり面白くないことだと思って即答を避け、役所が退けて家へ帰ると、娘を前に座らせて、安東府使金清からかくかくしかじかの緑談が持ち込まれたが、どうしたものだろうかと言った。じっと考えていた娘は、やがて顔を上げ、それほどのことはたいした疵だとは思えません、けれども、わたしはただお父さんのお言いつけ通りに致します、と答えた。娘の言葉に一理があるとして、李惟新は結婚を承諾することにした。

こうして、李惟新の娘は、勉強を嫌がって遠く安東の地に追いやられて来たソウル両班の子と縁を結んだのである。

離任を前にして金清は李惟新親子に、なんとしても安国に学問を仕込んでいただきたい、そうなれば両家にとっての大慶事となるであろう、と言い残して帰京した。

金安国は、その後うつうつとして部屋に閉じこもり、食事もあまりとらなかったので、次第に痩せ衰えていった。心配した妻李氏は、ある日の夜更け、涙ぐんで夫をいさめた。

「たとえ戸外ではなくても、うさ晴らしに離れにでも行き来なさったら、お体がこんなにやつれることはないでしょうに、どうしてこの部屋を離れようとなさらないのです。あなたのやつれ果てた姿を見ていると、胸が痛んでなりません」

「おれは両親から勘当された不孝者だ。そんな人間がのめのめと日や月の光を拝みながら毎日を過ごせようか。ところが、今はお前にまで心配をかけるようになったのだから、両親の前に罪を犯し、お前にも嫌な思いをさせている。おれはなんて不幸せな人間だろうか」

妻は、どうしてそんなに両親を怒らせるようになったのかと尋ねた。安国は、深い溜め息をついて訳を話した。

彼は長男で、生まれたときから丈夫だったうえ容貌も明るく整っていたこともあって、両親にたいそう可愛がられた。父親金連（キムリョン）は、将来息子が家名を上げ、国家に尽くす忠臣になれという願いをこめて、「安国」と名づけた。

父親はわが子に大きな期待をかけ、八つの年に家庭教師をつけた。教師は『千字文』を前に置き、同じ文字を繰り返して読んで聞かせては、独りで読んで見るようにと何度も言ったが、安国は一向に口を開かなかった。

そんな日がいつまでも続くので、たまりかねた父親は、「おい、お前はなんというろくでなしだ」と叫ぶなり、鞭を振り上げた。だが、わが子をそのままうっちゃっておくわけにもいかず、およそ 3 か月ほどの間あるいは叱り、あるいは諭しもして、文字を教えようとしたが、安国の口は固く閉ざされたままであった。

いつしか歳月が流れ、安国は 15 の年を迎えた。小さい時ならいざ知らず、この年になっても本を手にしようとしない息子のことに腹を立てた父親は、こんな間抜け者のために家門に傷がつくなんて、と悔しがり、安国の顔を見るのも嫌がっていたあげく、従弟の金清が安東府使に任命されたのを機に、自分を助けると思って安国を任地に連れて行ってくれるようにと頼んだ。一方安国に向かっては、「わしはお前をもう息子とは思わないから、お前もわしを父親と思うな。お前を安東へ送ることにしたから、今後はそこで死のうが生きようがお前の運命に任せる。この先ソウルに帰って来るようなことがあったら承知せんと思え」と言い放った。安国は、やるせない思いをしながらわが家を後にした。

夫の話を聞いて李氏は、そぞろ憐れをもよおし、そんなにも学問が嫌いかと尋ねた。安国は、どうしてか本を読む声を聞くと、毒薬を飲ませて殺してやると言われる以上にぞっとする、文字というものは、たった 1 字を見るだけでも頭が痛くなり、目の前

が真っ暗になる、と答えるのである。李氏は夫をいたわって床についたが、なかなか寝つかれなかった。

父親の李惟新は、聡明で知恵深い娘の才能を惜しんで、小さいときから読み書きを教えたところ、その上達ぶりには目を見張るものがあった。学習を始めてわずか数年後に早くも『四書五経』に通暁した彼女は、家事に追われながらも、暇を見つけては読書に精を出し、結婚したころは広い知識を身につけていた。

李氏は夫の話を聞いて、何日も考えた。

（大人物は往々にして遅れて大成するという言葉もある。夫の人となりを見ると、そんな大器晩成型の人物だと思えてならない。夫を覚醒させる何か妙案はないかしら）

ある日の夕方、食事を済ませた後で、彼女は夫に尋ねた。

「ねえ、あなたは他人の話を聞くのも嫌なんですか」

「いや、話ならいくら聞いても嫌ということはない」

この返事に力を得た李氏は、それならまず古書を読んで聞かせてそらんじるようにしむけ、本の内容に興味を抱かせれば、やがては読書にもきっと親しむだろうと思った。

「じゃ、わたしが本を読んであげますから、それを暗誦してみません」

「うん、わかった」

李氏は、ある史書を手にし、声を出して読みながら、夫の顔色をうかがった。彼は興味ありげに耳を傾けていた。数ページを読んだ後、復唱させてみると、安国は一区切りも落とさず、そらんずるのである。これに力を得て、10 日ばかりの間夜遅くまで本を読んで聞かせては、復唱させるという方法をくり返したところ、安国は一冊の本を立派に暗唱した。李氏の喜びは大きかった。

「文章というものは特別なものではありません。今まで聞いては覚えたものがみな文章なのですよ。文章は話ですし、話は文章なのです。難しいなどというのは大きな考え違いです」

李氏は、史書を夫の前において１字１字読んでは、その意味を教えた。聞いて見ると、これまで耳で聞き、そらんじたことと少しの違いもなかった。安国は無言でしばらく考えていたが、やがて頭を上げ、目を輝かせて言った。

「文章というものがこんなに易しいものだと知っていたら、とうの昔に読み書きに取り組んで、父を怒らせるようなこともなかったろうにな。漢文なんかは頭から難解なものと決め込んでおじけてばかりいたのだ。こう自信がついたからには、読み書きにきっと精を出すよ」

李氏は悪夢から醒めたかのような夫の顔に見入り、早速明日からでも父に学問を教わるようにと勧めた。

翌朝、娘からその間の話を聞いて喜んだ李惟新は、婿の教育を引き受け、安国は、寝食を忘れて勉学に熱中した。

いつしか 5 年の月日が流れた。李氏親子の一心な後押しと本人の努力は実を結び、安国は慶尚道のどの儒生にも劣らぬほどの文筆家、書道家となった。

その頃、国家は科挙の実施を布告した。

李氏は夫が今ではもう十分な実力をつけていると確信し、科挙を受験するよう勧めた。ところが安国は、勘当された際、二度とソウルへ帰るな、帰ったらただではおかないと言った父親の厳命が気にかかった。厳罰を恐れたのではなく、親の言いつけに背いては、親不孝のそしりを免れないと危惧したのである。

李氏は、それは間違っていると、こう説いた。

「そうではございません。お父様の厳命はあなたの文章嫌いを怒ってのことだったのです。でも、今は立派な文筆家になりました。それに科挙を首席で合格なさったら、大きな功を立てたとしてお父様をお喜ばせすることになりましょう。ですから、その時は間違いなくお父様にお会いできます。もし科挙に受験されなかったら、いつまでたっても勘当を解かれることはないでしょう。お父様には何も知らせずに科挙を受験し、万一、首席で合格なさったら、その時お父様にお会いするのです。もし首席合格に失敗したらそのままお帰りになって、もう一度勉強をやり直し、きっと合格なさってからお会いするとよいでしょう」

安国はもっともだと思い、ソウルへ上がり、試験を受けた。問題を見ると、以前繰り返して学んだ内容のものだったので、一気に筆を進めて、答案を真っ先に提出した。科挙の首席合格者は、金安国であった。

王は金連を呼び、立派な息子を持っているとして大きくたたえた。金連は訳がわからず、口も利けなかった。名前は確かに安東にいるうつけ者の安国に違いないがと不審に思い、急ぎ帰宅すると、見るからに風采のすぐれた息子の安国が出迎え、手をついて挨拶するのである。金連は、白痴とみなして親子の縁を切った息子がなんと科挙に首席合格して帰って来たのであるから、喜ぶこと以上に疑問が先立った。一体どうした訳かと聞くと、安国は目に涙を浮かべて、その間の出来事を詳しく語った。話を聞いて金連はもとより、家中の者がみな感嘆し、口をきわめて嫁をほめそやした。

金安国は仕官後、官位が次第に上がり、国の各種文書を作成する大提学（弘文館と芸文館の最高官職）にまで就き、内外に名文家としてその名を高めた。安国は、外交文書を作成する際は、数日間書斎にこもって草案を作ったが、文書は簡単明瞭ながらも重みがあったので、中国でも高く評価された。このように、金安国が朝廷はもとよ

り国外にまですぐれた文筆家として名声をはせたのは、高い見識と深い思慮をもって夫を助け導いた妻李氏の内助があったからこそである。

17. 詩人金林碧堂

金林碧堂（キムリムビョクタン）は、生涯、貧しい人たちのための詩を詠んだ。真実のこもった彼女の詩は人々の間で広く愛吟された。

林碧堂は、慶尚（キョンサン）道義城（イソン）郡の別座というあまり高くない役人金壽千（キムスチョン）の娘として生まれた。夫の兪汝舟（ユヨジュ）は、才能ある若い儒生で、賢良科（1518 年以来実施されていた新進官吏の選抜制度）に推薦されたが、1519 年、士林派の両班（貴族）が大々的な粛清を受けた「己卯（きう）士禍」なる出来事が発生すると、仕官を断念して故郷の忠清道韓山（ハンサン）郡へ帰って暮らした。生活は楽でなかった。

金林碧堂は、暮らしの暇を見つけては詩作にいそしみ、その間、女性に特有な生活を社会的な問題と結びつけていろいろな詩を詠んだ。

当時、国の南海岸と西海岸には日本の海賊がひんぴんとして大挙襲来しては、住民を殺害し、略奪を事としていた。夫は、海賊を防ぐための戦いに加わり、数年間家を明けていたこともあった。

出征して 3 年が経っても頼りのない夫を思い金氏は、寒風すさぶ冬のある日、寒冷な戦地の夫を慕って詩『離別』を詠んだ。ここで彼女は、夫への愛情と共に、国運を憂える愛国の心情を吐露している。

『貧しい女のうた』は、彼女の代表作の一つである。その第 1 首で、辺鄙な山里で

暮らす貧しい女の、来客があってもろくなもてなしもできずに送り返すもどかしい心境をうたい、第2首で、次のように続けている。

真夜中が過ぎても
機を織りますのよ
カッタンコットン
機織る音聞いては
寒さとも戦います
こんなに骨折って
機を織るけれども
出来た服着る人は
ほかにいるのです

封建時代における閨秀詩人の作品は概して家庭生活を主題としているが、そんな当時、詩のテーマを広げ、不遇な女の運命を社会的問題として取り上げていることに、彼女の進歩的な思想の一面がうかがえるのである。

彼女は、多くの詩を詠み、詩集を出しているが、残念ながら今日まで伝えられているのは、『列朝詩集』『稗官雑記』などに一部掲載されたものだけである。

しかしながら、それら数編の詩を通しても、彼女が勤労人民を愛し、抑圧され搾取される貧しい人たちの苦痛と悲しみを生々しく表現した、才能豊かな女流詩人であったということがよくわかる。それで、16世紀の文人魚叔権(オスククォン)は、李(リ)朝時代初期の著名な女流詩人3人をあげ、そのうちの一人が林碧堂だとして、高く評価したのである。

18. 死をもってわが子を世に押し立てた楊士彦の母親

蓬莱楊士彦（ポンレヤンサオン）は、16 世紀の名筆であり、名文家としても知られている。

彼は石峯韓濩（ソクポンハンホ）、秋史（チュサ）金正喜（キムジョンヒ）と並ぶ、李朝時代３大名筆の一人であり、また多くのすぐれた詩を残してもいる。

彼が名筆・名文家として当代はもとより、後世にまで広く名を知られるようになったのは、幼いわが子の前で自決した母親の悲惨な最期を抜きにしては考えられない。

全羅（チョンラ）道霊岩（リョンアム）の下級将校の家庭に生まれた母親は、幼い頃から体つきが整い、顔立ちがよいばかりでなく、聡明で気性もしっかりしていた。

彼女が 12 の年のある夏の日のこと。霊岩郡守(郡の長官)がソウルからの帰途、道端のどこかの農家に立ち寄って昼食をとろうとした。ところが農繁期のことで、どの家にも人影がなかった。当惑していると、ある家で留守番をしていた一人の少女が、「わたしがお食事を支度いたしますから、みなさんどうぞお上がり下さい」と言うのである。一行は喜んで彼女の厄介になることにした。

少女は部屋の中を整頓し、敷物を新しいものと替えた後、一行を座敷に請じ入れ、郡守用の食事は自家のお米でこしらえたい、でも従者たちのものは持参のお米を出していただきたいと言った。

そんなてきぱきした言動に感心した郡守は、少女の顔に目をこらした。自分のような高官の前でもいささかも物怖じすることなく、沈着で言葉つきも明るく朗らかで、田舎っぽいところはまるでなかった。

しばらくして膳が整えられたが、それが見るからに美しくてうまそうなので、みんな舌を巻いた。

すっかり感心した郡守は、少女を前に座らせて二言、三言話をした後、荷をほどいて中から青色と赤色の扇子を取り出し、「これらはわしがお前にあげる結納だよ。わかったかね」と、からかうような口ぶりで言った。

すると少女は立ち上がって、居間のたんすの中から赤い風呂敷を取り出し、郡守の前に広げた。

「扇子をこの風呂敷の上に置いて下さいませ」

郡守がどうしてかと聞くと、「貴重このうえない結納の品を、どうして素手でいただけましょうか」と顔色を正して答えるのである。郡守をはじめ一行の者は、少女のそんな態度にまたまた感嘆した。

少女が 15 の年を迎えると、両親は娘を嫁にやろうとした。ところが、娘は、自分は霊岩郡守から結納をいただいた身だから、死んでもほかへは行かないと言い張るのである。困り果てた父親はやむを得ず郡守を訪ねて、娘の心情を話した。

郡守はその頃、妻を亡くして不便な思いをしていた矢先だったので、その娘をそばめとして家へ迎え入れることにした。こうして、2 本の色扇子が縁結びの神となって娘は、郡守楊希洙(ヤンヒス)に迎え入れられたのであるが、その人となりをよく知っていた郡守は、彼女の部屋を亡妻の居間に当て、生活の切り盛りを一任した。彼女は、本妻の子女をわが子のように可愛がり、召し使いたちを親切に遇し、また、親類の人たちとも睦まじく交わるなど、主婦の務めをそつなく果たしたので、家庭はすこぶる円満であった。

ほどなく楊希洙夫妻の間に男の子が生まれた。この子がほかならぬ楊士彦である。

楊士彦は生まれたときから丈夫な体つきをし、目はくりくりとして明るく、非常に利発で、しかも根気強く、読み書きや習字に熱中している時は、いつ夜が明け、いつ日が暮れたかも気づかぬほどであった。成長するにつれて立ち居振る舞いも端正にな

り、将来が嘱望されるようになった。

わが子が大きくなり、並はずれた才能を示すようになるのを見て、母親はある不安な思いに駆られはじめた。いくら風格がよく才能にすぐれていても、息子は庶子に過ぎなかったのである。

母親は日と共に成長する息子を見るのが苦しかった。そんなとき、夫に先立たれるという思いがけない不幸に見舞われた。幼い息子の将来を考えると、母親の胸はふさがるばかりだった。

（いくら将来を嘱望されるなどと言われても、この母親のせいで庶子の処遇に一生甘んずるほかない哀れなわが子。この子を生んでいなかったら、あんなに学問に励んだ末に失望のどん底に落ちるということもなかろうに）

夫の死後3日目の日、彼女は悲しみを抑えて、本妻の子たちにこう言った。

「あなたたちにお頼みしたいことがあるのだけど、聞いてもらえましょうか」

「お母さんのお言葉ですのに、どうしてむげに断われましょうか。どうぞおっしゃって下さい」

長男が丁重に答えた。

「わたしが生んだこの子はそう愚かではないけれども、わが国の風習では妾の子は差別を受けるほかないのですから、あの子が大きくなっても日陰の運命を免れません。あなたたちは、今、この子をなにへだてなく可愛がってくれているけど、今にわたしが死んだら、お葬儀であなたたちはこの子とは違った喪服を着ることになります。そうなったら誰の目にもこの子が庶子だということが明らかになります。でも、わたしが今死んだら、葬式をお父さんの葬式と重ねてすることになりますから、みんな同じ喪服を着ることになり、嫡子と庶子の違いは明らかになりません。ですからわたしの

気持ちを察して、憂いを後に残さないようにしていただきたいの。そしたらもう死んでも本望です」

「士彦のことなら、別に方法はあるはずです。ですのに死ぬなんて、なんということをおっしゃるのです」

みんなは口を揃えていさめたが、彼女はきっぱりと言った。

「あなたたちの言葉を聞いて本当にうれしく思います。でも、この場合死ぬしかほかに方法はありません」

彼女はこう言うと、やにわに懐刀を取り出してわが胸に突き刺し、夫の柩の前に倒れた。驚いた人々が生命を救おうと懸命になったが、無駄だった。

以前は、父母の葬儀を同時に行う場合、喪服は父親用のものだけを着用したので、母親の身分が表面化することがなかった。彼女は夫の死の直後自決することで、わが子の将来に影がささないようはかったのである。

母親の自決は、幼い士彦にとって大きなショックであった。彼はそれ以来、嫡子と庶子を差別する封建社会を呪う一方、何事にもくじけぬ克己心を養い、学業に精魂を傾けることで世に立とうと固く心に誓った。

幼年時代、母親の悲劇的な運命を目のあたりにした楊士彦は、後日、次のような詩を詠み、わが座右の銘とした。

泰山は高くとも天(あま)が下の山なり

登り登れば山頂を極めるものを

人は自ら登りもせず高いと言う

楊士彦は、強い意志をもって努力に努力を重ね、当代の名筆となり、詩人としても名をなした。

彼は麗しい祖国の山河を愛し、金剛山（クムガン）をはじめ各地の名勝を巡ってはすぐれた筆跡を残し、珠玉の名詩を生んだ。彼が残した筆跡のなかでも最も広く知られているのは、金剛山万瀑洞（マンポク）の入り口にそそり立つ巨岩に刻まれた文字「蓬莱楓岳元化洞天」である。（蓬莱山と楓岳山は金剛山の別名、元化洞天は万瀑洞の別名）

17 世紀末の著名な文筆家金昌協（キムチャンヒョプ）は、その著『東遊記』に楊士彦の「蓬莱楓岳元化洞天」について、「龍が尾を振りおろすようでもあり、獅子が前足で叩きつけるようでもある。その書体は楓岳の気象と雄大さを競っている」と賛嘆している。この 8 字からなる力強く豪壮な筆跡は、今も金剛山観光客の心を強くとらえている。

楊士彦は、世界の名山金剛山の絶景を誇り高くうたった詩『金剛山』をはじめ、数多くの詩を残した。

彼は、1546 年、科挙の文科に合格し、一時安辺（アンビョン）府使（府の長官）を勤めたこともある。

腹違いの兄たちは、義母の遺言を守って士彦を実弟のように愛し、その生まれを誰にも洩らさなかった。そのお陰で彼は仕官をし、名筆・名詩をもって天下に名を知られるまでになったのである。

わが子を立派な人物に育てあげたいと念ずるのは、母親一般の共通した願望である。楊士彦の母親も聡明なわが子を国の立派な人材に育て上げたいと願い、そのためにわが命を絶つという決断を下したのであった。

蓄妾制度や庶子差別制度によって人間の運命をもてあそんだ封建社会が楊士彦の母親に強いた悲劇的運命についての物語は、古書『渓西雑録』によって伝えられ、人々

に深い感銘を与えている。

19. 多芸多才で世に知られた申師任堂

朝鮮（チョソン）の歴史には、父母に孝養を尽くしたことで名を知られた女性もいれば、詩文や書画で名をなした女流文芸家もおり、子女を立派に訓育した賢母の名もあり、深い思慮と見識をもって夫を世に押し立てた女性もいる。しかしながら、そうした女性たちの大半は、ただ1、2の特長のみをもって名をなしたと言ってよいであろう。

ところで、16世紀に生きた申師任堂（シンサイムダン）は、女流詩人であり、名画家、名筆、名文家であり、親には孝養を尽くし、深い思慮をもって夫を助け、子女を立派に育てた母親でもあった。とりわけ彼女は名にしおう女流画家として、また大学者栗谷李珥（リュルコクリイ）の母親として人望が高かった。

1504年10月29日、江原道（カンウォン）江陵（カンルン）に生まれた申師任堂は、気立てがやさしく、しとやかな女性であった。生来器用なたちで、裁縫、刺繍、料理づくりは言うまでもなく、作文、書道、絵画などの腕も人並みすぐれていた。彼女は19の年に、監察というあまり地位の高くない李元秀（リウォンス）と結婚した。

以前は、詩作と書道、絵画共に秀でた人を、「詩書画3絶」と呼んだものであるが、ほかならぬ申師任堂が、そのような女性であった。とりわけ彼女は、絵画で特出した技量を発揮した。彼女は7歳という幼い年で、世宗（セジョン）王時代の有名な画家安堅（アンギョン）の絵を手本にして、山水画とブドウの絵を見事に描いて人々を驚嘆させたという。これについて、同時代人の魚叔権（オスククォン）は『稗官雑記』にこう書いている。

「申師任堂は、幼い頃から絵の勉強をしたが、彼女のブドウの絵と山水画は絶妙で、その技量は安堅に次ぐという評を得ている。果たして女の絵だとして過小評価し、また、それが女に適した技芸ではないなどと言ってすまされようか」

申師任堂は一生の間、画帳、掛け物、屏風などに風景、魚類、鳥類など数百もの絵をかいたという。今日に残る40余の絵画はいずれ劣らぬ名作であるが、なかでも『ナス』『ブドウ』『マガモ』『スズキ』『ガン』『蓮池のサギ』などは傑作中の傑作である。彼女の絵は写実的で、それらには民族の情緒と生活を愛する多情多感な女流画家の創作的個性がよく表出されている。

申師任堂が生まれ育った江陵は、山水の麗しい景勝の地である。彼女は秀麗な郷里の山河を画くことに努め、また身辺の素材に親しみをこめ、民族的情緒がみなぎるよう形象した。これは、多くの画家が外国の風景や梅、蘭、菊、竹など四君子を主題としていた当時の風潮に較べると、極めて進歩的な画風であった。師任堂は、絵画の素材をありのままに、しかも写実的効果を高めるよう按配し、精巧な筆致と鮮明な色彩で描き出す妙技を所有していた。

彼女の絵がいかに生き生きとしていたかは、幾つかのエピソードを通しても知ることができる。

ある人に申師任堂のマツムシの絵があった。夏のある日、その絵を干そうとして庭先に広げておいたところ、マツムシが実物にあまりにもそっくりだったので、ニワトリがついばもうとしたという。

こんなエピソードもある。申師任堂が、ある人の結婚式に招かれて行った時、一人の女が泣き出しそうな顔をしそわそわしているのを見て、言葉を掛けた。

「あんたどうかしたの。何か無くしたんじゃない」

「いいえ、そうじゃないの。あの—……」

女は自分のチマを見せながら、ここへ来る時、人のチマ・チョゴリを借りて着たのだが、つい粗相をしてチマを汚してしまったと言うのである。

「それなら、わたしが新しいチマを手に入れてあげよう」

申師任堂はこう言うと、筆と絵の具を持って来て、汚れたチマの裾にブドウの房を描いた。みずみずしいブドウと龍が昇天するかのような趣の茎、露に濡れているかのような青い葉……。その生き生きとした絵に、くだんの女はもとより、居合わせた人たちはみなうっとりと見ほれた。

「ねえ、これを市場で売ったら、新しいチマを買うだけのお金ができます。そうなさいね」

師任堂の美しい心と絵のすばらしさに感嘆した女は大喜びし、何度も礼を述べた。このブドウの絵入りのチマは、元のチマの何倍にもなる値段で買い手がつき、女は新しいチマを買って主人に返したという。

このように申師任堂は、主として花鳥など自然の風物を、採色のうえでも実に生き生きと画くことによって、朝鮮画の発展に大きく寄与し、当時ばかりでなく、後世にも高い評価を得たのである。

申師任堂は書道でも抜きんでた才能を示した。彼女は生涯にわたって多くの筆跡を残したが、今日に伝わるのは 6 幅の草書と 1 幅の楷書だけである。彼女の生地江陵の烏竹軒（オジュクホン）には、草書の木版本が保管されているという。1868 年、尹宗儀（ユンジョンイ）が江陵府使（府の長官）を勤めていた時、師任堂の子孫が家宝としている彼女の草書体の掛け物が消失してはと危惧して、それを木版にして保存するよう勧めたものであった。

彼女の書体は、上品で美しく、女性的な色合いが多分にあった。

申師任堂は、詩才にも長じており、故郷や父母に思いを寄せる切々とした心情を主題とする詩を多く詠んでいる。彼女はソウルで家庭の主婦として暮らすなかでも、生まれ故郷の山河や父母を夢にも忘れたことがなかった。故郷には自分を生み育ててくれた懐かしい両親がおり、その前できれいなおべべを着て歌ったり踊ったりした幼年時代もあった。彼女は、それらの思い出を詩『父母を思って』にこめている。

重畳と山岳続く千里先の郷関の家
夢にも忘れられない懐かしい父母
寒松(ハンソン)亭のほとりの水上に月影宿り
鏡浦(キョンポ)台の前を一陣の涼風吹き渡る

白砂のカモメは散ってもまた集い
波間に浮く漁り船も行き交うもの
いつの日また江陵のわが古里訪れ
二親に見(まみ)え楽しき一時過ごさんか

師任堂の詩は残念なことに数首しか残っていない。

申師任堂が義父母と夫に仕え、いくたりもの子女を育てながらも、書画に親しみ、詩作を楽しんだ才能豊かな画家、能書、詩人として後世に名を残すことになったのは、単なる天性の資質に負うだけのものではなかった。古里を愛し、自己のものに誇りを抱き、疲れを知らぬ創作意欲とも相まって、彼女は「詩書画 3 絶」の栄誉をかちえたのである。

申師任堂は婚家では、良妻賢母の典型であったし、そんななかでも読書熱心で、古来の教訓的物語をよくわきまえて、世事・人事に対する判断力を身につけ、女の務めをおろかにすることがなかった。師任堂という号には、古くから貞淑の誉れが高いと聞こえていた太任にあこがれ、師事したいという思いがこもっている。

師任堂は、不如意な生計を切り盛りし、高齢の姑洪(ホン)氏に心から仕えた。

夫の李元秀は、高麗(コリョ)時代の中郎将李敦守(リドンス)の12代目の子孫に当たり、最初の名は蘭秀(ランス)、あざなは徳亨(トクヒョン)であり、師任堂より3歳上であった。彼は幼くして父親に死なれ、母親の手一つで育てられた人であった。師任堂は夫と親密に過ごし、常にその仕事を立派に助けた。彼女はまた、平素有名な学者や実のある人を選んで付き合い、そのことが災いして苦境に立たされたような場合も、信義を守り、相手を裏切るようなことはしなかった。

申師任堂は、子女の教育に力を入れた賢母としても知られている。彼女には、李璿(リソン)、李蕃(リボン)、李珥(リイ)、李瑀(リウ)の4人の息子と3人の娘がいたが、彼らをみな国に忠実な人材に育てようと、日課を定めて学業に励むようきびしく教え導いた。子供たちはそうした母親の感化を受けて立派に成長し、いずれも当代に名を知られた人物となったが、なかでも三男の栗谷李珥は特出している。

栗谷は幼少の頃から読書を好み、ひとたび本を手にすると寝食を忘れるほど熱中した。それに、たいそう怜悧で、一度読んだものはそのまますらすら覚えてしまうほどだった。師任堂は、そんな栗谷を誰よりも可愛がり、その訓育に特別な力を入れ、きっと学者として大成させようと思った。

母親の願望通り、栗谷李珥は理気二元論を主張する代表的な哲学者として内外に名を上げ、30年もの間右議政（政府の最高官職三政丞の一つ。領議政、左議政に次ぐ地位）

をはじめとする幾つかの官職を兼任し、党争の渦巻くなかでも、社会的弊害を克服し国の富強発展と国防力の強化をはかる、さまざまな対策を打ち出した。それらのなかでも特に、壬辰祖国戦争（1592 年に始まった豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争）開始 10 年前（1582 年)に提起した「10 万養兵説」は後日、朝廷に大きな波紋を投じた。

申師任堂の筆法を鑑とした末子李瑀も、当代の名筆であったし、長女李梅窓（リメチャン）も母親に劣らぬ徳行と知識、才能によって世に名を知られた。

才能豊かな女流画家であり、子女を立派な人材に育て上げた母親である申師任堂は、1551 年、ソウル三清洞（サムチョン）で 48 年を一期として世を去った。

このように、申師任堂は中世に生きた女性のなかで最大の余韻を残した人物である。

20.「松都 3 絶」の一人黄真伊

朝鮮史上には、美貌と傑出した詩才、魅力的な歌声をもって世人を魅惑した名妓黄真伊（ファンジンイ）の名も記録されている。

明月（ミョンウォル）黄真伊は、開城（ケソン）の両班（貴族）黄（ファン）進士（科挙の小科初試の合格者）の妾腹である。母親の陳玄琴（チンヒョングム）は容色のすぐれた女性であった。母親似の真伊は、幼い頃から可愛い顔立ちに加えて歌や踊りが上手で、口々にもてはやされた。けれどもその美貌が災いして、彼女の人生は必ずしも順調でなかった。

彼女が 15 の年のある日、隣家の若者が天女のようにあでやかな彼女の姿を垣間見てぼうっとなり、叶わぬ恋に悶々としたあげく病死してしまった。ところが、その霊柩が黄真伊の家の前を通りかかった時、柩が地面に降りて動かなくなった。黄真伊を

焦がれて死んだ亡者の執念がなせるわざだろうと思った人々が、彼女のチョゴリを請うて来て掛けてやったところ、柩は軽くなって運んで行けるようになったという。

　この出来事は、それまでの快活な真伊に大きなショックを与えた。

　（女のわたしが世の人のため善行を積めないまでも、隣家の大事な息子を死に追いやったのだから、なんという罪作りなことだろう。この先もわたしの容色に惑わされて、焦がれ死にするような人が出ないとも限らない。一体どうしたらよいかしら）

　彼女は悩みに悩んだあげく、母親の反対を押し切って妓生（キセン）の道に踏み込んだ。彼女は妓生になっていくばくもなく、歌舞や琴はもとより、音楽全般に通じ、たちまちのうちに広く名を知られるようになった。とりわけ男性の場合は、彼女に一度でもよいから会って見たいと思わない者がいなかったという。

　黄真伊は妓生の身ではあったが、生来清廉なたちで、並の妓生とは違い、厚化粧などをしたことがなく、常に地味な身なりで客に対するなど、慎ましやかな生活を信条とした。

　ある日、開城留守（りゅうしゅ）（長官）が母親の還暦祝いの宴を張り、管轄下の郡・県長などの官吏を招待し、当地方の名妓、名歌手をことごとく集めた時のこと。他の妓生は誰もがみなけばけばしくわが身を飾り立て、人の目を引こうと努めたが、黄真伊は素顔に普段と変わらぬ身なりで参加した。にも拘らず彼女の美しさは満座を圧倒した。それに、玉をころがすような歌声とも相まって、あたかも天女が舞い降りたのではと思わせるような趣であった。

　たまたまそこには、全国有数の琴の名手として聞こえた厳秀（オムス）という 70 歳の楽士がいた。彼は、驚きの目を見張り、自分は50年の音楽生活中、あんなに品格の高い美人を見るのは初めてだ、人間の世界に天女が降りたのではないか、それにあの歌声はな

んとまたすばらしいのか、天下に二人といない名歌手だ、と嘆声をもらした。実に黄真伊は、その端麗な容姿と高い気品で一世を風靡した絶世の美女であった。

彼女は、官僚貴族を相手に伎芸を売ってはいたが、物欲に捉われて誰にでもやたらに肌を許すといった女ではなかった。とは言え、志操堅固だとして威厳を装い高尚ぶる高慢な偽善者を見ると、その鼻を折ることもためらわなかった。

30 年間禅を組み、生き仏と崇められていた知足（チジョク）禅師が、黄真伊の誘惑に乗って破戒の憂き目に会い、大恥をかいたというエピソードは、そのよい実例である。

ある日、黄真伊は、天馬山（チョンマ）清涼峰（チョンリャン）の麓にある知足庵を訪れた。難攻不落を自負する老僧を試してみたくて、深い山中の庵の戸を叩いたのである。

「思うところがありまして、仏門に入ることを決心してお訪ね致しました」

知足禅師は、女色を遠ざけることを信条としている身であるとして、彼女の弟子入りを拒絶した。その態度のあまりの冷たさに取り付く島もなく引き返した彼女は、数日後、一計を案じて、白装束に身をやつし、夫に死なれた女を装って知足庵を再び訪れ、禅師の隣の部屋に寝所を定めて、夜毎「亡夫」の供養をした。自作の弔辞をそれらしく唱える美しくも物悲しそうな声は、石仏の心をも動かすほど魅力的であった。数日の間仏の冥福を祈る言葉を聞くともなく聞いていた禅師は、その一心不乱ぶりにいたく感心して、30 年間続けている瞑想から醒め、目を大きく開いて黄真伊の姿をじっと見つめた。すると、胸が怪しくときめき、禅の世界の清浄な心は跡形もなく霧散して、俗世の欲望がむらむらと湧いた。黄真伊は、巧みな言葉づかいにあだっぽいしなを混ぜ合わせて知足禅師を惑わし、ついには仏教の戒律を破らせてしまったのである。

黄真伊の魅惑を前に超然としていた人物は、哲学者花潭徐敬徳（ファダムソギョンドク）ただ一人だったと言

われている。

　ある日、仕官を断念し、開城に移り住んで学問に専念している徐敬徳こそ、色香に迷わぬ、真に道徳的で品の高い両班だという噂を耳にはさんだ黄真伊は、好奇心に捉われ、自分の色香に迷わぬ男がいるものかと高をくくり、徐敬徳のいる逝斯(ソサ)亭を訪れた。

「俗世間の塵にまみれた身を清めたく思い、ご高見を拝聴したくてお伺い致しました」

「さようかな。どうぞお上がりなさい」

　屈託なく彼女を座敷に請じ入れた徐敬徳は、数日の間、時間のたつのも忘れて学問を論じ、詩をやりとりし、彼女の歌や踊りを楽しみもしながら真伊の才能に感心し、心からたたえてやまなかった。真伊は森閑とした夜更け、徐敬徳に寄り添って愛敬を振りまき、おどけたしぐさで気を引いても見たが、彼は快活に笑うばかりで、みだらな行為は一切しなかった。黄真伊は、徐敬徳の深くも広い学識と高潔な人柄、堅固な志操に感嘆して深く恥じ入り、彼の前に手を突いた。

「先生、先生はまこと天下の大聖人です。先生は『松都３絶』をご存じでしょうか。一つは朴淵(パクヨン)の滝、一つは花潭徐敬徳、いま一つはこの黄真伊です」

　徐敬徳はただ笑うばかりで、なんとも言わなかった。この出会いが世に知られて、「松都３絶」の一人黄真伊の名声はいっそう高まった。

　黄真伊が歴史に名を残したのは、たんにその容貌と歌と踊りのせいだけではなかった。

　彼女は、当代における誉れ高き女流詩人でもあった。その詩は、人の意表をつくほど破格的であり、繊細かつ自由奔放を特徴としていた。当時の固陋な両班儒者の詩風

とは一線を画して、人間を愛する気持ちを素直に表現していることと、デリケートな心理の描写、斬新かつ洗練された詩風を切り開いたことで、彼女は16世紀の時調（朝鮮固有の民族詩形態の一つ）の分野に新風を吹き込んだのである。

彼女の詠んだ時調は、残念なことに6首のみが今日に伝えられている。

行く秋の夜長にわが身を二つに折り
秋風の布団の中にこごめて入れるも
君帰りなばその夜は長々と伸ばさん

＊　＊　＊

青山はわたしの思い緑水は君の情け
緑水流るるも青山に変わりあろうか
緑水も青山に引かれてくねり流れる

長い夜、背の君を待ち焦がれる女の切情と、君の情は変わろうとも、わが信頼の心は青山のように変わらぬと、女の愛情を集約してうたったこの2編の時調は、従来の格式を打破して、人間の内面世界を濃厚な叙情的表現で奔放にうたい上げている。

時調『青山裏碧渓水也』もまた、限られた詩語を巧みに駆使し、比喩を活用して人間の感情の複雑微妙な動きをリアルに表現した、特色ある作品である。この時調は、一つのエピソードとも結びついて、人々の間で愛吟されるようになった。

当時ソウルには、李碧渓水（リピョクケス）という、王の血筋を引く、気位の高い人物がいた。ある

日、碧渓水が幾人かの同僚とよもやま話をしていた時、たまたま松都（ソンド）（開城）の名妓黄真伊が話題にのぼった。同僚たちは口々に彼女の美貌と才能をほめそやし、彼女に魅了されない男はいないと言った。ところが、碧渓水はせせら笑って、それがどんな女かは知らないが、自分がその女に会ったら眉一つ動かさずに、この天下の娼婦めが、と怒鳴りつけて追い払ってやる、と大見得を切った。

こうして彼らと賭けをした碧渓水は馬にまたがり、意気揚々と開城に向かった。開城に着いたのは、空に星のきらめく夜で、十五夜の月は丘の上から明るい光を地上に注ぎ、谷川の水はさらさらと音を立てて流れていた。碧渓水はそんなことにはお構いなく、ある山裾の角に向け馬を進めた。この時どこからか、女の朗々たる吟唱の声が聞こえて来た。

青山渓谷の碧渓水よ淀みなく流れると誇るなかれ
ひとたび青海原に至れば再び帰ること叶わぬゆえ
明月の光全山に映える今こそ一休みしてはいかが

詩を吟じていたのは、ほかならぬ黄真伊であった。彼女は、美女など眼中にも置かないとうぬぼれている李碧渓水が開城へやって来ると聞いて、この谷間に待ち構えていたのである。碧渓水は耳を澄まして詩の意味を考えた。

「青山渓谷の碧渓水」は、青山の清流を彼にたとえた語であり、「明月の光」は黄真伊にたとえた語である。つまり黄真伊の吟唱は、自然の風景に事寄せて、「あなた碧渓水よ、美人を近づけないなどと言うなかれ。一度チャンスを逃せば、二度とそんな幸運に巡り合えないでしょうから、この秀麗な谷間で一休みし、このわたし、黄真伊に

お会いなさってはいかがでしょう」という意味を暗々裏にこめたものであった。

碧渓水は、彼女のすぐれた詩才に感心しながら馬を進めた。すると、その目の前に、月光に照らされた白衣の美女が忽然と現われた。碧渓水は目を見張り、食いいるように女の姿態に見入った。空の天女かと見まがうほどにあでやかなその姿に、碧渓水は茫然自失し、ふらふらっとなって馬から転がり落ちてしまった。黄真伊は笑いながら、あなたはどうしてわたしを追い払わないで、落馬なさったのですか、とからかった。碧渓水は恥ずかしさで胸が一杯になり、一言も口をきくことができなかった。

黄真伊の『朴淵瀑布』『蘇陽谷(ソヤンゴク)の帰京を送る』『半月』『満月台(マンウォルデ)』など4編の漢詩を見ても、その並々ならぬ詩才をうかがい知ることができる。

黄真伊は、祖国の秀麗な山河をこのうえなく愛し、そこに民族的誇りを人一倍強く抱いた詩人であった。彼女は若い頃早くも、金剛(クムガン)山や智異(チリ)山など国内の名山を遊覧していたが、開城の名勝朴淵の滝をとりわけ愛し、全渓谷に轟音を響かせながら落下する、壮快きわまる滝の雄大な景観を高らかに謳歌したかった。こうして生まれたのが、有名な詩『朴淵瀑布』である。

一条の流れ深淵に落ち
百仞の滝壷に水噴出す
天の川逆流するが如く
白虹の立ちたるが如く
落流全渓谷を揺るがし
しぶき大空に玉と砕く
廬山にのみ遊ぶ事勿れ

天摩（チョンマ）の滝天下に冠たり

朴淵の滝を目のあたりにし耳にするかのような、迫力に満ちた描写にこそ、彼女の詩的技巧の真価があり、隣国廬山の滝ならぬ天摩山の朴淵の滝のすばらしさを誇り高くうたい上げているところに、故郷を愛し、祖国を思う愛国の熱情が脈打っているのである。

詩『半月』は、空にかかる半月を女らしい繊細な観察と深い情緒、巧みな詩的修辞法をもって感銘深くうたった作品であり、ここにも黄真伊のすぐれた詩才がよく表出されている。

詩『蘇陽谷の帰京を送る』は、当代の名だたる官僚文人陽谷蘇世譲（ソセヤン）と情を交わした黄真伊が、離別を前にして詠んだものである。

黄真伊の噂を聞いて、ソウルから１か月の日限で松都へやって来た蘇陽谷は、帰京１日前の夜、豪華な宴を張った。見晴らしのよい高楼の一室で酌み交わす杯はいつ終わるともなく、渓流のせせらぎと梅花の香りは両人の吟唱と溶け合い、いやがうえにも慕情をそそった。夜が明ければいとしい人と別れなければならない黄真伊は、平静でいられなかった。

深夜、宴を終えると、彼女は切ない心情を詩に託して蘇陽谷に訴えた。別れを惜しむその詩を一句一句読み進めていた蘇陽谷の目は、最後の句の前に釘づけになった。

夜が明けてお別れしたら

身に沁みた情やる方ない

蘇陽谷はこの詩を読んで、ひどく心を打たれ、帰京を 1 日延ばしたという。

このように、黄真伊は、時調でも、また漢詩でも抜きんでた技巧を発揮して、朝鮮の詩文学に特異な彩りをそえた才能ある女流詩人であった。

黄真伊は詩ばかりでなく、書道でも一家をなした。

彼女は、朴淵の滝を好んで訪ねた。滝壺のかたわらには、数十名が座れるほどの平たい大岩があるが、彼女はよくここへ座って、水しぶきを上げて流れ落ちる壮決な滝に見とれたものである。なんとすばらしい自然の景観であろうか。

ある日黄真伊は、ほれぼれとするような漆黒の髪の毛をほぐして、墨汁にどっぷりと浸け、岩の面上に揮った。

飛流直下三千尺	三千尺を墜下する飛流は
疑是銀河落九天	九天より落ちる天の川か

あるいは太く、あるいは細く曲線を描くそれらの字画は、あたかも生きて動いているようであった。黄真伊が髪の毛を揮ってものにしたこの草書体は、直ちに石工の手で岩に刻まれた。龍の頭と鳳凰の尾が絡み合っているかのような、この世にもまれな筆跡は、壮観な朴淵の滝と見事な調和をなして、今日なお見る人を感嘆させている。

才色兼備の有名人黄真伊がいつ死亡したかは明らかでないが、40 歳前後のことだったとされている。

黄真伊は臨終を前にして、「世の男たちがわたしに心を奪われて身を誤った。だから、わたしが死んだら棺を使わず、死骸をそのまま東門の外の砂地に捨てて蟻やうじ虫のするに任せ、全国すべての女の戒めとするようにして下さいな」と遺言したという。

人々は彼女の遺言を考慮し、長湍(チャンダン)郡亀井(クジョン)県南側の道路際になきがらを埋めて霊を慰めた。

黄真伊の名声は、その死後も人々の記憶に長く留められた。

李(リ)朝時代、歌舞と詩作に長けた美貌の女性は少なからずいたが、黄真伊には遠く及ばなかった。とりわけ、泥沼の中でも汚れることなく、清廉に育つ蓮の花のように高潔な気品、それに固陋な両班文人には見られない型破りな時調を大胆に詠んだ黄真伊の才能は、彼女にじかに会えなかった後世の人たちをも魅了した。

黄真伊を憧憬してやまなかった李朝中葉の好男子白湖林悌(ペクホリムジェ)が、平安(ピョンアン)道の都事(正 5 品の官職)として赴任する途中、松都に立ち寄った。彼は道ばたで馬を降り、一瓶の酒を持って黄真伊の墓地を訪ね、雑草の生い茂る土まんじゅうの前に杯を置いて 1 首の時調を詠んだ。

青草の茂みの下に横たわりむなしく眠るのか
紅顔いずこに置き去り白骨のみ埋もれたのか
杯を取り勧める人とてないとはなんたる事か

封建官僚の彼が、一介の妓生の墓の前に酒をつぎ、詩を詠んだという噂はたちまちのうちに広がり、朝廷にまで聞こえた。このことで林悌は、官僚たちの非難の的となった。王命により任地に赴く途中、妓生の墓から先に訪ねるとは不遜極まる、両班たる者が妓生ごとき者の墓参りをするなどもってのほかだ、などと指弾されたあげく、彼は罷免されて国元へ帰った。

林悌は、黄真伊より 30 余年後れて生まれた両班の家門の出で、高い官位につくことはなかったが、すぐれた文学的才能と高い見識をもって多くの小説や詩を作った文

人であった。自由闊達でこせこせしない性向の彼は、封建社会の固陋な文物制度や虚礼虚飾をよしとしない意気軒昂たる快男児であった。その彼が黄真伊の墓参りをし、そこで詠んだ 1 首の時調こそ、遠い後の世までも黄真伊の真面目が伝えられたことを実証する生き生きとした資料である。

このように、40 年の生涯に数々のエピソードを残した松都の名妓黄真伊は、一生を妓生として生きたが、朝鮮中世の詩歌文学に特別な寄与をした詩人として、はたまた名筆として名を上げた才能ある女性であった。

21．韓石峯の母親

母性愛は石の上にも花を咲かせ、鉄をも溶かすという。

16 世紀の名筆<ruby>石峯韓濩<rt>ソクポンハン ホ</rt></ruby>もそのような母親の訓育を得て大成した人物であった。母親は<ruby>松都<rt>ソンド</rt></ruby>（<ruby>開城<rt>ケソン</rt></ruby>）の没落両班（貴族）の家に嫁入りし、貧しく暮らした。婚家の先祖には郡守（郡の長官）を勤めた人がおり、舅は正郎（正 5 品の官職）の地位にあったが、石峯が生まれた頃は全く落ちぶれ、それに、彼女は夫に早く先立たれて、餅を作って売らなければならないほどになった。そんななかでも、彼女はわが子に読み書きを教え、手習いに励むよう心を配った。

石峰は小さい時から字を書くことが好きだったが、紙や墨を買うお金がなかったので、晴れた日は外で地面や石橋に字を書き、雨の日は家の中で甕の表面に字を書いたりもした。そんな熱心ぶりに心を動かされた母親は、わが子を書道で世に立てようと思い立ち、生計費を切りつめて筆と墨、硯を買ってやり、習字にいっそう励むよう力づけた。

石峯の腕がかなり上がり、もはや自分の力では指導が困難になると、彼女は家財を売り払って得たお金を九つの石峯に持たせ、10 年期限で、遠方で書道の先生をしている親戚のもとへ送った。母親は餅づくりにいっそう励んだ。

石峯が 16 になった年のある日の夜更け。母親が相も変わらず餅を切っていると、戸が音もなく開いて、1 日として忘れたことのないわが子石峯が入って来た。

「お母さん」

石峯は母親の胸に抱きついた。

「あら、お前がどうして」

母親はその間ずいぶん大きくなったわが子の姿をほれぼれと眺めた。けれどもすぐに気持ちを取り直した。

「10 年の修業を約束して出かけたのに、どうしたのよ。今年はまだ 7 年目じゃないかい」

石峯はにこにこして答えた。

「先生が、もうこれくらいなら申し分ないから、早く帰ってお母さんを喜ばせるようにとおっしゃったので、まだ 3 年残っているけれど帰って来たんです」

「十分に教わって来たと言うのだね」

「はい、そうです」

「お前がそれほど上達したと言うんなら、この母さんと腕くらべをしてみようよ。いいかい。今この明かりを消して、母さんは餅を切り、お前は字を書くのよ。そのあと明かりを点けて、どちらのほうがうまくできているか、見てみようよ」

彼女は紙と筆、硯を石峯の前に置き、墨をすり終わるのを待って明かりを消した。しばらくの間、餅を切る音と筆が紙の上を滑る音が入り混じって聞こえた。

やがて明かりが点された。母親の切った餅を見ると、どれもが一様に同じ長さ、同じ厚さに揃っていた。ところが石峯の字は、暗がりの中で書いたものにしては一応整ってはいたが、一字一字の均衡がとれず、字画のどれも正確ではなかった。

「その間、お前は確かに腕が上がったようだよ。でもね、まだ本物だとは言えない。いくら暗い所で書いたにしても、字画が不揃いだったら駄目じゃない。もちろんたやすいことじゃないけれど、何度もくりかえして出来ないことなんてありゃしない。どんな勉強だって、小手先や舌の先だけでは駄目なの。身につくまでじっくりやらないと、とても成功はおぼつかないよ。男子の書道というものは決して女のお勝手仕事とは比べものにならないのよ」

母親の言葉はきびしかった。石峯は母親の訓戒をうなだれて聞き、なんとしても成功せずにはおかないと決心して、その場で母親に別れを告げた。

歳月は流れた。母親の戒めを得て目を醒ました石峯は、一心不乱に勉学して、1567年には科挙に及第し、そのしばらくあと、承文院寫字官（外交文書を整理する官吏）に任命された。

韓石峯はその後も古今の名筆、大家の筆法を深く研究してすぐれた点を摂取し、ついには独特の書風「石峯体」を確立した。

彼は篆書、隷書、楷書、草書などすべての書体をものにして小文字、大文字の別なく自由自在に腕を揮い、国内はもとより、中国をはじめ諸外国にも名筆として知られるようになった。

ソウルでは「韓石峯の書風は実に深奥で妙を極めている」という噂が広まって、高位高官の邸宅の壁には彼の書軸が掛けられるようになり、宮廷の屏風にもそれが見られた。宣祖（ソンジョ）王は、書斎に韓石峯の書軸を掛けておいて朝夕観賞し、「酔裏乾坤　筆奪調

和」の８字を書き記して、彼の才能をたたえた。

韓石峯の書風が世に広く知られるようになったのには、次のようなエピソードにも負っている。

韓石峯が使臣の一行に加わって明の首都へ行った時のこと。明の宰相が自室の大障子に黒い絹布を張り、そこに金泥の書を入れて部屋を飾ろうとし、国内の諸名筆を呼び寄せた。たまたまその日、韓石峯も宰相宅を訪れていた。

宰相は障子を部屋の中に寝かせて、ここに一筆入れてくれた者には厚くお礼をすると言った。ところが、名筆と言われる彼らのうち、誰一人として進み出る者がなかった。

障子の黒い絹布と金泥、筆を見てむらむらと興が湧いた韓石峯は、ずいと前へ進み出るや、手頃の筆を選び、金泥にどっぷりと浸けて手を挙げた。ところが誤って筆の先から金泥のしずくが飛び散り、大小の点が絹布のあちこちに付いてしまった。

人々は驚き、どうなるものかと顔を見合わせた。宰相は怒って韓石峯をなじった。ところが韓石峯は平然として、おもむろに口を開いた。

「ご心配には及びません。わたしは朝鮮の書家です、わたしがここへ文字を書き入れましょう」

こう言うと、韓石峯は筆を揮い始めた。

さらさらと動く筆先は、あたかも踊りをおどっているかのようであり、金色に光る字体は、生きて動いているかのように絢爛としていた。それに不思議なことに、書き上げられた草書の中に金泥の斑点が一つ残らず入れられてしまったのである。どうなるかと目を見張っていた人たちは嘆声を発し、宰相はたちまちのうちに相好を崩した。

こんなことがあってから韓石峯の名は、中国にまで広く知られるようになった。

当時、明の書家は、韓石峯の書は王羲之をしのぐと絶賛し、壬辰祖国戦争（1592年に始まった豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争）の折りに朝鮮に来た明の人たちも、韓石峯の書を宝のように見なし、わざわざ求めて帰ったという。

彼の書は、『石峯筆跡』『石峯書法』『石峯千字文』それに金石文などによって後世に伝えられている。

韓石峯の代表作は1601年、京畿（キョンギ）道加平（カピョン）郡守（郡の長官）を勤めた時に書いた『清妙草廬詩』序文である。草書を若干混ぜた行書体であるこの書は、彼の晩年の作で、画がいずれも同じように太く、運筆は自由奔放で各字が生きて動いているかのようである。行書は動くような文字だとして名づけられたもので、『清妙草廬詩』序文は、行書の特徴を十分に生かした書体だと言える。

実に、韓石峯が名筆の誉れを高くしたのは、己れの疲れを知らぬ努力と共に、彼をきびしく訓育した母親の功労のおかげでもある。

韓石峯の母親は無学に等しかったが、深い慈愛と強い意志をもってわが子の天性に磨きをかけ、大成へと導いたのであった。

22. 李恒福の母親崔氏

李恒福（リ ハンボク）（1556～1618）は、壬辰祖国戦争（1592年に始まった豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争）を前後した40余年間、朝廷の高官を勤め、戦中はもとより、党争で官界が乱れていたときも常に楽天的なに生き、鋭い諷刺と諧謔で人々の覚醒を促し、汚職官吏の心胆を寒からしめた有名な人物である。

彼がいかなる党派にも属さず、広い見識をもって持ち上がる諸問題を合理的にてきぱきと裁いたのは、母親崔（チェ）氏の訓育と努力に負うところが大きい。

崔氏は15世紀末の吏曹判書李思鈞（リ サ ギュン）の外孫である。外祖父と外祖母黄（ファン）氏は、利口でしっかり者の孫娘をとても可愛がった。崔氏は少女時代、母方の家によく遊びに行ったが、ここで人生の行路が決定づけられたと言える。

ある日、科挙を主管した李思鈞は、帰宅して夫人にこう言った。

「わしは、10余年にわたる試験官生活中、多くの儒生を相手にしたが、気に入るほどの才徳兼備の青年には出会わなかった。それが、今日初めてそんな儒生に会った。それにしても、わが家に年頃の娘がおらんのだから、みすみす見送るほかないとは残念なことだ」

黄氏がその名を聞くと、彼は進士（科挙の小科初試の合格者）李礼臣（リ レ シン）の子夢亮（モンリャン）だと答えただけで詳しい話はしなかった。

黄氏はくすっと笑って、膝に座らせている八つの孫娘を見やった。「お前が年頃だったら、相手を決して放さないだろうにね」

二人の交わす話を聞いていた孫娘は、その幼い胸に李夢亮の名を刻んでおいた。

歳月は流れ、崔氏も頭にかんざしを差す年頃になった。仲人が足しげく崔氏の家に

出入りしたが、そのどれもみな断られた。どうした訳か、崔氏が嫁に行こうとしないのである。両親は娘の気持ちがわからずいらいらした。そんなときに外祖父が亡くなった。崔氏は、少女時代の思い出が深い母方の家に駆けつけた。判書の家であったので、多くの官吏が弔いに来ていたが、なかに立派な供物を揃えて、弔辞を読む男が人の目を引いた。

ところでその官吏は､外祖父が10数年前にあれほどほめたたえた李夢亮であった。その名を聞いた崔氏は窓の隙間から男の様子をのぞいて見た。容姿にすぐれ、見るからに気品があった。ただ彼は一般の弔問客と違って、喪服を着用していた。もしやと思って、召し使いに彼のことを聞き出させてみたところ、李夢亮は高麗（コリョ）時代の有名な官僚文人李済賢（リジェヒョン）の外孫で、最近妻に死なれて喪中にあるが、間もなく喪が明けるということであった。

幼いころ李夢亮の名を耳にし、外祖父母が称賛してやまなかった、そんな人の嫁になれたらと、ひそかに思い続けていた彼女は矢も盾もたまらなくなり、外祖母に自分の気持ちを打ち明けた。祖母は目を丸くしながらも、なんというめぐり合わせだろうかと喜び、早速李夢亮のもとへ仲人を送った。こうして縁談は成立し、やがて二人の間には男の子、李恒福が生まれた。崔氏はわが子が幼い時から男らしく義侠心に富んでいることを発見し、それを助長しようと思った。

ある年のこと。母親はわが子に新しい服と靴を買って与えた。恒福はうれしくて、それを着て外へ遊びに出たところ、近所の遊び友達がうらやましがり、彼の服や靴にさわって見ながら、欲しくてたまらなさそうにするのである。恒福はつい心を動かされて、気前よく服と靴を脱いで与えてしまった。

夕方、見すぼらしい身なりをして帰って来た息子を見て、母親は驚き、なじるよう

に訳を聞いた。普段母親から叱られるようなことのなかった恒福は、別にこわがるふうもなく、胸を張って答えた。

「友達がぼくの新しい服を見て、あんまり欲しがるもんで、服と靴をみな脱いであげてしまったんです」

母親は驚きながらも、この思いやりの深いわが子の行為から、ほかの子たちには見られない美点を発見してとても喜び、それ以来息子の行動を注意深く観察し、将来に大きな期待をかけた。

いつのことだったか、友達と鍛冶屋の付近で遊んでいた恒福が、外に捨てられている屑鉄を拾って帰り、しばらくいじっていたが、それに飽きて庭に捨ててしまった。母親はそんなわが子に、こう言って聞かせた。

「この屑鉄はちっぽけなものだけど、こんなものも集めておいたらお国にとって大切なものになるのよ。これ一つで錐を作ることもできるし、たくさんあったら、鉄砲玉も作れるだろうから、お国のために役立つわけよ。鍛冶屋さんはなんとも思わずに捨てちゃったけど、お前までそんな真似をしては駄目よ」

母親の戒めを心にとめた恒福はその後、鍛冶屋の近くで屑鉄を熱心に拾い集めたが、3年足らずのうちに三つの甕が一杯になるほどになった。

そんなある日、恒福は母親に向かって、鍛冶屋さんが酒と賭博に溺れ、仕事の元手をすっかりなくして困っている、可哀相だから蓄えておいた屑鉄を返してあげたらどうだろうかと言った。わが子がいまに屑鉄をどう始末するだろうかと注目していた母親はたいそう喜び、早速鍛冶屋を呼んで甕の屑鉄をそっくり与えた。鍛冶屋は深く反省し、それ以後は酒をやめ、仕事に熱中したという。後日、李恒福が60を越す身で咸鏡(ハムギョン)道北青(プクチョン)に流されることになった時、鍛冶屋の息子は配所まで彼に付き添って行き、そ

の家の側に住んで終生面倒を見たという。

　崔氏はわが子の勉学に大きな関心を傾けた。恒福は幼い頃から文才に恵まれ、人々の称賛の的となった。母親は日に日に伸びていくわが子の才能に感嘆し、事物の道理をわかりやすく説明してあげるのを常とした。恒福は母親の説明をたやすく理解し、文章に上手に表現しもして人々を驚かせた。

　彼が八つの年の時。崔氏は夫と相談してわが子の詩才を試すことにし、琴と剣を見せて詩を詠んで見るようにと言った。

　恒福はその場で次のような詩を作って、両親を驚かせた。

剣には偉丈夫の気迫がこもり
琴には永劫不滅の真理が宿る

　母親は鋭い観察力と生き生きとした表現をもって立派な詩を作ったわが子をたたえ、その後、朝鮮史の勉強にとどまらず中国史にも通じることだとして、中国の史書を求めて与え、学業にいっそう努め、詩作にも精を出すよう励ました。

　ところが、恒福の家庭に不幸が訪れた。家主の李夢亮が急逝したのである。崔氏は家庭の暮らしを立てながら、幼い息子を育てなければならなかった。

　厳父の死後、恒福は野放図になった。勇み肌で腕っぷしが強い彼は、町の不良少年たちを引き連れ、相撲や蹴鞠(けまり)などに興じて日を送った。崔氏はたまりかねてわが子を前に座らせ、きびしく戒めた。

「母さんはお父さんを亡くして、今はお前一人を頼りにして生きているのよ。それなのに、お前は勉強はそっちのけにして、町のよくない少年たちと一緒になっていた

ずらばかりしているんだから、母さんは一体誰を頼りにすればいいのよ。男子が男としての意気地があり、義理を重んじるのは決して悪いことではないけど、そんな男らしさが高い教養と実力に裏打ちされていないと、一時は友達からちやほやされようが、そんなものは大きくなったら何の役にも立たないのよ。お前がいつまでもふしだらに生きるのなら、母さんは死んでも死にきれない。それに、あの世にいるお父さんにはなんと言ってお詫びしたらいいかわかんないよ」

母親のきびしい指摘に一言もなくうなだれていた恒福は、深く感ずるところがあって、その後一切遊びを止めて勉学に励んだ。

恒福が大きくなって、ある若い妓生（キセン）に夢中になったことがあった。そのことを知った母親は、大志を抱く人間がまだ若いうちから女にうつつを抜かすとは何事です、と叱責して、恒福をある寺に入れて勉学に専念するようはかった。恒福は深く自省して妓生を遠ざけ、二度と会おうとしなかった。

このように李恒福は母親の訓戒を得て己れの意志を固め、判断力を養い、一度正しいと思ったことは、なんとしても貫き通さずには止まない精神力を身につけた。このことは後日、国の大事を担当処理するうえに大きく役立った。

息子が学問に力を入れ、剛直な精神と大きな度量を養うよう訓育した崔氏は、恒福が 16 の年の 1571 年に世を去った。恒福は慈しみ深い母親の死に悲嘆し、3 年の喪に服した後、その意志に沿って成均館に入り、ひたすら学業に精励した。その後都元帥権慄（クォンリュル）の女婿に迎えられ、25 歳で科挙に及第し官途についた。壬辰祖国戦争では、兵曹判書（国防長官）の地位について国難に対処する一方、明との関係を抜かりなく処理して戦況を有利に逆転させるなど、重要な役割を果たした。また戦後は、最高官職領議政（宰相）の任に就いて政治を采配し、その名を内外に広く知られた。

李恒福が 40 余年間の官吏生活で一貫して不偏不党の立場を貫き、歴史に名をとどめえたのは、慈母崔氏のきびしい訓育があったからである。

23. 詩人蓬原府夫人鄭氏

16 世紀は、家庭的にも社会的にも差別と束縛に苦しんできた各階層の女性が詩壇に登場し、自分たちの生活感情を反映した特色ある作品を発表することで、中世詩歌文学を豊かに飾った時代であった。

当代の女流詩人のなかには許蘭雪軒（ホ ランソルホン）のような両班（貴族）良家の女性もいれば、黄真伊（ファン ジン イ）、李梅窓（リ メ チャン）のような妓生（キ セン）、両班のそばめなどもいた。蓬原府夫人（ポンウォンブ）鄭（チョン）氏は王の義母で、幾編もの詩を詠んだ閨秀詩人である。

鄭氏の家門には宮廷の権勢家もいれば、名だたる文人もいた。父親鄭惟吉（チョン ユ ギル）は東莱（トン レ）の人で三政丞の領義政（宰相）に次ぐ左議政を勤めた官僚でもあり、美麗な筆致で数多くの詩を詠んで名を馳せた文人でもあった。

鄭惟吉の次女蓬原府夫人は、すぐれた家庭的環境の中で小さいときから多くのことを見聞し、詩作などにも励むことができた。

だが、彼女の一生は必ずしも平坦ではなかった。いかに名門の家庭ではあっても、生活には涙があり、悲しみもあるものである。彼女のある詩の中に「一夜のうちにも世の風波にもまれ、涙ながらに荒野をさまよい歩いた」という句が見られたことからしても、彼女の人生に紆余曲折があったであろうと推察できるのである。

鄭氏の詩作品は少なくなかったようだが、今日に残るものは『西氷庫（ソ ビン ゴ）の川辺のわが

家に向かって』『夢の中で』など数首に過ぎない。

『西氷庫の川辺のわが家に向かって』は、川辺の豊穣な秋の風景をうたったものである。

カモメを追って川辺に行けば
川岸の樹々は落ち葉を散らす
丘にはクリナツメが実を結び
水際に遊ぶ葦原蟹は身がつく
チマの裾たくしあげ青山望み
酒瓶前にして月見を楽しむも
夜の気寒々として寝つかれず
松葉に結びし露に衣を濡らす

裏山にクリやナツメの実がなり、水際の身のついたアシハラガニが捕れる季節に、川辺の丘の上のわが家で月見をする主人公の情緒的な形象には、生活への深い愛着と美しい自然、豊穣な秋に対する大きな誇りがよくにじみでている。

特に、秋の風景を十分に見せるさまざまな素材に焦点を当て生き生きと描写した「クリナツメ」「葦原蟹は身がつく」などという表現は、鄭氏の女性らしい観察の細やかさと高い詩的技巧をよく見せている。この詩は、秋の風景を寒々と描くことに重点が置かれているという感は否めないが、女の身辺の雑事や不幸な境遇、憂鬱な感情のみをうたっていた当代の一部閨秀詩人の詩作品とは異なり、進歩的な面があったと言える。

後日、鄭氏の娘柳(リュ)氏が李朝第 15 代王光海(クァンヘ)君（在位 1609～1623）の妃になったことから、鄭氏は蓬原府夫人の称号を得た。

24. 洪瑞鳳の母親柳氏

朝鮮のことわざに「可愛い子は鞭で育てよ」というものがある。

洪瑞鳳(ホンソボン)（1572～1645）の母親柳(リュ)氏は、わが子を独特な仕方で厳格に育て、世に出した女性の一人である。

彼女は柳鎧(リュダン)の娘であり、『於于野談』の著者柳夢寅(リュモンイン)の姉で、世事に明るく学識に富んでいた。

生来物覚えがよく、弟の夢寅が読み書きを習っているとき、側に座って聞いているだけで、その内容をそらんずるほどだったので、感嘆した父親は娘の才能を惜しんで、歴史や詩文の勉強をさせた。彼女は父親から教わって古今の歴史に通暁し、やがては詩を詠み、書道でも才能を示した。

彼女は洪天民(ホンチョンミン)との結婚後詩作を断念した。それで、彼女が残した詩は散逸し、子孫の一人が偶然発見した風景詩の断片だけが今日に伝えられることになった。

谷に入れば春の色うがつよう
橋を渡ればせせらぎ踏むよう

この断片的な詩句からも柳氏のすぐれた詩才をうかがい知ることができる。

柳氏は抜きんでた文筆家でもあった。不幸にも夫に早く先立たれた彼女は、悲しみに暮れ、3 年の喪中自作の弔辞を唱えて亡夫の冥福を祈ったが、内容はそのつど違っていたという。

柳氏がいかに内外の歴史に通暁していたかを語るエピソードがある。

彼女が還暦を間近にしたある年、国王光海(クァンヘ)君が即位後初めて科挙令を布いたところ、全国から受験生が試験場の春塘台(チュンダンデ)にぞくぞくと詰め掛けた。試験の題名は「鄭衆に司馬試を仰せつける」というものだった。受験生たちは一斉に、鄭衆の人柄をはじめ彼が司馬試（科挙の一つで進士、生員の選抜試験）の試験官に任ぜられたいきさつなどを論じて、合格疑いなしと自負した。ところが結果はほとんどの者が落第であった。

柳氏の甥柳世(リュセ)はそのことが腑に落ちず、叔母を訪ねて訳を聞いてみた。柳氏は「昔、中国には鄭衆という名の人が二人いたのよ。一人は後漢の儒者鄭衆で、いま一人は宦官の鄭衆なの。今度の科挙の題名は儒者鄭衆を指したものなのに、受験生たちは宦官の鄭衆と人違いしたんじゃないかしら」と言うのである。

彼が試験官に会ってただしてみたところ、はたして鄭衆なる人物は二人いたのである。甥は叔母の博識にただ驚くばかりであった。この話は巷間に広まり、柳氏の博識を語るエピソードとして後世に伝えられた。このように柳氏は、少女時代から晩年まで豊かな才能と広い見識で常に一家親戚の者を感嘆させたものである。

柳氏にとって夫の遺児瑞鳳は、掛け替えのないいとしい一人息子であった。けれども、わが子を決して甘やかすことがなかった。歴史に明るく文筆の心得もある彼女は、じかにわが子の教育に当たり、厳格にしつけた。毎朝、前日のおさらいをするときは、二人の間にとばりを下ろしてわが子を試問した。ある人がその訳を尋ねると、息子が前日学んだ内容を十分に把握していて質問に正確に答えた時、自分の顔がほころびる

のを見たら、漫心して勉強に身を入れなくなる恐れがあるからだと答えた。

瑞鳳はいつも母親を喜ばせたわけではなかった。いたずらざかりの年であってみれば、勉強を怠ることもままあったのである。そんな時、母親は、わが子のふくらはぎを鞭打った。皮膚にみみずばれができ、血が流れ落ちるようなことがあっても、彼女は顔色一つ変えなかった。だがそんな日は人知れず涙をこぼし、水の一滴すら口にせず、わが子の過ちを自らの過ちとして胸を痛めた。彼女はこのようにわが子を鞭打ちながらも、われとわが身をそれ以上に鞭打ったのである。

柳氏は一度使った鞭は絹布に包んでしまっておき、次にまた折檻する時は別の鞭を使い、それも前のものと一緒にしてしまったものである。ある日、親戚の一人がその事を知って、訳を尋ねた。それに柳氏はこう答えた。

「あの子は、将来洪氏の家門を輝かせ、ひいてはお国の礎石として働く大事な子です。そんな大事な子を折檻するのは決して憎いからではなく、立派な人間に育つうえでわずかな疵を残してもいけないからです、ですから、その子をしつける鞭をどうしておろそかに扱えましょうか。それはただの木の枝ではありましょうが、わが家にとっては金銀よりも大切なものです」

その親戚は夫人の深い志にいたく感動した。その後も柳氏はたびたびわが子を鞭打ったが、息子の成人後使った鞭を数えてみると、3、4 箱にもなっていたという。母親の慈愛こもる鞭に打たれながら、洪瑞鳳は大成した。

彼は母親に似て、極めて聡明であった。幼い頃、友達と一緒に領議政（宰相）洪暹（ホンソム）の邸の蓮池で遊んだことがあった。7 月半ばのことで、池には赤や白の蓮の花が咲き乱れていた。瑞鳳は、友達ともども大きな蓮の花を折って出て来るところを、家の主に見つかってしまった。洪暹が大声を張り上げ、こっぴどい目にあわせてやる、と近づ

いて来ると、子供たちは恐れをなし、花を捨てて逃げて行った。ところがひとり洪瑞鳳だけは、花を手にして恐れるふうもなく洪暹に丁寧にお辞儀をした。洪暹は感心して、その胆を試してみようと、わざと目を怒らせ、「お前はなんで人の家の蓮の花をこんなにもたくさん折ったのじゃ」と怒鳴りつけた。

「あんまりきれいなので、ついお断りもせず折ってしまいました。どうかお許しください」

瑞鳳は、悪びれすることなく答えた。

「よし。じゃ、わしが脚韻を出すから、お前はそれを踏んで、蓮の花を折った訳を詩にしてみろ。そうしたら許してやるが、できなかったら痛い目に合うと思え」と、洪暹はおどした。

「どうぞ出題して下さい」

瑞鳳が顔を上げて答えると、洪暹は秋、遊、牛の 3 字を出題した。

瑞鳳はちょっと目をぱちぱちさせてから、1 首の詩を詠んだ。

相公の蓮池の冷たさは秋のそれ
子供たちはともども月下に遊ぶ
太平の世の大業何にて応えんか
ただ蓮の花に聞き牛には聞かぬ

丞相は少年が一気に詠んだ絶句に感嘆し、「この子は将来、わしと同じ地位を占めるだろう」と独りうなずいて、瑞鳳を許した。

このエピソードは、洪瑞鳳がいかに聡明であったかを語るものではあったが、同時

に母親の厳格な教育のもとで彼が熱心に学び、努力を重ねた結果達成した才能の一端を示すものとして、後世に伝えられたと言えよう。

1598 年、洪瑞鳳はついに科挙に及第し、官途に就いた。

柳氏は息子が家庭をなし、仕官してからはもっぱら敬語を使い、官名で呼称した。もはや一家庭の子ではなく国に仕える官僚の責務の重さを常に自覚させ、家庭にくつろぐ時もそのことを忘れないようにするためであった。けれども、洪瑞鳳は帰宅すれば、それまでどおりその日の出来事を細大漏らさず報告し、母親の意見を聞いて問題の処理に当たったので、人々は彼の公明正大でてきぱきした仕事ぶりに感嘆し、年長の高官たちも彼に一目置いたものである。

一度は、官吏たちが集まり、経書のある内容を論議したことがあったが、若年の洪瑞鳳の解釈が主観を排した最も妥当なものであるとして、誰もが敬意を表した。ところで、他人の知らぬ細かい点まで知り尽くし、出処まで明らかにする識見に舌を巻く人たちに向かって彼は、それらは少年時代に母親から教わったもので、ある箇所は母親の鞭に打たれてようやく覚えた、と謙虚に語った。一同は、瑞鳳の母親の深くも広い知識と、真摯なわが子訓育の態度に感嘆し、普段から瑞鳳が「わたしがこの仕事をやれるのは母の力によるものだし、わたしが栄達したのはわたしの力量によるものでなく、母のおかげによるものだ」と言っていたことがいわれのないことではないと知った。

洪瑞鳳の栄進は続き、ついに最高の官職領議政を務めるまでになった。昔日の領議政洪暹の予言は適中したのである。

洪瑞鳳は高官になってからも、母親と一緒に暮らしたなつかしい家を捨てることなく、粗衣粗食に甘んじ、また無意識のうちに傲慢になることを恐れて、少年時代にふ

くらはぎを打たれた鞭を取り出しては、亡き母親をしのんだという。

25．詩聖許蘭雪軒

16 世紀以降、朝鮮の詩文壇には多くの閨秀詩人が登場して異彩を放ったが、その代表格が許蘭雪軒（ホランソルホン）である。

彼女は、1563 年、江原道（カンウォンド）江陵（カンルン）の両班（貴族）の家に生まれた。本名は楚姫（チョヒ）、字は景璠（キョンボン）、蘭雪軒は号である。

彼女は文人の家庭で育った。30 余年間、文官の要識を占めた父親許曄（ホヨプ）は哲学者徐敬徳（ソギョンドク）の教えを受け、二人の兄許筬（ホソン）、許篈（ホボン）と弟許筠（ホギュン）も当代に名を馳せた文人であった。

彼女は、兄と弟が勉強している背中の後ろからのぞきこんで読み書きを覚えたが、七つの年で早くも詩を詠んで彼らと競い、絵も上手で人々を驚かせた。

彼女は弟の許筠と一緒に当時の有名な詩人李達（リダル）に師事した。李達は崔慶昌（チェギョンチャン）、白光勲（ペクグァンフン）らと共に「三唐詩人」と称されたほどの人物である。彼は両班の子でありながらも、庶子であるがために、才能はあったが仕官できず、封建社会の仕組みに不満を抱いていた。

許筠は師の不遇な身の上に同情を寄せ、身分による人間の差別をこととする封建社会のからくりに目を向けて、ついには封建的支配を憎悪し、庶子差別の撤廃を求める人民の反抗精神を描いた小説『洪吉童伝（ホンギルトン）』を著した。

両班の家に生まれ育った蘭雪軒が女の身で社会的問題に関心を向け、下層民の境遇に深い同情を寄せた作品を少なからず作ったのは、師李達の影響によるものである。

彼女は師の薫陶と影響、父親と兄弟の関心のもとに女性らしい繊細な感情を培い、息苦しい封建社会の桎梏のなかでも、ひたすら心の安静を求めて読書と詩作に励み、その体験のすべてを詩に表現したのであるが、すぐれた才能と理想に支えられて詩作の境地がいよいよ絶頂に達した頃の 1589 年春、27 歳の若さで一生を終えた。

その生涯は長くなかったが、遺稿は書斉を埋めるほどであったという。ところが、彼女は臨終を前にして、それらを全部焼き払ってしまった。それほど心血を注いだ作品を自らの手で焼いたこの悲劇的な行為は、当時の社会が女性に強いた封建的桎梏への怨念と抵抗の現われであった。許蘭雪軒はそのようにして息を引きとったが、彼女の詩は人々の大きな感興をもよおし、今日までかなり多く伝えられている。

弟の許筠は 37 の年に、中国の使臣朱之蕃の接待役を仰せつかり、ソウルのはずれにある碧蹄(ピョクチェ)館で使臣としばしば会って談話を交わし、共に詩作を楽しんだ。朱之蕃は許筠の詩才にひどく感嘆した。

帰国数日前のある日、許筠と肩を並べて池のほとりを黙々と散策していた朱之蕃は、一つ頼みがあるとして、口を開いた。

「この度許先生と近づきになれ、先生の詩を満喫する幸運に恵まれました。ついては、先生にお会いした記念に、詩を数首頂けないものでしょうか」

許筠は当惑し、丁重に断ったが、執拗な要請に負けて、姉の遺稿を提供することにした。幸いにも実家に残っていた蘭雪軒の数編の詩稿を所蔵していたのである。

その詩に目を通した朱之蕃は、いずれ劣らず珠玉のような詩だと嘆じた。彼はそれらの詩が夭逝した不遇な一女性の作品であることを知ってひどく残念がり、帰国後の 1606 年、彼女の詩をまとめて『蘭雪軒集』を上梓した。

この詩集には、五言及び七言絶句、律詩、古詩など 200 余首が納められている。『蘭

雪軒集』は以上のようないきさつで世に生まれ、明で大きな波紋を起こした。その後の 1692 年、東莱（トンレ）で再版され、それが日本に渡って版を重ねた。

女流詩人許蘭雪軒が文学史に残した業績は、一家庭の枠を越え、虐げられた貧しい人々、とりわけ女性の不幸な境遇に目を向け、不合理な封建社会を批判したことにある。両班の娘ではあったが、早くから師や兄弟の影響を受けた蘭雪軒は、矛盾に満ちた当代社会に注目し、貧しい人々の苦しみに深い同情を寄せたのであった。『蘭雪軒集』は、彼女のこうした進歩的な志向をよく見せている。

やむことを知らぬ両班階層の収奪による人民の苦痛は、蘭雪軒の胸に強烈な詩的衝動を呼び起こした。特に、貧家の娘たちの哀れな境遇は、彼女に女性として、また詩人としての憤懣やるかたない感情を吐露させた。その代表的な詩が『貧家の娘』（4 首）である。

第 1 首では顔かたちが整い、針仕事や機織りも上手な娘が、ただ貧しい家の生まれというだけの理由で、仲人に立つ人のいない封建社会の不合理性を非難し、第 2 首では、毎日夜遅くまで苦労して織った布が、その一切れも自分の物にはならず、遊んで暮らす両班長者の手に渡るほかない貧家の娘の境遇をうたい、第 3 首では、冬の夜独り座って他人の嫁入り衣装を縫っている娘のわびしい身の上を描き、最後の第 4 首では、寒さも飢えも黙々と忍び、ひねもす機を織っている娘の身の上を嘆く両親の苦しい気持ちを通して、社会の不条理を暴露している。

権勢ある富裕な両班長者と、衣食に事欠く貧困層の相異なる二つの側面を対照させ、社会的矛盾に焦点を当てた蘭雪軒の批判精神は、『思うところがあって』（3 首）にいっそう強く現われている。

東側の家は権勢天を衝いて

高楼にて歌い踊る宴張るも

北側の隣家は貧しさに震え

莚戸（むしろど）のなかで飢えに苦しむ

彼女にはこの他にも、夫役に狩り出された人民の苦痛を描いた『築城の苦しみ』のような詩もある。

このように許蘭雪軒には、他の閨秀詩人とは異なり、社会問題に関心を向けて少なからぬ詩を詠んでいるが、ほかに女の孤独な閨房生活を嘆じたものもある。

詩歌集『古今歌曲』には、蘭雪軒の歌詞『閨怨歌』が収録されている。ここには、50 行の詩に、封建社会におけるさまざまな社会的不平等に制約されて、わびしく空閨で時間を過ごす女のつらい生活が描かれている。

窓外の梅の花咲いては散り

冬の夜は寒々と雪舞い上げ

夏の日長雨はじめじめとし

花柳揺らぐ麗らかな春の日

景色はよくとも晴れない心

秋は空閨でコオロギを聞く

長い嘆息と涙やるせぬ思い

惨めな命死ぬこともならぬ

思うにこの定め如何にせん

手すりにもたれ背の君偲び

草に露結び夕雲の流れる時

竹林にさえずる鳥の声悲し

世に悲しみなき人なかれど

私のような人どこにいよう

思い余って焦がれ死ぬやも

蘭雪軒の『閨怨歌』は封建社会における男尊女卑の悪弊を批判し、女の寂しくも悲しい閨房生活の模様をリアルに描いたことで、18 世紀以降盛行した婦女詩歌の創作に少なからぬ影響を及ぼし、女性の間で広く愛誦された。

許蘭雪軒の詩には、働く女性の不幸な境遇に同情し、社会の不合理性を批判しているものが多いが、そこには詩人自身の不遇な人生行路が反映されて、哀調を帯びている。彼女の詩は、当代女流詩歌文学の中で最高の座を占めていた。

17 世紀の作家金万重（キムマンジュン）は、栗谷李珥（リュルコクリイ）の母親申師任堂（シンサイムダン）を当代書画の第一人者であるとする一方、「閨秀詩人としては許蘭雪軒が第 1」だと惜しみなく評価しており、中国の作家曹聞基は、蘭雪軒が七つの年で詠んだ『広寒殿白玉楼の上樑門（クァンハンペクオクサンリャン）』について、「この詩を詠むと実際に神仙となって白玉楼に遊んでいるような思いになる」と賛嘆した。

このように許蘭雪軒は順調でない短い生涯を生きたが、少なからぬ名詩を生むことで、16 世紀朝鮮漢詩文学の発展に寄与したすぐれた女流詩人であった。

26. 紅衣将軍夫人李氏

豊臣秀吉の朝鮮（チョソン）侵略に抗する壬辰祖国戦争に際し、慶尚（キョンサン）道一帯で義兵（民兵）を立ち上げ勇名を馳せた紅衣将軍こと郭再佑（クァクチェウ）（1552～1617）の大功の陰には、夫人李氏の内助がある。李氏の内助の功については、その後広く語り伝えられている。

李氏は、郭再佑の先妻曹（チョ）氏の病死後、若い年で後添いとして嫁いだ。彼女は品端正で、若いながらも世事にいろいろと通じていた。豊かな学識で世に知られた曹植（チョシク）の外孫で、一時、黄海（ファンヘ）道観察使（道の長官）を勤めた郭越（クァクウォル）の子郭再佑に嫁いだ夫人は、夫への期待が大きかった。夫は了見の狭い凡庸な書生ではなく、豪傑肌で俠気に富んだ気質の男子であると見込んでの嫁入りだったのである。ところが一緒になってみると、夫のすることは仲間と連れ立って風流韻事だの酒だのと、無為に日を送ることだけだった。

夫人は深い思いにとらわれた。

当時、国情は騒然としていた。北方では夷賊がひんぴんと豆満（トゥマン）江を渡って攻め込み、近頃は南方で日本人が騒ぎを起こしていた。こんな非常時に遊びにのみふける夫の覚醒を促し、有事に備えて武芸に励むよう改心させるにはどうすべきか。あれこれと考えた彼女は、一計を案じた。

それ以来、夫人は毎日のように多くの時間を昼寝で過ごした。嫁入りして来たばかりの新妻が家事をおろそかにして、午睡ばかりしているのだから、何かと陰口を叩かれ、それが夫の耳にも入るようになった。

郭再祐はたまりかねて、昼寝している妻を起こして責めた。

「若い女が昼寝ばかりしていてどうしようというんだ。家を目茶苦茶にするつもり

か」

　妻は平気な顔をして反駁した。

「こんな乱れた世の中で、わが家だけが穏やかでいられるとお思いでしょうか。敵軍に攻め込まれたら、机や酒膳で防げるとでもおっしゃるのですか」

　郭再祐はけげんそうに妻の顔に見入った。彼とても国難を憂えていないわけではなかったが、国防は朝廷などで対処すべき問題で、自分のようなものが心配しても始まらないと決め込み、うつうつとした気持ちを酒や風月にまぎらわせていたのである。夫の心情をおしはかった夫人は、切々と訴えた。

「今のように不安な国情では、あなたも馬術に励み、弓矢にも長けるべきです。あなただけでなく、近郷の若い人たちにも呼びかけることです。でも、若い人たちを集めてあからさまに武芸を仕込むようなことをしたら、何か謀反を企んでいるという疑いをかけられないとも限りません。ですから、結いを組んで農事を助け合ったり、相撲や毬打(まりう)ち、鷹狩りなどをして心身を鍛え、武芸にも励むとよくはありませんでしょうかしら」

　妻の話を聞いて、郭再祐は思わずわが膝を打った。彼女は並々ならぬ見識の持ち主だ、ただの女ではない、と思ったのである。

　郭再祐は妻に勧められた通り、近郷の若者たちを語らって、農作業を助け合い、馬にまたがって猟もすれば、勇気や知力を養ういろいろな競技にも打ち込んだ。厳格な規律をもって訓練に励み、賞罰も公平を旨としていたことから、噂が噂を生んで、近隣の若者はわれもわれもと彼のまわりに集まった。

　夫人も午睡などは一切止め、早朝から夜遅くまで家事や野良仕事に精を出すかたわら、夫の戦いの準備を積極的に助けた。彼女は多くのひさごを栽培し、そのうち水瓶

ほどの大きさのひさごの内部をえぐって、そこにミツバチやヘビを入れて「化け物壺」を作り上げた。ひさごの表皮にはうるしを掛けて保存がよく利くようにした。

彼女はある日、赤色に染め上げた手縫いの軍服を夫の前へ差し出した。

「昔の兵法には、戦場で敵兵を欺くことははばかるべきでないとされています。この軍服は滑稽に見えるかも知れませんが、味方の団結心を高める一方、敵兵を混乱させるうえで大いに役立つことでしょう」

郭再祐は妻の知略にまたまた感嘆した。

その数年後、日本軍の不意の侵略が開始された。こうして全国各地に義兵闘争が澎湃として繰り広げられた。郭再祐は慶尚道宜寧（イリョン）郡で仲間たちと一緒に真っ先に義兵を立ち上げ、夫人も前もって準備しておいた「化け物壺」を戦場に持ち出し、夫を助けて敵兵を混乱させることに一役買った。郭再祐は戦場に臨む際はいつも、赤い軍服を着用して敵軍に痛打を加え、紅衣将軍とうたわれるほどの名声を博した。

強い愛国心と抜きんでた知力を備えた李氏の内助に支えられて、一小村に埋もれていた郭再祐は、武者としての能力と資質を存分に発揮し、敵兵の心胆を寒からしめた紅衣将軍、愛国的義兵長として、後世にその名をいつまでも留めることができたのである。

27. 奴婢から身を起こした武官劉克良と玉壺

凶悪な豊臣秀吉の日本侵略軍を撃破し、祖国を死守したあの苦難に満ちた壬辰祖国戦争史には、奴婢の子から武官に昇進し、勇敢に戦った劉克良（リュククリャン）の名も記録されている。

封建社会の最下層身分である奴婢の子として出生した劉克良がすぐれた武官に成長しえたのは、母親玉壺（オクホ）の涙ぐましい努力と正しい教育に負うところが大きかった。

玉壺はもと、領議政（宰相）洪暹（ホンソム）（1504～1585）家の下婢であった。

朝鮮（チョソン）の封建社会には官庁に属する公奴婢と個人に仕える私奴婢がいたが、玉壺のような私奴婢の境遇は悲惨そのものであった。彼らは品物のように売買されもすれば、土地や家屋と共に相続されることで、遺産のリストに登記されもした。そればかりか、理由もなく主人に殺されても訴えどころがないという、飼い犬にも劣る人間ならぬ人間であった。奴婢の子は片親だけが奴婢であっても、その運命を免れることができなかった。

顕職の宰相邸でこき使われていた玉壺は、ある日、ちょっとした不注意から、その家の貴重な玉杯を床に落として割ってしまった。目がくらくらし、気が遠くなりそうだった。主人からめった打ちにされ、死なないまでも手足の１本はへし折られ、不具の身になりかねなかった。……

彼女は、ぞおっとなって屋敷を飛び出し、走りに走った。ようやく猛獣が徘徊し、山賊が出没するという鳥（チョ）嶺の峠にたどりついて一安心したのも束の間で、不意に牛のような虎が目の前に現われた。彼女は動転し、へなへなとくず折れて気を失ってしまった。玉壺が正気に返ったのはその数日後だった。

その頃、黄海（ファンヘ）道白川（ペチョン）の人劉（リュ）進士（科挙の小科初試の合格者）が忠清（チュンチョン）道に引っ越し

て暮らしていたが、思いがけない出来事から妻と死別した。葬儀を済ませて、深夜我が家に帰ると、門前に衣服がずたずたに裂けた若い女が正体なく倒れていた。目を凝らしてみると、破れた衣服は獣の牙にかかったもののようだったが、身体に大きな異常は認められなかった。衣服が見る影もなくぼろぼろになっているので、身分のほどは定かでない。

人のよい劉進士は、何よりも彼女の生命を救わなければと、家の者たちに命じて瀕死の女を部屋に運び入れた。直ちに医者を招き、数日手当てをした甲斐があって、玉壷はようやく蘇生した。彼女は命の恩人になんと礼を言ってよいかわからなかった。劉進士は、全快するまでここで治療を続けるよう勧め、行くあてのない玉壷は、勧められるままに彼の世話になることにした。

その後、劉進士は、気だてがやさしいうえ、家事に陰日向なく精を出すしっかりものの玉壷にひかれて、後添いに迎えた。このようにして、両人は男の子を設けたが、その子がほかならぬ劉克良だった。克良は丈夫な母親に似てか、生まれ落ちてから、もう骨組みががっしりしていた。

ところが、父親の劉進士は、克良の生後いくばくもなく急死した。玉壷は、葬儀を済ませると、わが子を連れて松都（開城）に引っ越した。

彼女は息子に自分の素性を明かさなかった。そんなことをしてわが子をおぞましい奴婢の運命に突き落としたくなかったし、自分自身も元の主人に捕らわれてむごい目にあうと恐れたからであった。彼女は、克良が成長して立派な人間になり、国のため大きな功労を積めば、奴婢の境遇を免れるだろうからと、それまでは一切口外すまいと心に決めた。

玉壷は、わが子の教育に全てを捧げた。以前洪宰相家に仕えていたとき、両班（貴

族）の子弟教育のあり方を毎日のように見ていたので、その通りに礼儀作法を教え、少し大きくなってからは、読み書きを教えることにした。無学文盲の彼女は、松都市内のある長者の召し使いとして働き、その代償に克良を主家の子たちと一緒に勉強させるようにした。克良は母親の期待を裏切ることなく勉学に励んだ。彼は日中は山で柴を刈り、市場で売った。夜、勉強を終えて帰るときは、柴を売ったお金で母親の好物を買って来たりもした。

ある日、柴を刈って帰る途中、死人の出た家の前を通りかかったことがあった。当家で弔いの費用がなくて途方に暮れていることを知った彼は、柴といくばくかの持ち金を与え、名も告げずにその家を辞した。

後日、克良の友達からそのことを聞いた母親はたいそう喜び、「お前を生んでこのかた、きょうのようにうれしい日はなかったよ」と言って、わが子をたたえた。彼女はこのように、息子の美点を極力助長するよう心がけた。

克良は普通一般の子に比べて力がずば抜けて強く、義侠心に富んでいた。喧嘩をすることもあったが、大抵は弱きを助け強きをくじくというたぐいのものだった。母親は、弱いものの味方になってあげるのはよいことだが、喧嘩が過ぎると癖になって気性が荒れ、修養の妨げになる、自制心の強い人こそ本当に勇気のある人間だ、と戒めた。母親の根気強い努力と正しいしつけは、克良がすぐれた武官に成長するうえで大きな助けとなった。

玉壺は善良で気立てのやさしい女性だった。

松都に「悪霊の憑いた家」と噂される家があった。この家では毎年死人を出し、暮らしも不如意になっていた。家の主は、敷地に祟りがかかっているに違いないと判断して転居した。玉壺親子はただ同然の値を払って、その家を買った。他人に危害を加

えず正直に、そしてつましく暮らせば幽鬼も手出しできない、ということわざが当たったのか、玉壺親子が住みついてからは、なんらの変事も起こらず、不吉な噂も立たなくなった。

善良な玉壺親子がこの家に引っ越してから、こんな出来事があった。

近所には泉がなく、人々が水を汲んで来るには遠くまで出かけなければならなかった。そこで克良は、独力で井戸を掘ろうと決心し、中庭で井戸を掘り始めた。しばらく掘っていると、シャベルが何か固いものにぶつかり金属音を出した。なんだろうかとのぞきこんだ克良は、おやっと思った。それは銀白色の塊だった。わが目を疑い、目を何度もこすって見たが、正真正銘の銀塊だった。彼は茫然とした。

隣人たちは、銀塊が主人を見出せないことを恨んで邪気を放ち、それが元で住人の怪死が続いたに違いない、だが、もう立派な持ち主に出会ったのだから、厄は払われた、と口々に言って喜んだ。けれども正直者の母親は、銀塊は他人のものだから元の持ち主に返すべきだとして、役所へ届け出た。役所では、彼女の奇特な行いをたたえて銀塊を送り返した。玉壺は銀塊をお金に換えることなく、いつかきっと何かの役に立つだろうと考えて、大事にしまっておいた。

このような母親の手に育てられた克良は、立派な成長を遂げ、科挙の武科に及第した。喜び勇んで帰り、母親にそのことを告げたところ、以外にも、彼女ははらはらと涙を流し、悲しみ嘆くのであった。立派に成長した、知勇にすぐれた頼もしいわが子の姿に見入っていると、卑しい身分のせいで、人知れず心を痛めてきたことがいまさらのように思い返されて、彼女は、大きな喜びに胸を熱くしながらも、同時にやるせない悲しみがこみあげ、どうにもこらえることができなかったのである。やがて冷静を取り戻した玉壺は克良に、自分は卑しい生まれの女で、洪宰相の屋敷から逃げ出し

たと、その一部始終を話した。

母親の身の上話を黙って聞き終えた克良はいささかの動揺も見せず、彼女を慰めたあと、直ちに洪宰相を訪ねて、奴婢の卑しい身で科挙に応募し、合格したことを深く詫びた。宰相は、克良の武人らしい気質と誠実な人柄にいたく感動し、さらには彼のすぐれた知勇を惜しんで、過ぎ去ったことには一切こだわらず、大切な客として応対した。

慎み深く誠実な劉克良は次第に昇進し、1592年の壬辰祖国戦争当時には助防将（守備軍の長）として、慶尚（キョンサン）道竹（チュク）嶺の防備を指揮した。

彼は指揮官でありながらも、決して高ぶった態度を見せず、部下たちと苦労を共にした。要塞づくりでは壁石を背負って運び、軍糧が逼迫した時は、部下がみな食事を済ませるのを見届けたうえで箸を取った。

彼は、以前井戸を掘ったとき手に入れた銀塊をここで有益に使った。出陣に当たって母親が、戦場ではきっと役に立つだろうからと言って、克良に持たせたものだった。やむなく持参したものの、重くて持ち歩きが面倒なうえ、そんなものがあれば物欲のとりこにならないとも限らないと苦慮し、井戸の中へ捨てようかと考えたこともあった。しかし母親の言葉を無視するわけにいかず、そのまましまっておいたのだったが、竹嶺の防備上不可欠の軍糧を補充する上に役立てることができたとして、たいそう喜んだ。それだけに母親がとても恋しかった。

当年5月、日本軍がソウルを落としさらに北上するや、劉克良は副元帥として臨津（リムジン）江防御の戦いに臨んだ。

敵軍は5月中旬、臨津江の南側に至ったが、朝鮮軍の頑強な防御陣を突破できず、8～9日間、渡河を抑えられた。そんなある日、敵軍は朝鮮軍をおびき出すべく退却を

始めた。だまされているとも知らず、守御使（防御軍司令官）申硈（シンハル）が劉克良に川を渡って追撃するよう命じた。兵法に明るい劉克良は、間違いなく敵の伏兵にかかる、今は陣地をしっかり固め敵の攻撃を撃退すれば大事はない、として、無謀な追跡を再考するよう口が酸っぱくなるほど主張したが、申硈は敵をあなどって命令を撤回しなかった。道巡察使（道の軍務を監督する武官）韓応寅（ハンウンイン）も申硈を支持した。

劉克良は命令に従うほかなく、部下を引き連れて川を渡った。が、案に違わず敵の伏兵に掛かって、多数の死傷者を出し、先頭を突進していた劉克良は、壮烈な最期を遂げた。

彼の死について『壬辰録』は次のように書いている。

「劉克良は天を仰いで嘆息し、『こうなることを予期して反対したが、今となっては誰を恨もうか』とつぶやいて馬を捨て、丘に拠って押し寄せる敵兵を迎え撃った。1本の矢が弦から放たれる度に2、3人が矢に射抜かれ、100余の敵兵が殺された。矢筒の矢が尽きると、戦死者の筒から取り出して射たが、それさえなくなると、天を仰いで痛嘆し、『敵兵の手に掛かって死ねようか』と言い放って自刃した」

劉克良は、死ぬ間際まで勇敢に戦い、臨津江界線で敵の前進を15日間も遮り、朝鮮軍に防御上の時間的余裕をもたらすうえに大きく寄与した。

彼の最期は多くの軍人や人民の悲憤を呼び起こし、腐敗した無能な封建支配層には深刻な教訓を残した。

朝廷は彼に兵曹参判（従2品。国防次官）の称号を賜った。

後世、人々は知恵深く剛直な劉克良の戦死を悼んで、開城の崇節（スンジョル）寺で毎年祭祀をとりおこない、母親玉壷の住宅跡には碑石を立てた。

28.　李梅窓

李梅窓（リ メ チャン）は全羅（チョン ラ）道扶安（プ アン）の人で、開城（ケ ソン）の黄真伊（ファンジン イ）、成川（ソンチョン）の芙蓉（プ ヨン）と並んで、李（リ）朝時代の詩文壇で名声を博した女流詩人にして、音楽家であった。

幼くして両親を亡くした彼女は、郡役所で下級官吏を勤める叔父李湯（リ タン）に養われた。美しい顔立ちで歌を上手に歌い、特に琴をよく弾いた。叔父の家で窮屈な思いをしながらも熱心に勉強した甲斐があって、文筆にも長けた。

彼女は幾通りもの名を持っていた。親から貰った名は香今（ヒャングム）だったが、妓生（キ セン）時代の名は天香（チョンヒャン）である。しかし、世に最もよく知られた名は梅窓であった。

彼女は、いまだ雪の降る早春に花を開き、自己の強さを誇るかのような梅の花を殊の外に好み、窓辺の梅花という意味を持つ李梅窓の筆名で多数の作品を発表した。

彼女は妓生の身ではあったが、操を固く守り、生命のように尊んだ。自尊の念が強く、人のあなどりを受けることを肯じることがなかった。このように、李梅窓は琴や詩作にすぐれていたばかりでなく、操が固くもあって、当代の名妓として世に名をあげ、数百編の詩を詠んで、当時の名だたる文人墨客の間にも広く知られた。

李梅窓が心から信頼し、思慕し、詩を分かち合ったのは、劉希慶（リュ ヒ ギョン）（1545～1637）であった。年の違いはほとんど30 であったが、仲は格別に深かった。劉希慶は詩才にすぐれ、慷慨心が強く、剛直な人柄の故に人望があったが、庶子という身分のせいで公務に就けず、不遇な一生を送った。当時の人たちは、美しく高尚な情緒を呼び起こす、二人が交わした詩をたいへん好んだ。

李梅窓は境遇の似た劉希慶を父とも、師とも、思慕を寄せる人ともして、彼に一身のすべてを託した。

劉希慶がソウルへ帰ることになったのは、ある年の春のことだった。愛する人の手を取り、涙の離別をした李梅窓は、同年秋、切ない思慕の情を次のように詠んだ。

梨の花が雨に打たれて散る時泣いて別れた方
秋風に葉を散らす今君も私を思ってるかしら
千里の道をわびしい夢だけが行き来している

彼女はこの時調（朝鮮に固有の民族詩歌形態の一つ）のほかにも、『懐かしい方』『いとしい方を慕って』のような漢詩作品のなかで、過ぎ去った日の生活を思い、愛する人を追憶している。

お互いに忘れまいと松竹のごとく誓った心
傾け交わした情愛は海より深かったけれど
旅立った背の君からのお便りはまるで無い
この深い夜独りぼっちで胸を焦がすなんて

こうした詩は、自らの生活体験を踏まえて、愛する人への思慕を真実に表現した特色のある作品である。

著名な文人許筠（ホ ギュン）も扶安で李梅窓に一度会っただけで、彼女のことを生涯忘れなかった。彼は、1594 年、科挙に及第し、一時、糧穀運送船を管理する漕運判官という役職に就いていたが、その頃、李梅窓は許筠の前で琴を弾いて歌をうたい、詩を詠じたことがあった。許筠は彼女がありきたりの妓生とは違って、言行に浅薄なところがない

ばかりか、才気煥発な女性であることを知って、終日彼女と杯を交わし、詩のやりとりをして楽しんだ。二人が会った時間は長くはなかったが、彼女から受けた印象は強烈だった。ソウルに帰った許筠は、李梅窓に手紙を送って安否を問い、彼女の死を伝え聞いたときは、惜しい詩人をなくしたと心を痛めて、哀悼詩を詠んだ。彼の手紙と哀悼詩は、『惺叟覆瓿藁』という著書に収められている。

このように李梅窓は抜きんでた詩才を発揮して、当時世に広く知られた詩人の劉希慶や許筠などに深い印象を与え、彼らの文集にも名とエピソードを残したのであった。

妓生としての李梅窓の人生は、疑うべくもなく不幸であった。一度として親の温かい愛情に見守られたことがなく、乱れた世の荒波にもまれて、身も心も安んずるところがなかった。それが故に、彼女は詩『嘆息』で、病身の自分は誰もいない独り住まいの部屋で、衣食に事欠きながらいつしか 40 年を生きたが、一日として泣かずに送った日がなかったと嘆息し、詩『指輪』では、一夜を過ごすと白髪が増えるという暗然とした身の上、苦しみもだえる心のように痩せ細った指、その指のぶかぶかしてしまった指輪に哀れみを覚えながら、不合理極まる世の中を恨み、告発している。

李梅窓はこのように不幸な一生を、1610 年、38 の年で終えた。

彼女の死は、扶安の人たちに大きな悲しみを与えた。それほど李梅窓は容姿にすぐれ、才能の秀でた女性であった。死後 25 年がたった 1635 年、扶安の人たちは、彼女の墓に生涯の行跡を綴った碑石を建てた。また、開巖(ケオム)寺の僧法雲(ポプウン)は、李梅窓の詩稿の消失を恐れて、1668 年、当時残っていた作品 58 首を収集して、詩集『梅窓集』を刊行した。1845 年には、扶安地方に組織されていた団体「扶風(プブン)詩社」が、李梅窓の墓の碑石を建て直した。

このように、女流詩人であり音楽家であった李梅窓は、不遇な生涯を送りながらも、

文人たちの追憶、扶安の人たちの思い出の中に、愛してやまなかった詩や歌、琴と一緒に永遠に消えることのない痕跡を残したのであった。

29．桂月香

桂月香（ケウォルヒャン）は、豊臣秀吉の日本侵略軍を撃退する壬辰祖国戦争の際、平壌（ピョンヤン）城奪回の戦いで花のような青春を惜しみなく捧げた、平壌官庁所属の愛国名妓であった。本名は月仙（ウォルソン）だと伝えられている。

平壌城が日本軍の手に落ちたのは、1592 年 6 月中旬だった。桂月香は避難する余裕がなくて城内に留まった。

手当たり次第に破壊し、放火する日本侵略軍の蛮行を目のあたりにした平壌城の人たちは、復讐心に燃えた。桂月香もその一人だった。平壌城から敵兵を駆逐し、祖国と民族を救う戦いに一身をなげうとうと覚悟して、敵将小西飛弾守如安にはべったのも、機会を待つためだった。

ある日、彼女は金応瑞（キムウンソ）将軍（1564～1624）が別将に任ぜられて、平壌城外で侵略軍と戦っているということを伝え聞いた。金応瑞とは、彼が平壌営門に勤務していた頃から知り合った仲だった。龍岡（リョンガン）生まれの金応瑞は大力の持ち主で、豹のように敏捷なうえ知略にもすぐれた部将として広く知られていた。桂月香はそんな金応瑞に強く惹かれ、応瑞もまた平壌随一の名妓月香を深く愛していた。平壌城の陥落後、金応瑞は龍岡、江西（カンソ）、甑山（チュンサン）などで兵を募って教練を施し、偵察活動も強化して、平壌城奪回の機を窺った。

桂月香はなんとしても敵情を金応瑞に知らせようと、敵兵たちが牡丹峰(モラン)の乙蜜台(ウルミル)で酒宴にうつつを抜かしている隙を狙って、敵軍の装備や配置状況を記した書を凧に付けて城外に送った。この命がけの情報は、平壌城の奪回をはかる朝鮮(チョソン)軍にとって大きな助けとなった。

1592 年 8 月、朝鮮軍は平壌城奪回の戦いを決行することになった。作戦に先立って、金応瑞は敵情を最終的に確かめるべく、単身で城内に潜入した。深夜、前ぶれもなく現われた応瑞の手を取った月香は、いぶかり、かつ喜んだ。

「この危険な所へ、どうしていらしたのですか」

「月香、そなたの力を借りたくて参った。そなたはたとえ妓生ではあっても、朝鮮人であるからには、国の大事を共に計ることにやぶさかでなかろうし、またわれわれ両人の旧情も捨ててはいないだろうと思う」

平壌城奪回の万全を期して敵将小西如安を殺し、敵兵を混乱に陥れようという金応瑞の意向で、桂月香は敵将暗殺の計を立て、相談した。これは自己の生命にかかわる重大事だった。

小西如安は小心で、寝所には蚊帳を壁に巡らして吊り、その四隅に鈴を付けて、わずかに揺れても音を出すようにしたばかりか、蚊帳の内側にまたとばりを、さらにその内部に大屏風、小屏風を立てて、寝台を置いていた。それに、枕元には大刀を掛け、足元には小刀を置きながらも、まだ安心がならず、全身に鉄札の胴衣をつけて寝るので、剣に刺されても傷一つ負わないと自負していた。しかし、桂月香は生命を賭して計画を実行すると誓った。

金応瑞と約束した日、桂月香は夜遅くまで小西如安の酒席にはべり、盛んに酒を勧めた。やがて、小西は呂律が回らなくなり、目がとろんとしたかと思うと、ついにそ

の場に酔いつぶれてしまった。月香はそっと立ち上がって、鈴の中に綿を詰め、すぐさま外へ抜け出して金応瑞に合図した。彼はすかさず小西の住む清虚(チョンホ)館に忍び入り、胴衣の当たっていない敵将の首めがけて、両手に握った剣を力一杯振り下ろした。小西の首はあっけなく床に転がり落ちた。

金応瑞は、剣を鞘に納め、桂月香の手を取って外へ飛び出した。北側の城壁に向かって牡丹峰の山林を走り抜けていた二人は、敵兵に発見され、追跡を受けた。息を切らして走っていた月香は、足が棒になり、もはや動きが取れなくなった。敵兵は間近に迫っていた。

「ぐずぐずしていたら二人とも死ぬほかありません。将軍にまたお会いでき、いつまでもお側に仕えとうございましたが、それもままなくなりました。今となっては敵に捕らわれて死ぬより、将軍のお手にかかって果てることこそわたしの本望です」

こう言ったが、金応瑞が決断を下しかねているのを見た月香は、短刀を抜き、われとわが喉を刺した。鮮血がさっと吹き出した。

天を仰いで嘆息した金応瑞は、群がり迫った敵兵を右に左に切り伏せて走り、ついに城外に抜け出した。

桂月香は死んだが、凶悪な侵略軍を撃滅する救国の戦いに美しい生を惜しみなく捧げた彼女の魂は生き残り、平壌城奪回の激戦へと全将兵を力強く励ました。金応瑞ら朝鮮軍は、小西の死で周章狼狽する敵軍を蹴散らして、平壌城を取り戻した。

李朝政府は桂月香をたたえて官位を授けた。平壌の人たちは彼女の功績と愛国の衷情を後代に伝え、追慕しようとの一念で義烈(イリョル)祠を建てて祀った。ほかにも、彼女が住んでいた町を月香邑と名付け、当地に碑石を建てた。

こうして、平壌の義妓桂月香の名は壬辰祖国戦争と共に、歴史に深い足跡を残した

のである。

30. 作家金万重の母親尹氏

尹(ユン)氏は、17 世紀の著名な小説家西浦(ソポ)金万重(キムマンジュン)(1637～1692)の母親である。

金万重が『九雲夢』のような国文の長編小説を書き有名になったのには、母親尹氏の母性愛に負うところが大きい。

尹氏は、代々朝廷の高官を務めた名門の生まれであった。高祖父尹斗寿(ユンドゥス)と曾祖父尹昉(ユンバン)は国の最高官職である領議政(宰相)を務めた官僚であり、祖父は宣祖(ソンジョ)王の女婿にして著名な文人である尹新之(ユンシンジ)であった。

尹氏は、1617 年、判書(国務大臣) 尹墀(ユンジ)の一人娘として生まれた。彼女の養育者は祖母の貞恵(チョンヘ)公主(宣祖の側室の娘)であった。そのしつけで、彼女は高位の貴族の家門で守るべき礼儀作法をきちんと身につけ、かなりの学識を所有することができた。

彼女は、14 歳の時、栗谷(リュルコク)李珥(リイ)の弟子で、儒学者として広く知られた金長生(キムジャンセン)の孫金益兼(キムイクキョム)に嫁いだ。

金益兼は、1636 年、清国が朝鮮(チョソン)に屈辱的な和議を強要した時、これに強く反対する上訴文を王に奏し、翌年、江華(カンファ)島で侵略者に抗して戦い、南漢(ナムハン)山城が陥落するや、金尚容(キムサンヨン)と共に火薬庫に火を放ち、23 歳の若さで壮烈な最期を遂げた。

金益兼が戦死した時、尹氏は身ごもっていた。夫の殉死後、彼女は身重の体で、五つの長男万基(マンギ)の手を引き、江華島を抜け出して豊徳(プンドク)の実家に帰り、ここで次男万重を生んだ。この時から尹氏の運命には影がさし始めた。すべてに恵まれていた名門に生

まれ育った彼女は、73 歳で世を去るまでありとあらゆる辛酸をなめながらも、孫子を立派に育てた。

女は弱く母は強しという言葉がある。母親としての尹氏は性格が剛直だった。17 世紀の混乱と困苦は、幸福一方に生きてきた尹氏を強靭な意志の持ち主に変貌させたのである。夫を亡くした尹氏を人々はいろいろと慰めたが、彼女は悲しみを一切面に表わさず、涙を見せることもなかった。

壬辰（1592 年の日本の朝鮮侵略）、丙子（1636 年の清国の朝鮮侵略）両度の戦争の被害を受けて人民の生活は零落したが、尹氏の実家でも両親が相ついで死亡し、暮らしは窮迫した。しかし尹氏は、困難にめげず、操正しく、強い意志をもって家事を切り盛りし、子供たちを教育した。生計費に事欠くようになると、自分の手で機を織り、刺繍などもし、昼食を抜かすようなことがあっても、子供たちの勉強に妨げになってはとおくびにも出さず、愚痴一つこぼさなかった。子供たちは、母親の人知れぬ努力と愛情に守られてすくすくと成長した。

尹氏は常に生活を控え目にし、清廉潔白を旨とした。夫の死後は一生素服（白衣）をまとって暮らし、派手な身なりをすることがなかった。子供たちが大きくなり、官途に就くと暮らし向きは楽になったが、贅沢に流れることはなかったし、子供たちが母親のためにご馳走を調えることすら許さなかった。ただ、わが子が科挙に及第した時だけは、これはわが家のみならぬ村の慶事だとして喜び、祝宴を張るよう手配した。

尹氏は万基の長女が粛宗(スクチョン)（在位 1675～1720）の后に迎えられてからも、生活態度を改めようとしなかったばかりか、万基を前に座らせて、以前にも増して謙譲を心がけ、王の外戚を鼻にかけて世の指弾を受けることのないよう身を慎まなければならないと訓戒した。彼女は王妃となった孫娘に会うたびに、昔の善良な王妃たちの話をして、

手本とするよう諭し、わたくしごとをもって王妃に援助を求めることはまるでなかった。

孫娘が 17 歳の若さで不幸にも死去したとき、朝廷は彼女が日常使っていた家具調度や愛用品を尹氏に下賜した。ところが尹氏は、いかに貴重な物品であろうとも、自分にはそれらを受け取る理由がなく、ましてわが家の生活にはふさわしくないとして、拝領を固辞した。王は彼女の心がけにいたく感動したという。

このように尹氏は何事に対しても慎み深く、清廉潔白で意志の強い、教養のある女性であった。彼女のこうした品性は子供たちに大きな感化を及ぼし、後日、わが子たちが曲折の多い仕官生活のなかでも、固い意志をもって正しく良心的に生き抜けるようにした土台となった。

尹氏は、子供たちを愛し、立派な人材に育て、世に押し立てた母親であった。慈しみ深く、細やかな愛情を注ぎながらも、彼女は息子の教育にすべてを打ち込んだ。

彼女は幼時から歴史と文学をたしなみ、『小学』『史略』『唐詩』などは自分がじかに子供たちに教えた。子弟教育は極めて厳格で、勉強を少しでも怠けたり、間違ったことをしたりすると、ふくらはぎを鞭打って罰を加え、過ちをきっと直すようにした。このことについて金万重はこう回想している。

「母は、『お父さんはお前たち二人をわたしに依託してお亡くなりになったのに、こんな有様ですから、わたしはなんの面目で地下のお父さんに会えると言うのよ。学問をうっちゃって生きるくらいなら、死ぬ方がましです』と、涙ながらに骨身に泌みる訓戒をたれたものである」

子供たちの勉学にすべてを打ち込む、尹氏の至誠は極みがなかった。当時は、戦後のことで書籍を手に入れるのが容易でなかった。彼女は、『孟子』『中庸』のような本

は穀物と換えて求めたし、『左氏伝』は巻数が多く、あえて買う決心をしかねているわが子の気持ちを察し、機織り中の絹布を裁って、本代とした。また、近所の弘文館に勤める書吏に頼んで、『四書』と『詩経諺解』を借り、筆写して息子に与えた。そうした経典のほかにも、医書をはじめいろいろの分野にわたる書物も読み、見聞を広めるようにもした。

二人の息子は母親の意に沿って熱心に勉強した。彼らがある程度成長すると、伯父の金益熙（キムイクヒ）が教育に当たった。伯父は、二人が共に聡明であるばかりか、学習態度がまじめなうえ、理解の仕方が独特であるとして、尹氏の教育法をたたえ、経書に対する造詣の深いことにも感嘆した。

尹氏は息子だけでなく、孫たちの教育にも熱心だった。老いてからも、幼い孫たちを多くの時間を割いて教えた。このような至誠は立派な結実をもたらした。

長男の金万基は、1653年、21歳で科挙に及第し、兵曹判書（国防長官）に任じられ、大提学（弘文館、芸文館の最高官位）をも兼ねることになった。次男の金万重も1665年、進士（科挙の小科初試の合格者）の試験に合格して官途につき、大提学、判書（国務長官）を務めた。

尹氏の最大の功績は、西浦金万重が有名な長編小説を執筆するうえに多大の影響を及ぼしたことにある。

彼女は幼時から読書を好んだ。老年になっても読書熱は衰えず、とりわけ古来の政治史と、有名な忠臣の言行を記録した本を熱心に読んだ。夜遅くまで読んでは、子供たちに話してあげるのも一つの楽しみだった。

遺腹の子として生まれた金万重は、一度も見たことのない父親への慕情をも重ねて、母親に孝養を尽くした。昔語りや読書を好む母親のために、彼は史書や物語本などを

求めて来、外国を訪れた際も、そのような本をわざわざ買って帰って母親に与えた。また、公務以外の時間はいつも母親のかたわらで過ごし、彼女がまだ読んでいない古書や物語本を読んで聞かせて、無聊を慰めてあげたものである。

このことについて彼は、『西浦行状』で「母が読書を好んだので、昔の奇異な本や稗説作品（民間に伝わる伝説、教訓的・世俗的な奇異な話などを説話風に記した本）を集めて、夜となく昼となく読んで聞かせたが、まわりの人たちもみな喜んだ」と書いている。

この叙述を通して、金万重が小説文学に対して正しい理解を抱くことができたのは、母親の大きな影響によるものだったと推量できるのである。

金万重が小説『九雲夢』を書いたのは、母親を喜ばせるためだったとされている。

1687 年、金万重は、剛直な性格が粛宗の忌諱に触れて、平安道（ピョンアン）宣川（ソンチョン）への流罪を仰せつかった。同年春、兄の万基が死去しており、年老いた母親は重ね重ねの不幸に悲しみが大きかったであろうが、わが子を城外まで見送り、「島流しに処せられた人の中には、昔から立派な人物が少なくなかった。配所では特に体に気を付け、わたしのことは考えなくてもよい」と力づけた。

金万重は、翌年の春、許されて帰ったものの、その二月ほど後、粛宗が善良な后の閔（ミン）氏を廃して、側室の張（チャン）氏を正室としたことに義憤を覚え、王をきびしくいさめたことが災いして、またまた流罪に処せられた。

1689 年、金万重は南海の地に流された。彼と共に行く先はそれぞれ違ったが、3 人の甥も配流の地に向かった。一度に、息子と孫合わせて 4 人を島流しにされた尹氏の胸中は察するに余りがあるが、富貴や権勢のなかにあってもおごることのなかった彼女は、思いもかけない不幸に見舞われても、いささかも動ずる色を見せず、孫子たち

を冷静に見送った。

孤独なわびしい配流の地で、金万重は一日として母親を忘れず、懐かしんでは幾編もの詩を詠んだ。だが、それだけでは満足できなかった。彼はどうすれば独りぼっちでいる老いた母親に喜んでもらえるだろうかと考えた末、母親が楽しんで読める小説を書こうと思い立った。いつだったか、鄭澈（チョンチョル）(1536～1593)の『思美人曲』を読んだ母親が、このような国文の歌詞を物語体に書き直して女性たちのわびしい気持ちを和らげることができたらよいのに、と言った言葉が脳裏に浮かんだのであった。こうして書いたのが長編小説『九雲夢』である。

金万重は、母親の話から女性たちの念願や思いを知り、難解な漢文体を退け、誰もが容易に理解できる朝鮮文字を駆使して、53 回の続き物の小説『九雲夢』を書き上げたのであった。

後世のある人は、この小説について次のように評した。

「伝えられるところによると、西浦金万重は配流の地で、母親を慰めようとして、一夜のうちに『九雲夢』を書き上げた。この小説の要点は、富貴功名は一場の春の夢に過ぎないということであるが、要するに母親の憂いを和らげ、慰めることを願って書いたのである」

『九雲夢』は、自由な生を縛り付ける封建的従属から抜け出したいと願う人々の志向をロマンチックに描いた作品で、多くの人に愛読された。この作品によって金万重は、17 世紀に入って新たな発展を始めた国文小説創作の諸成果を集大成し、朝鮮の小説文学の発展に多大な寄与をした人物として、大きくたたえられることになった。

しかし、病の床についていた母親尹氏は、わが子が自分のために書いた小説を読むことなく、1689 年、73 歳を一期に世を去った。

遠くの南海の地で母親の訃に接しても、駆けつけて行けない不孝息子の悲しみに打ちひしがれていた金万重は、尊敬し愛してやまなかった母親の行状を書いた。本の名は『貞敬（チョンギョン）夫人尹氏行状』である。彼はこの本の最後を次のように結んだ。

「庚午年(1690 年)8 月、不肖にして孤独、悲しみにもだえる息子万重が血涙をしぼり、慎んで記す」

その 2 年後、56 歳の西浦金万重は、配流の地で罪を許されることなく、静かに目を閉じた。

金万重が国文によって時代の志向をこめた長編小説を書き上げ、後世に名を残し得たのは、わが子に捧げた尹氏の献心的な愛と、深い学識、小説に対する創作的影響に負うところが大きかったからである。

31. 「高ドリョン」の妻朴氏

朴（パク）氏は、粛宗（スクチョン）時代の女性で、その日稼ぎの無学な若者に嫁ぎ、夫の猛省を促し、力づけて世に押し立てた賢夫人である。

朴氏は、慶尚（キョンサン）道高霊（コリョン）のある村役場に勤める朴座首(郷長)の娘であった。早く妻に死なれてしがないやもめ暮らしに甘んじていた朴座首は、聡明な独り娘だけが唯一の生き甲斐であった。娘は世事に通じ、目が高かったが、貧しいせいで貰い手がなく、婚期を逸していた。

近隣の農家に高惟（コユ）というその日暮らしの若者がいた。豊臣秀吉の朝鮮（チョソン）侵略軍を撃退する壬辰祖国戦争当時義兵(民兵)長として名を馳せた高敬命（コギョンミョン）の後裔ではあったが、幼

時に両親と死別した後、故郷光州(クァンジュ)を捨てて放浪したあげく、当地に住みついていた。目に一丁字もない明き盲である反面、働き者で善良でもあったので、近所の人たちは、彼を本名で呼ばず、親しみをこめて高ドリョン(チョンガー)と呼んでいた。

ある日、高ドリョンは朴座首を訪ねて碁を打とうと言い、座首が同意すると、それでは賭けをしませんかと持ちかけた。

「おじさん、こうしましょう。もしわたしが負けたら 1 年間おじさんの家事をただでお手伝いしましょう。逆におじさんが負けたら、わたしを婿に選ぶということにしませんか」

朴座首はかっとして、碁盤を力任せに押しのけた。

「なんだと。とんでもない野郎だ」

高ドリョンは青くなって、そそくさとその家を飛び出してしまった。そんな有様を見ていた娘は、父親が部屋に戻ると、静かに言った。

「お父さん、そんなに腹を立てることはありません。高ドリョンさんは今でこそ卑しい仕事をしていますけど、とてもしっかり者で、みんなからほめられているではありませんか。将来見込みのある人ですから、あの人を婿に選んだら、わが家に福が訪れるでしょう。決して悪いことではありませんわ」

父親はまた腹を立てて、ぷいと外へ出て行ってしまった。

そんないきさつを伝え聞いた近所の人たちは、酒瓶を持って朴座首の家に押しかけ、高ドリョンを婿に取れと熱心に勧めた。さすがの朴座首もついに折れてその気になった。

ところで結婚初夜のこと、新妻は改まった様子で夫にこう言った。

「あなたの相を見ると、今の苦労がそう長いとは思われません。まして、あなたは

学者の血を引いていらっしゃるのです。それなのに、今まで読み書き一つできずに家門の名誉を傷つけていらっしゃいます。ですから、今夜、わたしと約束をしましょう。向こう10年の間、わたしは毎日機を織って暮らしを立てることにし、あなたはあしたここを発って勉学に励み、科挙に及第した後お帰りになるのです。あなたにとっても、また、わたしにとっても心苦しいことですが、固く決心して、10年間お互いに訪ねることを控えると約束しましょう」

妻の心こもる言葉に感動しながらも、高ドリョンは決心しかねた。

「お前の決心は実に立派なものだ。しかし、そう思い通りに行くとは限らんから、今すぐここでどう約束できようか」

「そうではありません。志を立てた者は必ずや成功するという格言もあります。10年を1日のように努力したら、どんなことでも成就するものです」

こう励ました朴氏は、櫃のなかから2疋の麻布を取り出し、勉学の元手として持って行くようにと言った。妻の激励と誠意に胸を打たれた高ドリョンは、きっと約束を果たそうと固く心に誓った。

こうして初夜を過ごした二人は、翌朝早く、時を作る雄鶏の声に起こされて袂を分かった。朴氏は、風呂敷き包みを肩に掛けて旅立つ夫を、信頼と深い思いをこめて見送った。情を交わしたばかりの夫を遠くに旅立たせ、10年もの間独力で暮らしを立てていくのは生易しいことではなかったが、朴氏は決然として夫を送り出したのである。

彼女は約束通り、仕事に精を出し、財産を増やしていった。夫を送り出して間もなく、父親が死去して全くの孤独の身になったが、夜を日についで一心不乱に働き、ついに財をなした。瓦屋根の庫が立ち、やがてそれは100余室に増えた。倉庫は穀物で満ち、村一番の長者になった彼女は、100余戸の貧しい村人たちに穀物を分け与えるな

どの善行も積んで、人々から高ドリョン夫人と持てはやされた。彼女は夫が残した息子を立派に育てた。

いつしか約束の 10 年が迫ると、彼女は八方手を尽くして夫の消息を尋ねた。

そうしたある日のこと。破れた道袍（トポ）(外衣) に古びた笠をかぶった乞食が、一碗の飯を乞うて庭に入って来た。

戸の隙間からのぞいてみると、それはほかならぬ夫高惟だった。朴氏は早速召し使いの少年に言い付けて中へ請じ入れた。両人は抱き合って再会を喜んだ。やがて高惟は涙をぬぐって言った。

「わしはあの時、家を後にして、行く先も定めず歩いているうちに盗賊に会って荷を奪われ、裸の身であちらこちらの書堂を訪ねたが、どこでも断られてどうにもこうにもならず、乞食に落ちぶれてしまった。恥ずかしいと思いながらも、約束の 10 年が経ったので、こんなぶざまな姿ながらも、思い切って帰って来たのだ。お前は約束通りに成功したが、わしはすっかり落ちぶれてしまったのだから、合わせる顔がない」

朴氏はにこりとして、「人間のことは、そうなんでも思い通りにいくものではございません。今わたしには数千石の穀物があります。これだけあれば、一生衣食に事欠くことはないでしょうから、決して気に病むことなどありません」と言い、食事の支度をするよう、召し使いに命じた。この時、高惟は、外に一緒に来た人たちが待っている、彼らにも食べ物を恵んでもらえまいか、と言った。朴氏は快く承諾し、召し使いにみんなを呼び入れるよう命じた。

そうこうするうちに、外でにぎにぎしい笛の音がし、続いて官服姿の人たちが大勢庭に入って来て夫人に挨拶をするのであった。集まっていた近所の人たちは訳が分からず、がやがやと成り行きを見守った。

夫人はほほえんで、「あなたが成功して帰って来られることは先刻承知していました。なのに、どうして乞食姿に身をやつして人をだまそうとなさるのです」と言った。妻の言葉に、高惟は呵々大笑して官服に着替え、離れの座敷に出て、県庁の官吏たちの挨拶を受けた。

その夜、夫妻は結婚初夜のことを楽しく思い返しながら、10 年もの間夢にも忘れなかった情を分かち合った。

高惟はその間の一部始終を語った。妻から貰った麻布 2 疋を売って数十両の金を懐にし、あちらこちらを尋ね歩いた末、陜川（ハプチョン）のある温厚な書堂の老先生に出あい、その老人のもとで、子供たちに混じり読み書きを習い始めたことや、その後、海印（ヘイン）寺に入り、僧たちの好意でどうにかこうにか食いつなぎながら、文筆と書芸に熟達し、ついに科挙に及第して王のおぼえめでたく、高霊県監（県の長官）に任ぜられて、故郷に錦を飾ることになった、と。

こう言って彼は、今日の成功をもたらした君の恩は一生忘れない、と重ねて謝意を表した。

翌日、朴氏は牛をほふり、酒を整えて、近隣の人たちをすべて招待し大酒宴を張ったばかりか、庭にお金と穀物を高く積み上げ、貧民に分け与えた。

高惟は赴任後間もなく善政を布いた功労で朝廷に喜びを与え、やがて慶尚道監司（道の長官）に登用され、さらに参判（従 2 品。次官）に昇進した。

若い頃その日暮らしの身で諸地をさすらい、他家の雑用などをしていた高ドリョンこと高惟は、貞淑な賢夫人朴氏に巡り合ったことで、大成したのであった。

朴氏の美談は、『錦渓筆談』に紹介され、今日に伝えられている。

32．詩人徐令寿閣

徐令寿閣（ソリョンスガク）は、実学思想の影響を受けながら諸分野の学問を学び、子弟教育に力を入れた、18 世紀末～19 世紀初めの代表的な女流詩人である。

徐氏は、1753 年、監司（道長官）の経歴を持つ徐迥修（ソヒョンス）（1725～1778）の子として誕生した。

彼女が生まれ育った 18 世紀は、政治、経済、文化のすべての分野で、国の富強に実際に役立つ有用な学問の研究を主張する、実学思想が急速に流布した時代であった。進歩的かつ良心的な人たちは、直接あるいは間接に実学思想にかかわるか、影響を受けていた。

徐氏は幼時から家庭で教育を受けたが、その際、儒教の経典や史書にのみこだわることなく、天文や医学など生活に役立つ学問を選り好みせずに幅広く学んだ。特に星湖（ソンホ）李瀷（リイク）、湛軒洪大容（タムホンホンデヨン）、燕巌朴趾源（ヨンアムパクチウォン）など実学思想家たちの本を熟読したが、これは、後日、子女教育の上で大いに役立った。

徐氏は、承旨（崇政院の高級官吏）洪仁謨（ホンインモ）（1755～1812）と結ばれ、奭周（ソクチュ）、吉周（キルチュ）、顕周（ヒョンジュ）の男子と数人の女子を設けた。息子たちの教育は彼女がじかに当たった。

徐氏は、生活に役立たないような学問は学んでも意味がないとして、子供たちに昔の人たちの空理空論を鵜呑みにしてはいけないと常に戒め、当時の現実的な問題や先進科学技術に目を向け、その解決に力を入れるよう教え、自らも時間を割いては、新しい学問の習得に努めた。

子女教育の方法も独特であった。3 人の息子はみな一を聞いて十を知るほど聡明だったが、決してうぬぼれることのないよう厳格にしつけた。毎朝、前日学んだことを

テストするだけにとどまらず、以前に学習したこともすべて暗唱させ、大切な点は説明をするようにさせた。きのう質問したことを翌日また質問し、翌々日も続けて質問した。答えが前の日のものと同じだと、勉強を怠けたと叱り、前のものよりよい答えが出ると、問題を掘り下げて勉強したとしてほめた。こうした教育法は、子供たちのすぐれた知能をいっそう磨き、他の子たちよりずっと早く発達する結果をもたらした。

長男の奭周は読書を人一倍好んだ。彼は本の内容が国のために役立つか否かを自ら判断し、害になると思えるものは是正してみるよう努めた。

奭周が六つのときのある日のこと。日が暮れても彼の姿が見えないので、家中の者が手分けして探し回ったが、どこでも見つけることができず、みな空しく帰って来た。そこで念のために、今度は屋敷の中を探したところ、裏庭に座り、月の光で読書にふけっている幼い少年を発見したという。

幼時からこんなに勉強熱心だった奭周は、成長して広く世に知られる人物になったが、それもみな母親徐令寿閣の教育のたまものだったと言えよう。

母親の進歩的学問を志向する教育と厳しいしつけのおかげで、子供たちは立派に成長した。三人の息子はいずれも世の錚々たる文士となったばかりか、長男は政治家、次男は学者、三男は王の女婿となった。

洪奭周は、1795 年、科挙の文科に及第し中枢府の判事を経て左議政（左大臣）に任じられたが、常に正論をもって王に諫言し、不正行為に対してはいささかの譲歩もしなかった。1815 年、全国が飢饉に見舞われた際、京畿（キョンギ）、慶尚（キョンサン）、忠清（チュンチョン）、全羅（チョンラ）各道の飢民は 500 万を越えたというが、当時、忠清道の観察使（長官）を勤めていた奭周は、飢民の救済に努め、悪質土豪の土地収奪行為を禁ずるなどして、農民の信望を得た。

三男の顕周は、文科に及第して王の女婿に抜擢された。母親は、顕周が豪華な生活

におぼれ驕慢になってはと気遣い、それ以後も学問に励み、慎み深く生活するよう訓戒することを忘れなかった。

母親は彼ら二人の栄達をあまり喜ばなかった。息子たちにはつねづね、学問を心身を鍛えることに資し、栄達、高慢の踏み台にすべきではないと言い聞かせた。

母親の意を体した次男の吉周は、科挙の受験を思いとどまり、数学の研究に没頭した。彼は『幾何新説』『叢秘記』などを執筆して洪大容の理論を一段と深め、文化史の研究も行って朴燕巌の『熱河日記』に倣い、当時の社会を鋭く風刺した書籍を著わした。彼は、実学思想家の李勉伯（リミョンペク）、徐有榘（ソユク）らとも交遊して実学思想を更に固めていった。

3 人の息子だけでなく、次女の洪原周（ホンウォンジュ）も女流詩人として名を上げた。

このように徐令寿閣は、子女を産み育てた慈しみ深い母親だったばかりでなく、時代の先進的な志向に目を開き、高い学識と厳格な師としての態度をもって子女を教え導き、成功させたすぐれた女性であった。

徐令寿閣は、少なからぬ詩を世に出した詩人でもあった。詩文集『令寿閣稿』(巻 1)には、36 編の詩が収められているが、当時それらはいずれも傑作として評価された。

彼女の詩は、遠い故郷への限りない思いを自然の風景と溶け合わせて、女性的な感性をもって情操深く詠じていることに特徴を見出すことができる。

故郷は誰にとっても幼年時代の追憶をしみじみと呼び起こす懐かしい土地である。こうした郷愁は、故郷を遠く離れているとき、とりわけ強く感じるものである。生まれ育った故郷を捨てて他郷に嫁いだ女性にとって、望郷の念はとりもなおさず、その地にいる父母兄弟への忘れがたき追憶である。

徐令寿閣も夫に従い、遠い北方の地に移って子供たちを生み育て、さしたる心配事もなく生活してはいたものの、歳月の流れのなかで一度も帰ってみることのできなか

った故郷への思いは切ないものがあった。

詩『暮れゆく春の日』と『秋をうたう』は、晩秋の情趣とすず風立つ秋の風景を描きながら、そうした望郷の念を、ほのかに、深い情緒をもってうたい上げている。

森のうぐいすは夜の明けたことを告げ
草花は芳香を放って春の情趣を添える
靄に包まれたヤナギはことさらに青く
雨に濡れた花びらいとも鮮やかなるも
行く雲流れる水を見るにその跡はなく
竹やぶを過ぎる風いとど有情をそそる
高殿に立ってはるかな遠方を望むとき
切ない望郷の思いはどうにも忍び難い

＊　＊　＊

月影楼に満ち霜茂みに満つ
ひとしお濃さ増す涼秋の気
星の光も寒々と影を落とし
老いた木の陰もうすら寒い

千里南方に白髪頭向ければ
北関の地三年の情抜け難く

灯火は白壁にゆらゆら映え

砧（きぬた）たたく音風に乗って来る

令寿閣にはこのほかに、『明るい夜』『寒夜』『新月』『螢光』などの詩作もあるが、これらの詩では、暗闇に包まれた森の中、たそがれ濃い空、空飛ぶ鳥、雲の端にかかった新月など自然の風趣を生き生きと画き出している。

彼女の詩には、慈しみ育てた子供たちが、成長後も国に忠節を尽くすであろうことを願う作品も見られる。詩『北京へ向かうわが子に』は、そうした例の一つである。遠く北京へ向かう息子の手を取って放すことのできない母親の切情をリアルに描くと共に、家や妻子のことをくよくよ案ずることなく、国の大事に意を尽くし、常に挙措進退に心し、徳を積み、修養を怠らないようにという戒めが、そこには強くにじみ出ている。

子女を立派に教育した師であり、女流詩人であった徐令寿閣は、1823 年、71 歳で世を去った。

33．女流学者李憑虚閣

17 世紀中葉に台頭した実学思想の影響で、18～19 世紀には、空理空論を排し、現実生活上の問題や科学技術、歴史、文化など有用な学問を研究する気風が社会的な風潮となった。進歩的な実学思想は両班（貴族）学者はもとより、深窓で過ごす女性た

ちの共感を得るまでに至った。教養ある両班家門の女性たちのなかには、生活に必要なさまざまの問題を記録に残そうという傾向が生まれたのである。

その代表的な人物は李憑虚閣（リビンホガク）であった。彼女は徐有本（ソユボン）の妻で、『閨閤叢書』『清閨博物志』『詩文諺解』などを著わした女流学者である。

彼女は、19 世紀始め、女性たちが必ず知っておくべき家庭生活上の常識をまとめた『閨閤叢書』を著わした。1 巻本のこの書は脱稿後すぐには上梓されず、1869 年（高宗（コジョン）6 年）に木刻本として刊行され、今日に伝わっている。

『閨閤叢書』の主なテーマは、薬酒の作り方、味噌醤油と酢の作り方、総菜、魚肉、餅果、雑飲食物、染色法、各色絹布の砧（ちんぽう）法、伝来医法などで、女性がたやすく理解できる国文で叙述されている。本書は、封建支配層の利害関係が反映された制約性を内包してはいるが、当時流布した実学思想的傾向を帯び、平明な国文で書かれているという長所がある。この叙述からは、女性たちの日常語や 19 世紀の女性語などの言語的特徴も窺い知ることができる。

『清閨博物誌』もまた、女性の生活に必要な常識をいろいろと集めた本である。

彼女はまた、詩文学と言語学についての深い知識に基づき、漢詩の作品を国文で注解した『詩文諺解』を著わしている。

李憑虚閣のような女流学者の出現は、李（リ）朝時代のみならず、それ以前のどの時代にも見られなかった類いまれな現象である。

34．詩人金三宜堂

金三宜堂（キムサムイダン）は、18 世紀の才能豊かな女流詩人の一人である。彼女の試編のうち 10 余編が今日に伝わっている。

彼女の詩で異彩を放っているのは、何よりも、花咲き、蝶の舞う春の日のうららかな風景、牧童の笛の音、木こりの歌声が響く農村のもの静かな景趣などを情緒深く生活的に画いていることである。

『牧童の笛の音』『花を手折って』『梨の花』『春の日の興趣』などは味わうほどに、麗しい自然の風致が一幅の絵のように眼前に広がる思いの強まる詩である。

詩『梨の花』で、詩人はこううたっている。

いとしやあの梨の花私のため咲いたのか
背の君はまだ帰らぬに春は早くも訪れた
軒の下をすいすい行き交うあまたの燕は
夕焼けに彩られ番いをなして飛んで来る

この詩は、愛らしく咲いた梨の花や、夕焼け映える軒先を対をなして飛ぶツバメなど、ありふれた春の日の風景を描きながらも、きびしい冬に打ち勝って訪れた新春の情趣に心引かれた女性のデリケートな感情を生き生きと表現している。

金三宜堂はまた、夫河煜（ハウク）への大きな期待と深い愛情をこめた作品も発表している。『夫に』『秋の夜の月』『窓外の日は沈むのに』『深夜の歌』は、その代表作である。彼女は夫と別れて過ごす切なさと、こまやかな愛情を吐露しながらも、国事にせわしい

のは男の常だから、家のことをくよくよ気にすべきではない、と詩にこめている。つまり、彼女の恋情の詩は、愛する夫への恨みつらみや哀訴ではなく、熱い愛情と深いいたわりの気持ちがこもっていることに特徴がある。詩『秋の夜の月』にその特徴がよく現われている。

一個の月がふた所を照らしてはいても
二人は遠く千里を隔てて暮らしている
願わくはこの身があの月の光となって
夜毎わが夫（つま）の傍にかしずきたいものを

深い夜に高く上がった明るいあの月は
窓からひそやかに忍んではいって来る
ソウルの地の背の君さぞ寂しかろうが
なにとぞ望郷の思い起こさせるでない

このように、金三宜堂は多様なテーマの詩編を数多く発表して、18 世紀の詩文壇を飾った閨秀詩人であった。

35. 姜静一堂

姜静一堂（カンジョンイルタン）は、18 世紀末から 19 世紀前半にかけて活動した才能ある閨秀詩人にして、書家であった。15 世紀における詩文の大家姜希孟（カンヒメン）の後裔で、父の名は姜在洙（カンジェス）、夫は尹光演（ユングァンヨン）である。

姜静一堂は品端正で、物静かな女性であった。号静一堂は、自分の良心を静かに、純粋に守り通そうという気持ちを表現したものである。

彼女は、嫁としての人倫を重んじ、老いた姑をいたわることに心がけ、子供たちを愛し、夫に忠実に仕えた。封建社会における女の婚家暮らしはみじめでつらいものだった。「山椒唐辛子はからいというけれど　婚家暮らしはもっともっとからい」「唖で 3 年盲で 3 年聾で 3 年　合わせて 9 年を過ごしたら　セリの花が満開した」などという歌詞がはやったのもうなずけようというものである。

ところが、姜氏の場合は例外だった。いつも折り目正しく、静かながらも家事万端に抜かりがなく、穏やかでそつなく生計を切り盛りしながら嫁の務めを着実に果たしたので、家内は常に睦まじく、和気藹々としていた。

姑の全（チョン）氏も詩をよくする知性的な賢夫人だった。彼女は女性らしい品性を備えたしっかり者の嫁が自慢で、実の娘のように可愛がった。二人の仲がそんなにもよいので、人々の羨望の的となった。

姜氏は物静かながらも、粘り強く情熱的な女性であった。幼い頃から女性としての行儀作法や務めを着実に習うかたわら、詩を詠み、書法を磨くことにも努めた。結婚後もそうした努力は続き、彼女は一生の間数多くの詩を詠んだ。『東国号譜』によると、彼女の詩集は 30 巻に及んだという。

姜静一堂の詩は、中世の女性が強いられた社会的道徳的束縛を暗々裏に指摘し、そんななかでも自らの清い良心を守り、さらには美しく開花させようとする意志を繊細に描いた作品の多いことに特徴がある。その代表作と言える詩『夜独り座って』には、彼女のそうした内面世界がよく表現されている。

夜が深まると万物が静まり返り
人影なき庭に明るい月影映えて
心は洗ったように清らかになる
さてはわが心照らしてるのかな

彼女はほかにも、嫁として、妻として、また母として家事に精励し、女性の本分を全うしようという思いをこめた詩なども詠み、それを姑に贈っている。そのようなことは、当時のような封建社会ではほとんどあり得ない出来事であった。その代表的な作品の一つは『慎んで尊姑只一堂（チイルタン）の韻を踏む』である。

このように家事の負担を担って一家の和睦に意を注ぎながらも、数多くの詩を詠んだ姜静一堂は、1832 年、61 歳の生を終えた。

彼女の没後、当時の著名な文人洪直弼（ホンジクピル）は彼女の行状を記し、墓誌銘を書いた。同じく宋穉圭（ソンチギュ）も姜静一堂の文集にあとがきを添えている。

静一堂はこのように、すぐれた詩作によって文壇でもてはやされ、社会的な評価も得たが、残念なことに彼女の詩稿はほとんど散逸し、ただ『静一堂遺稿』1 巻に 30 余編の詩のみが残されている。

ほかに、歴代の名筆の筆跡を集めた『海東名家筆譜』などの古文献に静一堂の筆跡

が実物で保存されている。姜静一堂の書体は、画が均一でありながらも優雅で、総体的に安定感を覚えさせていることが特徴である。

姜静一堂は礼儀正しく、義父母に誠意をもって仕えた高尚な道徳・品性を備えていたばかりか、詩人・書家として歴史に明確な痕跡を残した女性であった。

36. 詩人金錦園

金錦園（キムグムウォン）は、憲宗（ホンジョン）（在位 1834～1849）時代に活動した有名な女流詩人である。

19 世紀前期は、長年続いた封建社会の崩壊が始まった時期であった。この時期に至り、男尊女卑の封建的因習に縛られて、門外への出入りを抑えられていた女性たちの間で、自由な生活にあこがれを抱き、人身的束縛を振り切ろうとする傾向が強まった。

金錦園はそうした女性の一人で、女も封建的な家庭の枠を抜け出して、広い世間で自由に暮らすべきだと願った。彼女はそのような心情を『湖東西洛記』でこう述べている。

「女も人間であるのに、奥深い宮廷やひっそりした閨房に身を埋め、自由に外出できないのだから、罪もなく獄につながれている身だとどうして言えないだろうか。咲く花や昇る月、名山大川が家の近くにありながらも、心ゆくまで眺めることも遊覧もできないのだから、その享受を願う僅かばかりの思いさえ踏みにじられていないと言えようか。父や母の願いもわが娘がただの貞淑な女になることであり、女自身の自己評価もそこに留まっているのだから、なんとも情けないことだと言えないだろうか」

これは、女に生まれた己れの境遇に対する嘆きであり、女性の自由な活動を束縛す

る不合理な封建社会への憤りでもあった。

自由奔放な性格の持ち主である金錦園は、ついに門を蹴って世の見物に乗り出した。この時から彼女は、行く先々で目にし感じたことを詩に託した。

金錦園は 14 歳のとき、男装をして名勝めぐりに出で立ったのであるが、最初に選んだのは関東の名勝金剛山（クムガン）であった。

万物が蘇生し、光を放つ温暖の春。誰もがこの世に生まれて一度は必ず見たいと願う天下の名勝金剛山を遊覧することになった金錦園は、限りない喜びにひたった。金剛山は足のおもむくところがすべて絶勝であり、眺めるものすべてが絶景だった。ここかしこに広がる絶妙な風致と恍惚たる自然に酔いしれた錦園の口からは、ひっきりなしに驚嘆の詩句が吐かれた。

名勝を訪れて見ると新たなる思いに駆られ
花散り鳥囀る風趣に過ぎし日が悔やまれる
春色濃い樹林はあたかも絵のように美しい
谷川のせせらぎには心までも洗われるよう

これは、詩『金剛山に入って』の詩句の一部である。どこへ行っても新たな姿態を美しく広げて見せる金剛山の絶景に心を奪われた彼女は、今さらのように家の奥深くでうっとうしく過ごして来た日々のことが悔やまれてならなかった。

錦園は金剛山で、祖先の残した遺跡も見て歩いた。内金剛の古刹正陽寺（チョンヤン）に向かった彼女は、谷の入り口で、峨々たる歇惺楼（ホルソン ル）の雄姿を目のあたりにした。壮観だった。歇惺楼は内金剛の景勝を見はるかせる位置にあり、昔から名声が高かった。ここで錦園

はまた1首を詠んだ。

高台の歇惺楼は渓谷を圧し
山に入ればそのまま絵なり
見回す所いずこも絶勝景観
万二千の峰々はみな蓮の花

錦園は幾月も金剛山に留まって景勝や遺跡を残らず見て回り、行く先々で珠玉のような詩編を残した。

その後、彼女は忠清道（チュンチョン）に足を伸ばした。当地でも山や川の奥ゆかしい風趣に酔い、麗しい祖国の自然を誇り高くうたい上げた。

故郷の原州（ウォンジュ）に立ち寄った後錦園は、ソウルに向かった。せっかく家を出たからには、なんとしてもソウルを見物したいと思ったのである。

ソウルに到着すると、彼女は詩『ソウルを眺めて』を詠んだ。さらに数日後、市内を見て回った後は、『初めてソウルを見物して』と題する詩をものにした。

ソウルは彼女にとって新しい土地ではあったが、忘れがたい地ともなった。当地で参判（国務次官）を勤めていた金徳喜（キムドクヒ）と知り合い、やがて相思の仲となって結ばれたのである。それ以来、金錦園はソウルで詩人たちとの交遊を深め、数多くの作品を発表した。

ソウル龍山（リョンサン）の漢（ハン）江のほとりに三湖（サムホ）亭というあずまやがあった。錦園は金徳喜と連れ立ってしばしばここに遊んだ。漢江の眺めはすばらしかった。10数キロ先まで見はるかせる広い川の流れは青々とし、岸辺では水霧の中にスモモの花やクマザサがそよぎ、

柳土手のところどころには、楼閣が羽ばたきするかのような趣で立っている。青いさざ波の上に白いカモメが降り立ち、そこかしこで渋い船歌が響く川の眺めは、なんとも情趣に富んでいた。

錦園は見ても見ても心ひかれる漢江のほとりの情景を楽しみ、詩にこめた。詩『龍山の船歌』『細雨』『湖畔のあずまやで』などは、彼女が三湖亭で詠んだものである。

金錦園は、この三湖亭に著名な同好の詩人たちを招いた。1847 年、運楚《ウンチョ》（芙蓉《プヨン》）、竹西《チュクソ》、瓊山《キョンサン》、瓊春《キョンチュン》らが三湖亭につどった。錦園が各地の名勝を遊覧した際に知り合った女流詩人たちである。

春の花が先を競って咲きそめる頃、彼女たちは景勝の三湖亭で、至る所絶勝絶景の祖国の美しい自然を高らかに賛美し、生まれ育った故郷の山川をしみじみと追憶もし、漢江のゆかしい風致を楽しみながら、女性たちの素朴な生活と愛情の世界をうたった。

このとき錦園が詠んだ代表的な詩は、『龍山の三湖亭で雲楚、瓊山、竹西、瓊春と共に』（5 首）である。そのうちの 2 首をここに引用しよう。

龍山の形勝をここ江亭が盛り上げて
上がったり降りたり心のまま楽しむ
川辺の春草は綺羅を織りなしたよう
江上に映える夕日金色に輝いている

立ち昇る民家の煙に帆船見え隠れし
花の散る川のほとりから笛の音響く
無限に広がるこの風景どう楽しもう

欄干にもたれて絵のように描き見る

三湖亭における女流詩人たちの創作の集いは、朝鮮史上最初の「女流詩社」を生んだ。

李朝時代に入り 18 世紀に至ると、才能に恵まれながらも身分上の関係でさまざまの制約を受けていた平民の詩人たちが同好の「詩社」を作り、作品集を編纂することが一つの風潮となっていた。金錦園の呼びかけで生まれた三湖亭の「女流詩社」も、これに類するものであった。

亭に集まった女性たちはいずれも、すぐれた詩才の持ち主でありながらも、両班階級からさげすまれるそばめたちであった。錦園がそうであり、雲楚も成川で妓生生活をし金履陽に身請けされた女性であり、竹西も妾腹で、成長しては徐箕輔の妾になっている。こうした身の上の共通性から彼女たちは親しい友として交わり、世俗の束縛から抜け出そうとする共通の志向が名勝巡りを実現させ、ついには「詩社」を立ち上げるまでに至ったのである。こうした点で、金錦園の三湖亭における詩作活動は特別な意味を持っている。

金錦園は、平安道義州府尹（府の長官）に任命された金徳喜に従い、数年間義州で過ごした。

辺境義州府の風景は恍惚たるものが多々あった。金徳喜の赴任時は春の盛りで、北国の春景色はことさらに美しかった。

義州の風景と並んで、当地人の生活風習もまた錦園の目をひいた。なかんずく異彩を放ったのは、当地の妓生の装いだった。

金徳喜を出迎えた妓生たちは、戦笠（軍帽）をかぶり、袖のない被衣をまとった異

様な姿で、銀色の鞍をつけた馬にまたがり、2 列に並んで道案内をした。らっぱの合図と共に一斉に馬に飛び乗り、先頭に立って進むその有様は、あたかも軍隊の先備えのような観を呈した。義州は鴨緑（アムロク）江に面した西北辺境の地で、軍備に特に力を入れている関係上、新任長官の赴任を迎える妓生の行列も軍人のそれを彷彿させるようになったのであろう。

錦園は目を見張った。その日の夕方、義州城内の望新（マンシン）楼に上がった彼女は、昼見た光景を思い浮かべながら、詩 1 首を詠んだ。『望新楼に上がって』がそれである。

北辺の名勝の中でもこの亭こそ抜群なり
濃緑の馬耳（マイ）山は鴨緑江の流れと溶け合い
六通りに別れた道は遠くの入り江に続く
一万の高峰は西方の義州邑をかばい守り
砂丘上の古木は久しい歳月守衛を勤める
黒霧と冷雲は秋たけなわなることを告げ
手すりにもたれてたいまつの灯を望むに
江上に燃える紅炎は太平の世を語るもの

錦園が役所に帰って見ると、庭園では騎馬の妓女たちが武戯を披露していた。一人の妓女が両手に剣を持ち馬上で踊っているのが、あたかも空中を飛翔するツバメのようである。まさに見物であった。それは、古くからたびたび攻め込む侵略軍を駆逐してきた当地住民の尚武の気風を示す風俗であった。錦園はそんな光景を詩に詠んだ。彼女はこのように義州でも、わが目で見、体験したことを詩をもって表現したのであ

る。

金錦園はその秋、統軍亭(トングン)での開市（清国との交易を始めるに当たって市を開く行事）儀式を見物した。日暮れになると、民俗音楽に合わせて妓女たちが踊りを始め、やがて砲を撃ち、らっぱを鳴らすと、鴨緑江の岸に陣を張った軍勢がたいまつをかざすことから式は始まる。

統軍亭に立って見ると、楽隊が奏するさまざまの楽器から流れ出る清らかなメロディーは、天上から響いて来る神仙の楽の音のようであり、美しい妓女たちは対をなし、音楽に合わせて踊るのであった。楽の音が高まり、踊りのテンポが速くなると、にわかに砲声が響き、らっぱが鳴らされ、左右に一群のたいまつが現われた。同時に川岸に陣取っている軍勢がたいまつを高々とかざした。暗夜の空に星の群れがきらめき、澄んだ川の流れに赤い花が一斉に落ちるかのようなその光景は、まことに恍惚たるものがあった。

金錦園はたちまち気を取り直し、1 首を詠んだ。それが後の世まで広く知られた『統軍亭にて』である。

このように、金錦園は、社会的に深刻に持ち上がる問題に鋭利な注目を向けながらも、それを詩にするまでには至らず、深窓の暮らしに溜め息をつき、愛する人を切なく恋慕し、叶わぬ恋情のみを詩にこめていた一般の閨秀詩人とは異なり、人間としての自由な生活を渇望して果敢に実践に移し、見聞したことをたちどころに詩に移す才能豊かな女流詩人であり、朝鮮最初の「女流詩社」を立ち上げ、代表した女性であった。

37.　独特な詩才によって令名を馳せた芙蓉

芙蓉（プヨン）は平安道（ピョンアン）成川（ソンチョン）の名の知られた妓生（キセン）であった。本名は雲楚（ウンチョ）である。

容姿にすぐれ、歌と舞踊で名をなしたばかりでなく、詩作にも長けて、遠くのソウルでも噂にのぼった。たとえ卑賤な妓生とはいえ、才色を兼ね備えた彼女を指して人々は、成川の秀麗な山水の精気をはらんで生まれた女だとはやした。雲楚は 19 世紀前半期における朝鮮の才能豊かな詩人であった。

彼女は成川の生まれであった。成川と言えば古くから景色がよく、良質の煙草の産地としても知られているが、名妓の多いことでも有名な土地であった。ここで人々との交際を深め、多くの詩作を行った彼女は、「芙蓉」と号するようになった。その詩才が人々の認めるところとなると、彼女はこれを恥じ、自分は許蘭雪軒（ホランソルホン）の足元にも及ばないとして、技量の向上に心がけた。

彼女は成川を後にし、各地を歩いて朝鮮（チョソン）の麗しい山川を満喫し、平壌（ピョンヤン）とソウルでは著名な妓生や女流詩人とも交遊した。そうしたなかで、たまたま金履陽（キムリヤン）（1755～1845）と出会ったのが縁で、彼にわが身を託して妓生生活から足を洗い、詩作に専念するようになった。こうして彼女の詩才はいっそう磨きがかかり、晩年の詩編は、当代朝鮮の女流詩人中最高の境地に達した。

芙蓉は堅気になってからは、裁縫よりも読書を、養蚕よりも文筆に励み、遂に女流詩人としての自己を完成したのである。彼女は詩集『芙蓉集』に、実に 300 余編の作品を残している。そこには、故郷へのあこがれ、祖国の山川の美しさを賛えた詩、己れの境遇を嘆き、愛する人への恋情をうたった詩などを初め、多様なテーマからなる多くの詩が収められている。

詩『故郷を思う』は、雨の降る春の日、異郷で古里をなつかしむ女の切々とした心情を、素朴ながらもリアルに詠んでいることでよく知られている。

終夜降り続いた豪雨に
江水はあふれんばかり
万里の長途前にするも
帆船１艘が浮かぶのみ

わがふるさと恐らくは
春の陽射し強かろうに
この身は心うつうつと
空の果てに座している

芙蓉はしばしば長い旅に発ったが、そんな時は香気ただよう故郷の成川に思いをはせ、己れの切ない心境を詩に託したのである。

彼女は、妙香山(ミョヒャン)をはじめ音に聞こえた名所旧跡を巡りながら感じた祖国のすぐれた風致を、『妙香山にて』『暮春』『梅の花』などでうたった。

芙蓉の詩は、芸術的な面で中世朝鮮の女流詩人中屈指の境地に達した。その卓越した創作的技巧は、比喩を生き生きと駆使し、対偶を巧みに揃えることなどに集中的に表現されている。

詩『芙蓉堂で雨の音を聞きながら』は、その代表的な作品である。

数千数万の綺麗な玉
瑠璃の盤で量り見る
どれも転々ころころ
仙女がこねた金丹か

この詩で、落ちる雨のしずくを数千数万の明珠と、ころころ転がる金丹にたとえたのは、実に生き生きとした比喩である。

その他の詩にも見られる「憂いは煙霧のように消えては現われ　光陰は水のように流れて跡形もない」「徳は蘭の花に比べられ　心は明るい蓮根のよう」などの詩句は生き生きとした比喩と洗練された対偶によって詩作品の形象力を高めた実例である。

芙蓉はまた、種々の詩形式を創作に利用した。描写すべき内容や創作の契機に従って、短い形式の節句を用いもすれば、長い形式の韻文を創作しもし、中間の形式を利用することもあった。彼女の作品の中にはまた、叙情性が強いという面もある。多くの人が芙蓉の詩を愛誦したのは、素朴な女性の生活が強い叙情を帯びてリアルに胸に迫るからである。

このように生き生きとした比喩と巧みな対偶、多様な詩形式に加えて、叙情の豊かな芙蓉の詩編は、芸術的にすぐれて高い境地に達したのであった。

芙蓉のこうした創作手法が総合的に体現されているのは、『層詩』である。この詩は、形式がユニークで、種々の形象手法が多様に駆使された彼女の代表的な作品だと言える。

別　　　　　　　　　　別れて

思	考える
路遠	路は遠く
信遲	便り遅し
念在彼	思いかしこ
身在茲	身はこちら
巾櫛有涙	巾櫛涙に濡れ
扇環無期	扇環興味なし
香閣鐘鳴夜	香閣の鐘鳴る夜
練亭月上時	練亭に月昇る時
倚孤枕驚残夢	独り枕の夢は醒め
望帰雲長遠離	雲眺め離別を嘆く
日待佳期愁屈指	佳き日を指折り待ち
晨開情礼泣支頤	晨（あした）書簡を読み涙ぐむ
……	……

朝遠望暮遠望郎何無心	朝な夕な空しく恋い焦がれ
昨不来今不来妾独見欺	昨日も今日も待ち草臥れる
溳江成陸地後鞭馬騎来否	大同（テドン）江陸に変わり馬で来るか
長林変大河初乗船訪渡之	長林（チャンリン）大河に変わり船で帰るか
見時少別時多世情無人可測	逢い難く別れ易いのは人の常か
好縁断悪縁回天意有誰能知	好縁断ち悪縁強いるのは天意か

38. 詩人崔松雪堂

崔松雪堂（チェソンソルタン）は封建社会末期の有能な女流詩人であった。彼女は 50 編の国文の詩歌を発表し、また、時代的な志向をもって当代の現実を批判したすぐれた詩編を多数創作して、令名を上げた。

松雪堂は、1855 年、慶尚北道（キョンサン）金泉（キムチョン）で、枳南居士（チナムゴサ）崔昌煥（チェチャンファン）の長女に生まれた。彼女の遠い先祖には、16 世紀末、党派争いの犠牲になった崔永慶（チェヨンギョン）がおり、曾祖父は犒軍（軍隊の食事担当官）という低い官職にあったが、1811 年の平安（ピョンアン）道農民戦争の際農民軍と連係したかどで捕らわれ、獄死した。祖父もまた、同じ罪状で全羅（チョンラ）北道古阜（コブ）に流され、当地で世を去った。母方の親戚も平安道農民戦争に加担したことで、政府の迫害を受けた。

このような家門に生まれた松雪堂は幼い頃からいつも不安のなかに溜め息をつき

ながら育った。早く父に死なれた彼女は、男の子のいない家で総領息子の役目を果たさなければならなかった。

独り身の母親を養いながら松雪堂は、わが家に不幸の禍根だけをもたらす社会を恨んだ。彼女は結婚を断念し、針仕事で生計を維持し、苦しくなるばかりの暮らしを打開しようと努めた。しかし、女の痩せ腕では何事も意のままにならず、母親に孝養を尽くすことも難しかった。

松雪堂は男に生まれなかったわが身を嘆きながらも、暇を見つけては読み書きを習い、詩文に親しんだ。そんな努力の甲斐があって彼女は、筆を取って女の憤懣を訴え、時代に抗する正義の声を上げることができるようになった。

彼女は、自分の号を詩に託して、こう説明している。

…　…　…

千種万種の草木のうち
わが身の類もあろうか
白雲節めでたいけれど
白い雪の中にこそ輝く
蒼松白雪二つの文字を
合わせると松雪となる

この詩で言うように、白雪の中で青さを誇示する松を、彼女は模範にしたかったのである。松雪堂は、松の木を「丈夫」「豪傑」「烈士」「忠臣」などになぞらえ、よしんば女性の身ではあっても、それらを鑑にしようとしたのは、己れの恵まれない境涯の

ためだと訴えた。

　このように松雪堂は女に生まれはしたが、「白雪」中の「蒼松」のように不屈に前途を切り開いて行こうという意志と、祖国に一生を捧げようとの気概を持し、60 年の生涯を生娘として、詩流の中に生きた。

　彼女は、青松のように不屈の気象と強い意志をもって正義を志向しながら生活を切り開き、社会の現実を新しい見地をもって体験し、それらを詩にこめることに心血を注いだ。

　『松雪堂集』に収められた詩編は、崩れつつある封建社会から脱して近代志向へと進む時代的現実を体現した詩人の敏感かつ進歩的な精神世界と、すぐれた創作的内容を生き生きと見せている。

　松雪堂は、家庭の中に縛り付けられて不遇な身空を嘆き、恋情におぼれていた過去の閨秀詩人とは異なって、封建社会の末期に至りいっそう深刻に露呈する社会の否定的側面を鋭く見つめて、当代の現実を批判し、新しいものと真理に心を寄せ、正義の社会を渇望したのであった。

　彼女のこうした思想・精神世界は、封建支配層と地主階級の苛酷な搾取と収奪の対象となって飢餓に苦しむ、農民の悲惨な境遇に同情することで表現されている。

　例えば、詩『盛夏に草取りをする農夫たち』で、焼けつくような陽射しにさらされた広い田畑でちびた手鍬を使って苦役にあえぎながらも、昼の休みに温かい食事を運んで来る人もいない農民の哀れな情状を、素朴な詩的表現を通してリアルに画き出している。

　詩『農家の風景』では、女性のデリケートな詩的感覚をもって、父母にいたわれながら楽しく遊び回る年頃の子供が、一日中野良に出て雀の群れを追い、疲れ果てて泣

いている姿を巧みに詠じて、幼い子供たちまでもが思うままに遊べず、喜びを知らぬような生活、こんな現実を生む社会に対して鬱憤をぶちまけている。

彼女はここにとどまらず、すべてが混乱し、無秩序が蔓延する封建社会末期の現実を批判し、新しい明るい世の中を憧憬し、渇望した。

詩『暗夜にうたう』では、当時の社会の現実を、世上万物の形体すら見分け難い暗い室内にたとえながら、明るい世の中にあこがれる詩人の心情を月と引き較べて、「何故にまん丸い月を浮かべて　森羅万象を明るく照らすのか」と嘆き、詩『是非』は、党争で汚れた、善と悪、肯定と否定を弁別できないほど混濁した当時の社会を辛辣に批判している。

彼女の詩はまた、男女の社会的不平等を非難し、女性も男性と同じく社会生活に自由に参加すべきだと主張している。金剛(クムガン)山見物を念願し、10 年後目的を果たした松雪堂は、女の身で凌波楼(ルンパル)に上がった自分を見て驚く表訓(ピョフン)寺の僧侶たちに、「寺のお坊さんたちよ　私を見て笑うでない　こんな遊覧どうして　男だけすべきなのか」と言ってのけ、爛漫と花の咲き乱れるうららかな春の日も家庭や男に縛りつけられて、思いのままに美しい自然を満喫できない女のやるかたない心境を代弁することで、男尊女卑の観念にこり固まった封建社会に憤りをぶつけもした。

このように松雪堂は、新しい時代的志向と結び付けて、没落一途をたどる封建社会の現実を批判的にうたったのであった。

松雪堂は 50 編のすぐれた国文詩歌を作り、中世朝鮮の女性詩歌の発展に異例の功績を積んだ。

彼女は、多様なテーマの芸術性豊かな歌詞作品を残している。それら国文の歌詞作品中には、自然をうたい、己れの体験世界をうたったもの以外に、封建社会末期の時

代相を見せる数編の紀行歌詞形式の作品もあり、異彩を放っている。

近代文明への志向が強かった彼女は、首都ソウル（漢陽）に上り、動物園、植物園、博物館などを見て回った後、ソウルの現実をあるがままに描写した歌詞『漢陽城を遊覧して』を詠んだ。この作品は、松雪堂が前代の女性とは違って、女性的な個人情操の域を脱し、時代と現実により積極的な関心を向けたことを示している。

彼女は、種々の多様な創作技法を駆使して歌詞を高い水準で形象することで、その秀でた才能を余すところなく発揮した。彼女は『向日花』『明月』『蒼松』『白雪』など多くの作品の中で、素朴かつ生活的な語彙を適切に配して歌詞の思想・内容を明確に表現する一方、強調と反復の手法、問答の形式と対照の技巧を巧みに使い分けて、歌詞の形象性と感化力を盛り立てた。

このように松雪堂は、国文詩歌の創作で、女流詩人としての、新たな高い境地を開いたのであった。彼女の 50 編の国文歌詞は、中世女性の詩歌遺産を一段と豊かにし、後の世の人が近代における詩歌創作過程を考察する上での貴重な踏み石となった。彼女が生涯をかけて創作した数百編の詩編は、中世末期朝鮮(チョソン)の女流文学の発展に実に大きな寄与をなしたと言えよう。

39. 朝鮮独立軍の女傑李寛麟

反日愛国の志士李寛麟(リグァンリン)（本名李長青(リジャンチョン)）は平安(ピョンアン)北道朔州(サクチュ)郡の中産階層の家庭に生まれた。父親は数ヘクタールの土地と山林、10 間もの家を持つ自作農であった。

12 の年に母親に死なれた李寛麟は、家事に追われて、学校へ通うことができなかっ

た。亡妻の 3 年忌を済ませた父親は後添いをめとったが、寛麟よりわずか二つ年上の16 歳の娘だった。

父親はきわめて封建的で、寛麟が 15 歳になるまでも学校に上げようとせず、適当な相手を見つけて嫁にやることばかり考えていた。ほかの子供たちが学校へ通うのがうらやましくて、勉強をさせてほしいと、彼女は何度もねだったが無駄だった。腹を立てた寛麟は 15 の年に、父親が外出した隙を狙って家を抜け出し、鴨緑（アムロク）江の氷の穴の前に服と履き物を脱ぎ捨てて、義州（イジュ）へ向かった。ここで遠縁にあたる人を尋ね、その世話で、養実（ヤンシル）学校に入ることができた。

宿願を果たした彼女は、半年ばかり悠々と勉強した後の秋のある日、父親に手紙を書いた。娘が身投げしたとばかり思い、悲嘆に暮れていた父親は、手紙を読んで大喜びし、取るものも取りあえず義州へ駆けつけた。半年ぶりに娘に会った彼は、あたかも死人が蘇ったかのように手放しで喜び、もうお前の勉強を妨げはしない、入り用があったらいつでも手紙を寄こせと言い、大金を与えて帰った。それ以来、寛麟は学費の心配をすることなく勉学に励んだ。彼女の学業成績はクラスのトップを占め、生活も模範的であった。

卒業後、平壌（ピョンヤン）女子高等普通学校の技芸科に推薦されて平壌へ移った彼女は、ここで1 年、2 年と勉強を続けるうちに、反日地下組織朝鮮国民会の影響を受けた。彼女は、不屈の反日革命闘士金亨稷（キムヒョンジク）先生（金日成（キムイルソン）主席の尊父、朝鮮国民会の結成者）に会って、その人品と見識に感嘆し、先生に従って朝鮮の独立に生涯を捧げようと決心した。彼女は、1917 年 8 月、先生の推薦で朝鮮国民会に入会した。それ以来、彼女は朝鮮国民会のれっきとしたメンバーとして、金亨稷先生の「志遠」の思想を実現すべく積極的に活動した。とりわけ、平壌女子高等普通学校、崇実（スンシル）中学校、崇義（スンイ）女学校、光成（クァンソン）高等

普通学校などで、愛国的学生を結束する地下工作を熱心に進めた。

李寛麟は、金亨稷先生が「朝鮮国民会事件」で、1917 年秋から 1 年間獄につながれていた時、三日にあげず面会に行き、外部との連絡をつけたり、先生の指示をもらって帰ったりした。

封建色の濃い当時の世情で、若い娘が監獄、それも思想犯の面会に行くことなどはよほどの決心がなければできず、そんなことが世間に知れたら貰い手もなくなるであろう。けれども、彼女は危険をかえりみず、先生の活動を誠心誠意助けた。監獄の看守も、彼女の悪びれしない毅然とした態度と、モダンな姿態に気おされて、慎重に対応したという。

1919 年 3 月 1 日、日本帝国主義の 10 余年にわたる野蛮な武断統治の下で酷烈な蔑視と虐待に苦しんできた朝鮮民族の積もり積もった憤りと怨恨は、3. 1 人民蜂起となって爆発した。

平壌では、金亨稷先生の革命的影響を受けた崇実中学校（先生の母校）の愛国的青年学生が、反日独立万歳のデモの先頭に立った。李寛麟も勇躍デモに加わり、勇敢にたたかった。デモが蹴散らされると、寮に逃れてちょっと息を整えては、また飛び出して万歳を叫び、学友たちを励ました。

3. 1 人民蜂起が失敗し、デモの首謀者に対する検挙旋風が吹き荒れると、彼女は郷里に帰り、職業的な独立運動家になった。亡国の運命のもとでは、のうのうと学校で勉強ばかりしていられないと思ったのである。

まだ二十の美貌の李寛麟に言い寄る若者は多かった。多年間受けた教育のおかげで豊かな知識を身につけ、生活に困ることもなかった彼女は、普通学校などで教鞭を取り、立派な男性を夫に選んで平穏な生活を送ることもできた。が、彼女は教壇や安楽

な奥座敷を選んだのではなく、朝鮮独立の道で己れの青春と理想、抱負を実現しようと決心したのであった。

彼女は、日本官憲の弾圧と監視がきびしくなり、郷里で独立運動を続けることが困難になると、悪質な警官二人を射殺して鴨緑江の氷の穴に投げ込み、その足で対岸に渡り、独立軍に入隊した。その後の 10 余年間、彼女は祖国の独立をめざして勇敢にたたかい、朝鮮女性の気概と不屈の意志をいかんなく誇示した。

金亨稷先生は、そうした彼女に大きな信頼を寄せ、しばしば重要な任務を与えた。信頼にこたえて、寛麟は、平壌やソウルをはじめ、国内の各地に足を伸ばして、連絡任務を果たしもすれば、女性啓蒙活動など多様な工作任務も立派に遂行した。その間、日に 40 数キロの道を歩くのはありふれたことであった。彼女は若い娘の身で白頭の山並みを往来し、朝鮮の独立に献身した最初の女性であった。

このように、人生の最も熱い祝福を受けるべき黄金のような青春時代に彼女は、拳銃を手にし、朝鮮と満州の広野をまたにかけて独立運動に専念したのである。

1926 年、金亨稷先生が病死すると、朝鮮独立運動は紆余曲折を経るようになった。

李寛麟は先生の死後、若き日の金日成主席に会い、主席が華成義塾（民族主義団体正義府所轄の軍事政治学校）を中退した訳と、吉林で共産主義運動を進めるという抱負を聞いて、強い同情を寄せ、主席の決心を支持した。とはいえ李寛麟は、共産主義に理解を示しながらも、あくまでも正義府の枠を抜け出せないでいる民族主義左派であった。

その後いくばくもなく、金亨稷先生と最も親しかった正義府司令呉東振（オ ドンジン）が日本軍警に捕らわれるという出来事が起きた。当時、李寛麟も国民府（正義府、新民府、参義府が統合してできた民族主義団体。後に著しく反動化した）テロリストの絶えざる追

撃と脅迫を受けて、あちらこちらと隠れ歩いた末、ある中国人と結婚し、家庭に埋もれてしまった。

祖国の解放後、彼女は故国に帰りたいという衝動に駆られながらも、多くの孫や子を捨てる決心がつかず、懊悩の日々を送った。

彼女は老年に至って、金日成主席が自分のことを忘れず、一度会いたいと言っているという便りに接し、主席に自分の生活経緯をしたためた手紙と一枚の写真を送った。

1978 年 6 月、彼女は 80 という高齢で、ひとたび家を出れば、再び戻れるかどうかわからぬ遠くの他郷に愛する子や孫を残し、独り身で祖国に帰る大勇断を下した。これは、李寛麟の熱い愛国心と高潔な人生観のなせる業であった。

彼女は帰国後、金正日（キムジョンイル）総書記の配慮で専門病院で治療を受けた。

李寛麟は、1983 年 10 月 30 日、88 年の生涯を終えた。金日成主席と金正日総書記は、祖国と民族に捧げた李寛麟の生を高く評価して、盛大な葬儀をとり行い、遺体を愛国烈士陵に安置するようはからった。

40．3.1 運動の殉国の娘柳寛順

5000 年を越える朝鮮民族史上、侵略者を撃退する戦いに、わが身を惜しげもなく捧げてたたかった女性は数多い。そこには、日本帝国主義の非道な朝鮮占領に抗する全民族的な闘争に花のような青春を決然と捧げた、殉国の娘柳寛順（リュグァンスン）もいる。

彼女は、1904 年 3 月 15 日、忠清（チュンチョン）南道天安（チョンアン）郡木川（モクチョン）面芝霊（チリョン）里で、柳重権（リュジュングォン）の末娘として生まれた。その家門からは儒学者も現われ、義兵（民兵）長として名望の高かっ

た柳麟錫（リュリンソク）のような人物も世に出た。父親の柳重権も民族啓蒙運動に並々ならぬ熱情を注ぎ、世人の尊敬を受けていた。寛順はこのような家庭的影響のなかで、愛国の芽をはぐくんだ。

彼女が生まれ、成長していた頃は、1905 年 11 月の日本帝国主義者によるいわゆる保護条約「乙巳 5 条約」のでっち上げと、つづく 1910 年 8 月の「韓日合併条約」の捏造で朝鮮の国権が日本に完全に奪われ、総督政治が強行されていた暗黒の時期であった。

日本帝国主義者の民族的蔑視と虐待、苛酷な搾取と抑圧は、柳寛順の一家にも例外なく及んだ。彼女はそのようななかで、幼い時から日本帝国主義への反抗心を固めていった。

1919 年、日本帝国主義の野蛮な武力占領 10 余年間に積もりに積もった朝鮮人民の怒りと不満は、全民族的蜂起として激しく爆発した。

その年の 1 月、国王高宗（コジョン）が日本侵略者の奸計で毒殺され、3 月 1 日、葬礼が挙行されると、朝鮮人民の憤怒は一挙に爆発したのである。3 月 1 日正午、平壌（ピョンヤン）とソウルでは大半の市民が決起し、「朝鮮独立万歳！」「日本人と日本軍は出て行け！」と叫びながら怒濤のように市街を行進した。

デモ群集の中には、15 歳の若い娘柳寛順もいた。

3.1 人民蜂起後の反動で母校が閉鎖されると、柳寛順は故郷の人たちをあくまでも反日闘争に呼び起こすべく、天安、燕岐（ヨンギ）、清州（チョンジュ）、鎮川（チンチョン）など各地の学生、宗教者、儒生を訪ね歩き、独立運動に立ち上がるよう熱烈に呼び掛けた。彼女は、4 月 1 日を期して載寧（チェリョン）山鷹峰（メ）の頂でのろしを上げることで各地方に合図を送り、デモを組織するための綿密な準備を行った。

その日は市日で、街は朝から人々でにぎわった。正午、寛順は群集の前に立ち、朗々とした声で呼び掛けた。

「みなさん！　わたくしたちは 5000 年の悠久な歴史を誇る独立国の人民です。わたくしたちは 10 余年間の侵略者の圧政の下で、いっさいの自由と権利を奪われてきました。先の 3 月 1 日、平壌とソウルではわが国がれっきとした自主独立国であることを宣言し、独立万歳を叫び、日本帝国主義の蛮行を糾弾しました。同時に三千里祖国の津々浦々でも、朝鮮民族はみんな万歳を叫びました。みなさん、わたくしたちの町でも国を取り戻すための独立万歳を叫びましょう」

寛順の力強い呼び掛けに群集は勇気を奮い起こし、独立のために勇躍決起しようという覚悟を固めて、「朝鮮独立万歳！」を高らかに叫び、市街を縫って行進した。群集の気勢に驚いた憲兵隊は、軍刀を振るい、銃を撃ちながらデモ隊を野獣さながらに弾圧した。大勢の人が血を流して倒れ、市場はたちまち血の海と化した。寛順の父母も傷つき倒れた。寛順は、「貴様たち！　わが国の仇敵、親の敵どもめ！」と絶叫し、群集の先頭に立って屈することなくたたかった。

狂暴な日本官憲はデモを無慈悲に弾圧し、主謀者の逮捕に血眼になった。柳寛順も獄につながれた。

彼女は、法廷で単独裁判をあくまでも拒否し、デモの正当性を主張してやまなかったが、最終判決で懲役 7 年の刑に処せられた。判決後西大門(ソデムン)刑務所の冷たい監房に移されてからも、彼女は「朝鮮独立万歳！」を叫び続けることで、不屈の意志を誇示した。

翌年の 3 月 1 日、彼女は同志たちと示し合わせて「朝鮮独立万歳！」を絶叫し、この日を意義深く迎えた。

獄窓で病を得て彼女は次第に衰弱し、同年 10 月、ついに帰らぬ人となった。

柳寛順は獄死したが、朝鮮民族は、彼女を 3.1 運動の殉国の娘として今も追憶している。

41. 作家姜敬愛

ある日、暮らしに窮していた姜敬愛（カンギョンエ）は大喜びした。いまかいまかと待った原稿料を貰ったのである。

（助かった。これだけあれば当分は心配ない。食費を切りつめたらオーバーなども買えるし、欲しくてたまらなかった腕時計だって買える）

彼女の胸はふくらんだ。

夕方、帰宅した夫を、敬愛はにこにこして迎えた。ところが、なぜか夫の表情は暗かった。

「あんた、何かあったの」

「君、原稿料を貰ったんだろう」

夫はどこで聞いたのか、こう尋ねた。

「そうよ。これだけあったら、当分暮らしに困ることないわ」

しばらく窓の外を眺めていた夫が、思い切ったような口ぶりで言った。

「その原稿料だがね……。ここ何日間何も食べられずに寝込んでいる友人に回してあげようよ。ぼくたちは、どうにかこうにか食っているんだから」

茫然と夫の顔を眺めていた敬愛は、むっとして外へ飛び出した。

（自分が何だというので、人の原稿料をああしろこうしろと言うのよ）

考えるほどに涙が出て仕方がなかった。でも彼女はすぐに冷静を取り戻した。飢えに苦しんでいる友人……いやこれは日本帝国主義の圧制のもとにある全朝鮮人民の痛ましい現状である。こう思い返した敬愛は、利己的な自分を恥じて、夫の前へ戻った。

「あたしがよくなかったわ。あんたの気持ちをちっとも理解できなかったもの。隣人を愛せない人間がまっとうな作家になれるかしら」

夫は妻の手を取って、ほほえんだ。

姜敬愛は黄海(ファンヘ)南道長淵(チャンヨン)郡のある作男の家に生まれた。五つの時、父親が亡くなり、暮らしに窮した母親は、崔都監(チェドガム)という年寄りの後妻になった。幼い敬愛は義父の家でいつもいじめられ、おなかをすかしながら育った。後日、彼女は、その頃のことを自叙伝にこう書いている。

「義父には息子と娘がいたが、手がつけられないほど粗暴で、ほとんど毎日小さい私を殴ったり、つねったり、髪の毛を引っ張ったりしていじめるので、家にいるのが苦しくてたまらなかった」

10 歳を過ぎて彼女はやっと小学校に入り、勉強を始めたが、やがて小説に夢中になり、目につく小説は手当たり次第に読んで、近所の人たちにあらすじを話して聞かせた。それで大人たちは、彼女を「ドングリ小説屋」と呼んだものである。18 歳の時、姉の夫の世話で平壌崇義(ピョンヤンスンイ)女学校に入学した。

ここで彼女は、当時急速に普及していたマルクス・レーニン主義思想と労働運動の影響の下に先進思想を学び、合法的な反日組織である親睦会や読書グループに加わって階級意識を培い、反日思想を固めた。

3 年生の時、同盟休校の先頭に立ってたたかい、警察に逮捕された彼女は、出獄後、

郷里の長淵に帰り夜学で教鞭を取って村の貧しい子供たちを教えるかたわら、創作を志して余暇を読書と習作に打ち込んだ。

1929 年、中国東北部の間島地方に渡り、龍井市一帯で 2 年ほど臨時教員などをした後、1931 年、郷里に帰って作品を書き始め、旺盛な創作意欲をもって、わずか 1 年の間に長編小説『母と娘』(1932)をはじめ短編小説『その女』(1931)、『金持ち』(1932)、それに数編の随筆をものにした。

1932 年、結婚した彼女は夫と共に再び龍井に移り、せわしい家事のかたわら 6、7 年間、著作に励んだ。間島における生活は、彼女の創作に大きな影響を及ぼした。

彼女が最初間島へ渡り、2 年後故郷へ帰ることになった時の心境をしたためた随筆『間島よ、さようなら』には、こんなくだりがある。「列車は……喘ぎあえぎ京城(キョンソン)へと走る。でも私の心は反対の方向へ、間島に向かって後ずさりする。……間島よ、力強く生きておくれ。不屈にたたかっておくれ。そして、私をいつまでもあざ笑っておくれ」

車窓の外に流れる祖国の地の痛ましい風景を眺めながら、彼女の心は間島に引きつけられていたのである。その心は、日本帝国主義侵略者とのたたかいに沸き立つ間島、そこでたたかう人たちに引かれる心であり、彼らへの信頼と期待の心であった。こうした心境が、郷里に帰って 1 年もたたずに再び間島に向かわせ、当地で健康を害するまでたゆみなく創作を続けさせたのである。とりわけ、間島で繰り広げられた抗日革命闘争は、彼女の小説執筆に大きな影響を及ぼした。

彼女は、「カップ(KAPF、朝鮮プロレタリア芸術同盟)」のメンバーではなかったが、プロレタリア文学の代表的作品の一つである長編小説『人間問題』を世に出し、中編小説『塩』のような意義ある作品を残したすぐれた女流作家であった。

彼女の短編小説には、『菜畑』(1933)、『サッカー戦』(1933)、『解雇』(1935)、『原稿料 200 円』(1935)、『帽子』(1935)、『煩悩』(1935)、『地下村』(1936)、『山南』(1936)、『闇』(1937)などがよく知られている。

姜敬愛は、貧しく虐げられた人々の悲惨な境遇を温かい同情心をもって描写した。作品の主人公たちは、無産民衆のなかでも最も虐げられた最下層の人たちであり、とりわけ 2 重 3 重の差別と蹂躙に苦しむ勤労女性が大きな比重を占めていた。彼女たちはいずれも、気立てのよい純な女性として描かれている。

姜敬愛は階級的意識と人道主義的情熱をもって虐げられた被抑圧人民の精神的美を創造し、彼らを蹂躙し、冒瀆する者たちを鋭く糾弾し、抑圧された人々のなかに芽生え、大きくなる抵抗意識を明確に表現した。

1930 年代末、彼女は健康がすぐれず、再び帰郷して病床に呻吟した末、朝鮮解放の前年、惜しくも世を去った。

彼女が解放前の朝鮮文学界に残した業績は、今日も人々の記憶のなかに生きている。

42. 白善行

19 世紀末～20 世紀初めの朝鮮近代末葉の歴史には、慈善事業で令名を残した女性が記録されている。彼女の性は白(ペク)で、本名は知られていないが、のちに白善行(ペクソンヘン)と呼ばれるようになった。

平壌(ピョンヤン)の貧しい家庭に生まれ育った彼女は、一度決心したことはなんとしてもやり遂げずにはおかぬ強い意志と、弱者の不幸は黙って見ておられない義侠心の持ち主であ

った。

白善行は世の一般の女のように、しっかりした男を夫にし、大勢の子宝に恵まれて、狭い家でもいいから楽しく暮らしたいという素朴な夢を抱いていた。しかし酷薄な現実は、彼女のこのささやかな夢すら無残に踏みにじってしまった。

夫の安（アン）某は不遇な身をかこつばかりで、妻に何もしてやれない無能な貧乏者であった。けれども、彼女は失望することなく、気強く暮らしを立てていった。とはいえ、生活は、幸せを渇望する彼女に不幸ばかりもたらした。夫が急死し、16 の身でやもめになった彼女の顔には、早くも皺が寄り始めた。

近所の人たちは彼女を憐み、気を落とすなと励ました。これに力を得た白寡婦は、きっと力強く生きようと決心した。彼女はその後、花売りをしたり、もやしや豆腐を作って売ったりして、1 日 1 日をどうにか生きのびていった。そうこうしているうちにいくらかの貯金ができると、それを元手にして豚を買い、夜は機を織った。数十年の間、粥をすすって過ごす日はあっても、溜めたお金を無駄に使うようなことはしなかった。こうした努力は実を結んだ。営々として数万円のお金を蓄えた彼女は、一身の栄耀栄華にではなく、貧しい哀れな民族、日本帝国主義に踏みにじられた人民のための事業に投じた。世人は、彼女の善行を賞賛してやまなかった。

こんな美談もある。

毎年夫の墓参りをしていた彼女は、途中にある古びた橋が長雨にあうと水に浸かり、人々を困らせていることを知って、ためらいなく大金を出し、そこに石橋を架けた。1908 年のことで、それ以来橋の名は元の「ソルメ橋」からいつとはなく「白寡婦橋」と呼ばれるようになり、それが固有の名称になってしまった。

日本帝国主義の野蛮な植民地支配のもと、絶対多数の貧しい人たちは糊口をしのぐ

ことすらままならなかったが、金持ちたちはわが利益と栄耀のみを追い求めていた。そんな当時、白寡婦が世人のために尽くした至誠は、まことに高潔なものであった。やがて人々は、彼女の美徳をたたえて白善行と呼ぶようになった。

白善行は隣人とは仲良く過ごす純朴な女性であった反面、排日精神に徹していた。彼女が日本人資本家に一泡吹かせて喝采を博した話がある。

土地を買って耕作もすれば、山を入手して伐採もしていた白善行は、誰一人顧みない荒れ地の石山（平安(ピョンアン)南道江東(カンドン)郡万達(マンダル)面勝湖(スンホ)里）を、いつかは何かの役に立つ時があるだろうとして、坪当たり 30 銭の廉価で買った。この石山は石灰岩の山であった。

当時、一攫千金を夢見て日本から渡って来た小野田という財閥が、セメント工場の経営に必要な石灰岩の埋蔵地を調査し、白善行の石山に目をつけた。小野田は、おろかな朝鮮の女を丸め込んで山を買い叩こうとした。朝鮮で主人面をする日本人に憎しみを抱いていた白善行は、話を持ちかけられると、小野田をこっぴどい目に合わせてやろうと思った。

「奥さん、その山をわたしに譲ってくれるなら、代金は満足がいくように差し上げますよ」

小野田は狡猾な笑みを浮かべて、こう持ち掛けた。

「そうねえ。あの山は先祖から譲られた大事な山ですから、あんまり安く手放すわけにいきません。でも是非とおっしゃるなら、ちょっと損をしますけど坪当たり 30 円で譲渡しましょう」

小野田は驚いた。先祖から譲られたなど真っ赤な嘘だということは知らぬわけでなかった。それにしても、先祖をうんぬんして、坪当たり 30 円を出せとはあまりにも欲深いと思った。

「いくらわしが大きな財閥であっても、そんなべらぼうな金を出せるものか。使いようのない荒れ地を、坪当たり 30 円を出せと言うのは、泥棒にも等しい要求だ」

小野田は袖をたくし上げて、声を荒らげた。たが、白善行はひるまなかった。

「それじゃあんたたちは、ひとの国に入り込んで一文なりとも払ったのですかい。誰に向かって泥棒呼ばわりするんです。盗人猛々しいとはあんたのことよ。あたしゃあんたに、あの山を無理に買ってくれと頼みはしなかったからね。いやならほかへ行ってみるがいい」

白善行は吐き捨てるように言って、立ち上がった。

小野田はあわてた。余計なことを言って、眠っているトラの髭を引っ張ってしまったと後悔し、仕方なく煮え湯を飲まされるような思いで、1 坪 30 円の契約書にはんこを押した。こうして白善行は、元の 100 倍の値で山を売ったのである。噂を聞いた人たちはみな、気がせいせいしたと言って喜んだ。

「そろばん玉もろくにはじけず、モロコシの茎の皮に爪の跡をつけながら計算する純朴な朝鮮の女が、詐欺とペテンをこととする日本財閥との取り引きで大儲けをした」

彼らは文書 1 枚で朝鮮の全国土を日本帝国主義に明け渡した「乙巳五賊」の売国行為に比べて、白善行のとった行動は実に愛国的なものだとして絶賛した。

白善行はその後も、巨額を投じて学校や公会堂などを建て、平壌光明（クァンミョン）小学校、彰徳（チャンドク）学校、平壌崇徳（スンドク）女学校に広い田地を寄贈して、民族啓蒙運動と教育事業に貢献した。

彼女は生徒たちにつねづね、「皆さんは朝鮮の将来を担って立つ息子娘です。眠いからといって寝てはならないし、遊びたいからといって遊んではいけません。また、勉強が嫌いだといって本をかばんに押しこんでもいけません。一所懸命に勉強をするのです。みなさんがしっかり勉強したら、わが国はすぐ独立できるのですよ」と教え

さとしたものである。

彼女は80の高齢で世を去るまで独身で過ごした。

白善行が死亡すると、彼女を追慕する教育団体、宗教団体、青年会、婦人会などの代表で葬儀委員会が立ち上げられ、立派な葬礼がとり行われた。

その後彼女の墓地には八角亭墓角像が立てられ、毎年秋になると、多くの人が墓参りをしたという。

白善行の生涯は、国家民族に尽くした人は後世の人たちの記憶の中に永遠に生きるということを語っている。

歴史に名を残した朝鮮の女性たち

著者： 金恩澤　　玉明心

訳者： 金竜一　　韓 哲

編集： 李順英

ㄱ-189037

http://www.naenara.com.kp

朝鮮・平壌

チュチェ100(2011)年

ISBN 978-9946-0-0712-0

9 789946 007120 >